財団法人山武郡市文化財センター報告書　第82集

遠山瓜ヶ作谷遺跡
遠山瓜ヶ作台遺跡

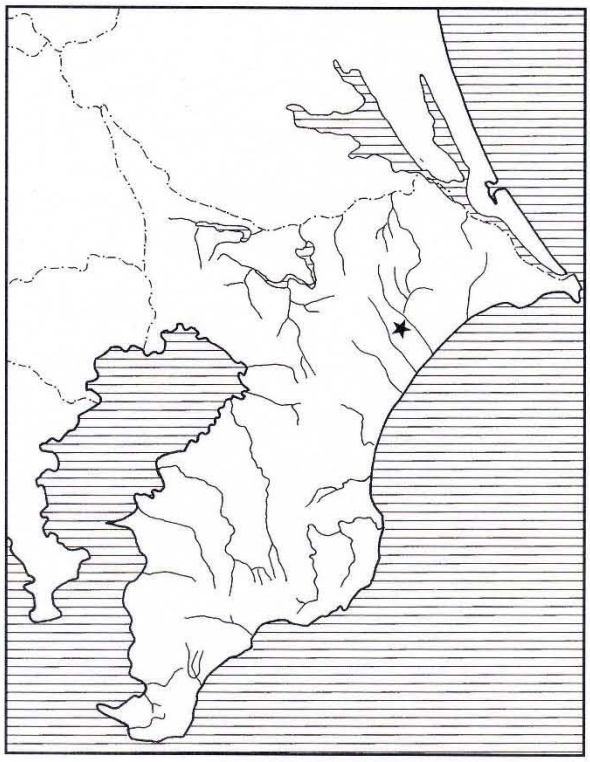
－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ－

2003

千葉県道路公社

財団法人　山武郡市文化財センター

遠山瓜ヶ作谷遺跡
遠山瓜ヶ作台遺跡



序　　文

遠山瓜ヶ作谷遺跡及び遠山瓜ヶ作台遺跡が所在する横芝町は、千葉県の北東部に位置し、下総台地北東部の一角を形成しています。温暖な気候と緑豊かな自然に恵まれ、台地には３万年前の先土器時代から悠久の歴史が刻まれています。

成田空港開港を契機として、周辺地域である横芝町にも、空港に関連する開発、ゴルフ場造成、工業団地造成などの開発が行われるようになりました。しかし、先人が残した貴重な文化遺産が失われてきていることも、また事実です。私たちは、文化財保護と開発との調和を図りつつ、こうしたものを後世の人々に伝えていかなければならないと思っています。

遠山瓜ヶ作谷遺跡及び遠山瓜ヶ作台遺跡は、有料道路建設に先立ち、発掘調査されました。本書はその調査成果をまとめたものです。遠山瓜ヶ作谷遺跡では谷部に形成された古墳時代後期における集落の一様相が明らかになりました。

本書が今後、研究資料の提示にとどまることなく、より多くの方々に地域史の理解を深める資料として活用されることを願うとともに、文化財保護思想の涵養に役立つことを期待します。

最後になりましたが、今回の調査の実施にあたり御指導、御協力を賜りました関係諸機関並びに関係者各位に心より感謝申し上げます。

平成15年12月

財団法人山武郡市文化財センター
理事長　小倉　幸

例　　言

1　本書は、銚子連絡道建設事業に先立つ遠山瓜ヶ作谷遺跡及び遠山瓜ヶ作台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遠山瓜ヶ作谷遺跡は千葉県山武郡横芝町遠山字瓜ヶ作77番地他に、遠山瓜ヶ作台遺跡は同町遠山字瓜ヶ作74-1番地他にそれぞれ所在する。

3　調査は、千葉県道路公社の委託により、千葉県教育委員会及び横芝町教育委員会の指導を得て、財団法人山武郡市文化財センターが実施した。

4　発掘調査面積は、下記の通りである。

遠山瓜ヶ作谷遺跡	確認調査面積	（上層）2,700㎡の10%	（下層）2,700㎡の４%
	本調査面積	（上層）1,280㎡	
遠山瓜ヶ作台遺跡	確認調査面積	（上層）3,800㎡の10%	（下層）3,800㎡の４%

5　調査及び整理・報告書作成の期間は下記の通りである。

遠山瓜ヶ作谷遺跡	確認調査期間	平成13年２月２日～平成13年２月28日
	本調査期間	平成13年３月１日～平成13年３月29日
	整理期間	平成15年５月１日～平成15年６月30日
遠山瓜ヶ作台遺跡	確認調査期間	平成13年２月５日～平成13年３月14日
	整理期間	平成15年５月１日～平成15年６月30日

6　発掘調査は、調査課長　大野康男の指導のもと、調査係長　渡邊修司（遠山瓜ヶ作谷遺跡）、調査研究員　岩崎　祥（遠山瓜ヶ作台遺跡）が担当し、整理・報告書の作成は、調査課長　土屋潤一郎の指導のもと、主任調査研究員　吉田直哉・稲見英輔が担当し、調査課全員の協力を得た。

7　本書の執筆は、第１章第２節・第３章第１節を稲見、それ以外を吉田が行い、土屋が加筆・補正した。

8　挿図の第１図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図「多古」・「成東」を使用して作成した。

9　挿図の第２図は、平成元年横芝町発行の1/2,500「横芝町７」・「横芝町８」・「横芝町12」を使用して作成した。

10　出土遺物、実測原図、写真は、財団法人山武郡市文化財センターが管理保管している。

11　図版１に使用した航空写真は京葉測量株式会社の提供によるものである。

12　発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から多大なるご指導・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

千葉県教育庁教育振興部文化財課、横芝町教育委員会、渡辺修一、蜂屋孝之

本文目次

序文
例言
序　章　調査の概要 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査の方法 …… 1
　第３節　遺跡の位置と周辺の地形 …… 1
第１章　遠山瓜ヶ作谷遺跡 …… 7
　第１節　概要 …… 7
　第２節　縄文時代 …… 7
　　第１項　土坑 …… 7
　　第２項　縄文土器 …… 7
　第３節　古墳時代 …… 26
　　第１項　竪穴住居跡 …… 26
　　第２項　掘立柱建物跡 …… 39
　　第３項　土坑 …… 39
　　第４項　溝状遺構 …… 43
　　第５項　調査区出土遺物 …… 44
第２章　遠山瓜ヶ作台遺跡 …… 45
　第１節　概要 …… 45
第３章　まとめ …… 46
　第１節　縄文時代の様相 …… 46
　第２節　古墳時代の様相 …… 46

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（S=1:25,000）
第２図　遺跡周辺の地形（S=1: 2,500）
第３図　遠山瓜ヶ作谷遺跡遺構配置図（S=1:400）
第４図　D-001・D-002・D-004実測図（S=1:60）・出土遺物（S=1:3）
第５図　縄文土器分布図（全体）及び同一個体資料位置図（1）
第６図　縄文土器分布図（後期）及び同一個体資料位置図（2）
第７図　縄文土器分布図（晩期）及び同一個体資料位置図（3）
第８図　縄文土器実測図（1）（S=1:3）
第９図　縄文土器実測図（2）（S=1:3）
第10図　縄文土器実測図（3）（S=1:3）
第11図　縄文土器実測図（4）（S=1:3）
第12図　縄文土器実測図（5）（S=1:3）
第13図　縄文土器実測図（6）（S=1:3）
第14図　H-001実測図（S=1:80）・出土遺物（1）（S=1:4）
第15図　H-001出土遺物（2）（S=1:4･2:3）
第16図　H-002実測図（S=1:80）・出土遺物（1）（S=1:4）
第17図　H-002出土遺物（2）（S=1:4）
第18図　H-003実測図（S=1:80）・出土遺物（S=1:4･2:3）
第19図　H-004実測図（S=1:80）・出土遺物（1）（S=1:4）
第20図　H-004出土遺物（2）（S=1:4）
第21図　H-005実測図（S=1:80）・出土遺物（1）（S=1:4）
第22図　H-005出土遺物（2）（S=1:4･1:2）
第23図　H-006実測図（S=1:80）・出土遺物（S=1:4）
第24図　B-001実測図（S=1:80）
第25図　D-007実測図（S=1:60）・出土遺物（S=1:4）
第26図　D-006・D-008・D-009・D-014・D-015実測図（S=1:60）・出土遺物（S=1:4）
第27図　古墳時代溝平面図（S=1:300）・断面図（1）（S=1:20）
第28図　古墳時代溝断面図（2）（S=1:20）
第29図　調査区出土遺物（S=1:4･1:2）
第30図　遠山瓜ヶ作台遺跡遺構配置図（S = 1 :400）
第31図　遠山瓜ヶ作谷遺跡古墳時代集落変遷図（S=1:400）

図版目次

図版１　空から見た遺跡
図版２　遠山瓜ヶ作谷遺跡全景
図版３　遠山瓜ヶ作谷遺跡の遺構（1）
図版４　遠山瓜ヶ作谷遺跡の遺構（2）
図版５　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器（1）
図版６　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器（2）
図版７　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器（3）
図版８　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物（1）
図版９　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物（2）
図版10　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物（3）
図版11　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物（4）
図版12　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物（5）・他
図版13　遠山瓜ヶ作台遺跡

表目次

第１表　周辺の遺跡地名表
第２表　出土縄文土器時期別数量比
第３表　６群土器細別型式数量比
第４表　８群土器細別型式数量比
第５表　10群土器数量比

凡　例

1　本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものを使用した。そのために、欠落した遺構番号もある。

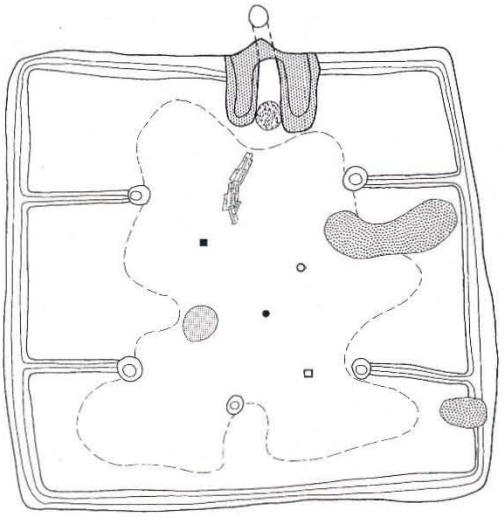
2　各実測図の縮尺は、次の通りである。

遺構　竪穴住居跡　1/80、掘立柱建物跡　1/100、土坑（陥穴）　1/60、溝状遺構　1/300

遺物　土器　1/4、石製品　2/3・1/2、鉄製品1/4、土製支脚1/4、土製勾玉2/3、埴輪1/2

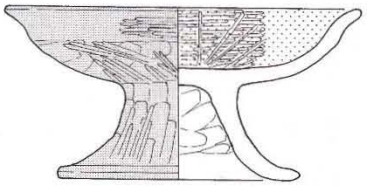
3　土層断面図に付された数値は標高（m）を示す。

4　遺構の挿図のスクリントーン・ドットは下図の通りである。

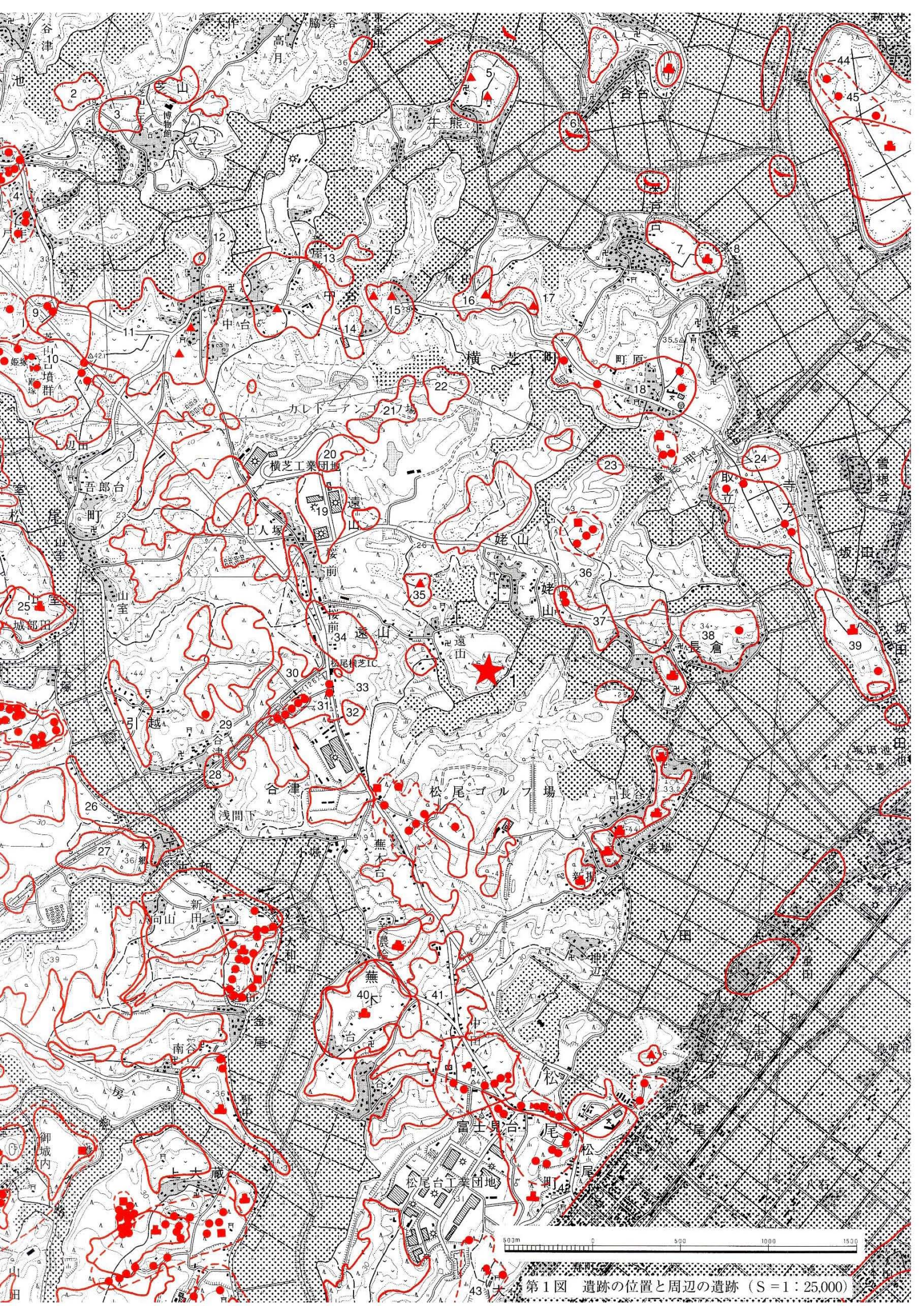


カマド袖部
カマド炉・火床部
焼土分布
灰・炭分布

出土遺物ドット
土　器
土製品
鉄製品
石器・石製品



遺物スクリーントーン
黒色処理
赤　彩



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝1：25,000）

序　章　調査の概要

第１節　発掘調査に至る経緯と経過

遠山瓜ヶ作谷遺跡及び遠山瓜ヶ作台遺跡の所在した山武郡横芝町遠山字瓜ヶ作地先の土地について、平成10年１月26日付けで、千葉県道路公社より有料道路を建設する旨、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」が横芝町教育委員会宛に提出された。横芝町教育委員会では、千葉県教育委員会へ副申し、平成10年２月25日に照会地が縄文時代から古墳時代後期にかけての散布地であるとの回答を得た。その後、埋蔵文化財の取扱いについて、県教育委員会・町教育委員会・開発事業者での三者協議を行い、有料道路の建設に先駆けて、遺跡の範囲・性格を把握するための埋蔵文化財確認調査を行うことになった。

両遺跡における確認調査は、上層については確認調査対象面積の10%をトレンチ方式で、下層については確認調査対象面積の４%をテスト・ピット方式で調査した。調査の結果、遠山瓜ヶ作谷遺跡では、竪穴住居跡３軒、陥穴３基、土坑１基、溝６条が散発的に検出され、テンバコ１箱分の縄文土器・古墳時代土師器・須恵器片が出土し、当遺跡は、古墳時代後期を主体とする集落跡であることがわかった。一方、遠山瓜ヶ作台遺跡は、時期不明の溝１条を検出し、テンバコ１箱分の縄文土器・古墳時代土師器片が出土したにとどまった。下層については、両遺跡とも、遺構・遺物の検出を見ていない。

この結果に基づき、再度、三者協議がもたれ、遠山瓜ヶ作谷遺跡については全開発区域のうち遺構が密集する1,280㎡について、記録保存の措置としての埋蔵文化財上層本調査を行うこととなった。また、遠山瓜ヶ作台遺跡については、埋蔵文化財確認調査をもって終了する事となった。

確認・本調査を含む埋蔵文化財調査は、財団法人山武郡市文化財センターが、千葉県道路公社の委託を受け、県教育委員会・町教育委員会の指導のもとに実施した。　（横芝町教育委員会）

第２節　調査の方法

確認・本調査は、表土除去・遺構確認・実測・発掘（確認調査では部分発掘・本調査では調査区全面発掘）・写真撮影という手順で行った。表土除去は、地形や遺跡の性格、遺構の分布などに十分留意して、重機で行い、それ以後の調査過程は手作業で行った。

グリッドは、公共座標を基準にして、40m方眼を大グリッド、その中に４m方眼の100個の小グリッドを設定した。グリッドは、大グリッドが北から南へ１・２・３、西から東へA・B・Cと呼称し、小グリッドが00～99まで表記した。

第３節　遺跡の位置と周辺の地形（第１・２図、第１表）

遠山瓜ヶ作谷遺跡及び遠山瓜ヶ作台遺跡（第１図１・第２図）は、栗山川谷河口付近の左岸松尾台・遠山支台に位置する。遠山支台は、東側から栗山川谷・姥山支谷に開析を受けた東方向にのびる舌状台地である。

遠山瓜ヶ作谷遺跡は、遠山支台の西側の瓜ヶ作支谷に立地する。標高は、18～28mを測り、台地部の北東方向から南西方向に向けて緩やかに傾斜する。

遠山瓜ヶ作台遺跡は、舌状台地である遠山支台の南側先端部に属する馬の背状の台地上に立地する。標高30～40mを測る。

周辺の遺跡の分布を第１図に示し、そのうち調査された遺跡には番号を記し、第１表にまとめた。

第２図　遺跡周辺の地形（Ｓ＝1：2,500）

第１表　周辺の遺跡地名表

NO	遺跡名	種別	時代											文献
			先土器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中・近世	
				草	早	前	中	後	晩					
2	大山遺跡	集落跡				○	○					○		—
3	新起遺跡	包蔵地	○								○			平岡・武部 1981
4	小池古墳群	古墳									○			小杉・佐藤 1956
5	牛熊遺跡	貝塚、包蔵地							○	○				清水 1954
6	高谷川遺跡	包蔵地						○						清水 1953・1954、戸村 1982
7	上宮台遺跡	集落跡									○	○		横芝町史編纂委員会 1975
8	小堤要害城跡	城館跡											○	横芝町教育委員会 1973、伊藤 1978
9	鯉ヶ窪遺跡	包蔵地、古墳	○		○	○	○	○	○		○			奥田・高橋 1986
10	芝山古墳群（中台古墳群）	古墳									○			鈴木・中村 1956、滝口 1956、千葉県教育庁文化課 1989
11	中台遺跡	包蔵地、貝塚	○				○	○			○	○		稲見 2003、奥田・高橋 1986、田島 1987、平山 2000
12	中台Ｄ遺跡	包蔵地					○	○						—
13	中台上仇市Ａ遺跡	集落跡			○	○					○			—
14	石作台遺跡	集落跡					○	○				○		奥住 1995
15	鴻ノ巣貝塚	貝塚					○	○						稲村 1989、清水 1957・1967
16	木戸台遺跡	集落跡	○		○	○	○	○			○	○		稲見 1992、西山他 1977、萩原他 1996
17	木戸台第一貝塚	貝塚					○	○						慶應高校歴史研究会 1964、清水 1964
18	木戸台・町原古墳群	古墳	○		○			○	○		○	○		萩原他 1996
19	西長山野遺跡	包蔵地	○				○	○	○					鈴木・中村 1956、太田・矢本 1992
20	上仁羅台遺跡	包蔵地	○				○	○	○	○				太田・矢本 1992
21	北長山野遺跡	包蔵地、集落跡	○		○			○	○			○	○	道澤 1990
22	東長山野遺跡	集落跡												平岡他 1983、道澤 1990、太田・矢本 1992
23	中洞遺跡	包蔵地			○	○	○	○				○		平岡他 1983
24	振子上遺跡	集落跡					○	○						平岡他 1983
25	山室城跡	城館跡											○	井上 1992
26	赤羽根遺跡	集落跡	○								○	○		—
27	大山遺跡	集落跡	○								○	○		宮他 2002
28	中谷遺跡	集落跡	○								○	○	○	糸川他 2001
29	大谷遺跡	集落跡			○			○	○		○	○		—
30	四ツ塚遺跡	包蔵地、塚	○	○	○	○	○	○	○				○	宮他 2001
31	千神塚群	塚											○	宮他 2001
32	遠山並塚遺跡	包蔵地						○	○					—
33	庚塚遺跡	包蔵地		○	○	○	○	○	○					—
34	遠山天ノ作遺跡	包蔵地	○			○		○						奥田・高橋 1986
35	山武姥山貝塚	貝塚					○	○	○					清水 1964、鈴木 1962・1968、蔀 1989、藤村 1972、渡辺 1992・1996
36	長倉経塚	塚											○	伊藤 1983、村山・中西 1985
37	長倉宮脇遺跡	集落跡									○	○		伊藤 1983、村山・中西 1985
38	荒久台遺跡	集落跡				○		○				○		伊藤 1981
39	坂田城跡	城館跡											○	加藤・柳 1983
40	蕪木城跡	城館跡											○	—
41	染井遺跡	包蔵地	○		○	○	○	○				○		—
42	松尾城跡	城館跡											○	海保 1997・1999a・1999b・2000a・2000b
43	大堤古墳群	古墳									○			軽部 1957
44	宝米遺跡	包蔵地	○				○			○	○	○		—
45	宝米古墳群	古墳									○			杉山 1967、平岡他 1989

参考文献

伊藤一男　1978　『小堤要害城跡調査報告書』　日新商事有限会社

伊藤一男　1978　『小堤要害城跡の研究』　武射史学叢書

伊藤一男　1980　「坂田城跡・小堤要害城跡」『日本城郭大系』６　新人物往来社

伊藤一男　1981　『荒久台遺跡』　横芝町教育委員会

伊藤一男　1983　『長倉宮脇－千葉県横芝町長倉宮脇遺跡確認調査報告書－』　横芝町教育委員会

糸川道行・田島　新・宮　重行・梶ヶ山真里　2001　『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書８－松尾町中谷遺跡－』　（財）千葉県文化財センター

稲見英輔　1992　『木戸台大谷遺跡』　（財）山武郡市文化財センター

稲見英輔　2003　『中台遺跡1349-3地点』　横芝町

稲村晃嗣　1989　「鴻ノ巣貝塚出土の縄文時代後期初頭の土器群」『考古学の世界』 新人物往来社

井上哲朗　1992　『松尾町山室城跡－急傾斜地崩壊対策事業地内埋蔵文化財報告書－』　（財）千葉県文化財センター

太田文雄・矢本節朗　1992　『横芝町　上仁羅台遺跡・西長山野遺跡・東長山野遺跡』　（財）千葉県文化財センター

奥住　淳　1995　「付篇　横芝町石作台遺跡」『財団法人山武郡市文化財センター年報№10』　（財）山武郡市文化財センター

奥田正彦・高橋博文　1986　『主要地方道成田松尾線Ⅲ　鯉ヶ窪遺跡　中台柿谷遺跡　遠山天ノ作遺跡』（財）千葉県文化財センター

海保孝則　1997　『松尾城跡Ⅰ』　（財）山武郡市文化財センター

海保孝則　1999a　『松尾藩公庁跡－松尾町営自動車教習所拡張工事に伴う発掘調査報告書－』　（財）山武郡市文化財センター

海保孝則　1999b　『松尾城跡Ⅱ』　（財）山武郡市文化財センター

海保孝則　2000a　『平成11年度　松尾町内発掘調査報告書　松尾城米倉跡』　松尾町教育委員会

海保孝則　2000b　『平成11年度　松尾城跡調査研究報告書』　（財）山武郡市文化財センター

加藤正信・柳　晃　1983　『大友城跡・坂田（城山）城跡発掘調査報告』　（財）千葉県文化財センター

軽部滋恩　1957　「千葉県山武郡大堤権現塚前方後円墳の発掘調査」『古代25・36合併号』 早稲田大学考古学会

慶應高校歴史研究会　1964　「千葉県山武郡木戸台貝塚」『archaeology』27　慶應高校歴史研究会

小杉秀雄・佐藤俊雄　1956　「芝山古墳群小池第１号墳」『古代21・22合併号』　早稲田大学考古学会

蔀　淳一　1989　『横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書』　（財）千葉県文化財センター

芝山町教育委員会　1992　「芝山町史　資料集１　原始古代編」　芝山町

清水潤三　1953　「千葉県山武郡高谷川遺跡Ｂ地点」『日本考古学年報』６　日本考古学協会

清水潤三　1954　「千葉県山武郡牛熊貝塚」『日本考古学年報』７　日本考古学協会

清水潤三　1954　「千葉県山武郡高谷川遺跡第２次」『日本考古学年報』７　日本考古学協会

清水潤三　1957　「千葉県山武郡鴻ノ巣貝塚」『日本考古学年報』５　日本考古学協会

清水潤三　1964　「千葉県山武郡姥山台貝塚」『日本考古学年報』12　日本考古学協会

清水潤三　1964　「千葉県山武郡木戸台貝塚」『日本考古学年報』12　日本考古学協会

清水潤三　1967　「千葉県山武郡鴻ノ巣貝塚」『日本考古学年報』15　日本考古学協会

杉山晋作　1967　「宝米六号墳石宝調査報告」『金鈴』20号 早稲田大学考古学研究会

鈴木喜久二・中村繁治　1956　「千葉県芝山古墳群第５号墳発掘略報」『古代第19・20合併号』　早稲田大学考古学会

鈴木公雄　1962　「千葉県山武郡横芝町山武姥山貝塚の晩期縄文土器に就いて」『史学』36-1　三田史学会

鈴木公雄　1968　「千葉県山武郡姥山遺跡」『日本考古学年報』16　日本考古学協会

滝口　宏　1956　「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代第19・20合併号』　早稲田大学考古学会

田島　新　1987　『主要地方道成田松尾線Ⅴ』　（財）千葉県文化財センター

千葉県教育庁文化課　1989　『千葉県重要古墳測量調査報告書－山武地区古墳群（１）－』　千葉県教育委員会

戸村正己　1982　「高谷川泥炭層遺跡について」『芝山町史研究年報』創刊号　芝山町教育委員会

西山太郎・平岡和夫・湖口淳一　1977　『千葉県山武郡横芝町木戸台遺跡発掘調査報告』　横芝町教育委員会

萩原恭一・高柳圭一　1996　『一般県道横芝山武線道路改良事業埋蔵文化財調査報告書－横芝町木戸台・町原古墳群、木戸台遺跡－』　（財）千葉県文化財センター

平岡和夫・武部喜充　1981　『東京電力送電鉄塔建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』芝山線遺跡調査会

平岡和夫・安藤杜夫・田口成利・武部喜充　1983　『東京電力送鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告』東京電力山武・横芝町遺跡調査会

平岡和夫他　1989　「千葉県九十九里地域の古墳研究」 山武考古学研究所

平山誠一　2000　『中台大木戸遺跡893-5地点』　横芝町

藤村東男　1972　「千葉県山武郡姥山遺跡（第５次調査）」『日本考古学年報』20　日本考古学協会

道澤　明　1990　『東・北長山野遺跡』　北長山野遺跡調査会

宮　重行・鈴木弘幸・西口　徹　2001　『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書７－松尾町・横芝町四ツ塚遺跡・松尾町千神塚群－』　（財）千葉県文化財センター

宮　重行・糸川道行・大野康男・田島　新　2002　『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財調査報告書11－松尾町大山遺跡－』　（財）千葉県文化財センター

村山好文・中西克也　1985　『長倉宮脇－千葉県横芝町長倉宮脇遺跡発掘調査報告書－』　横芝町教育委員会

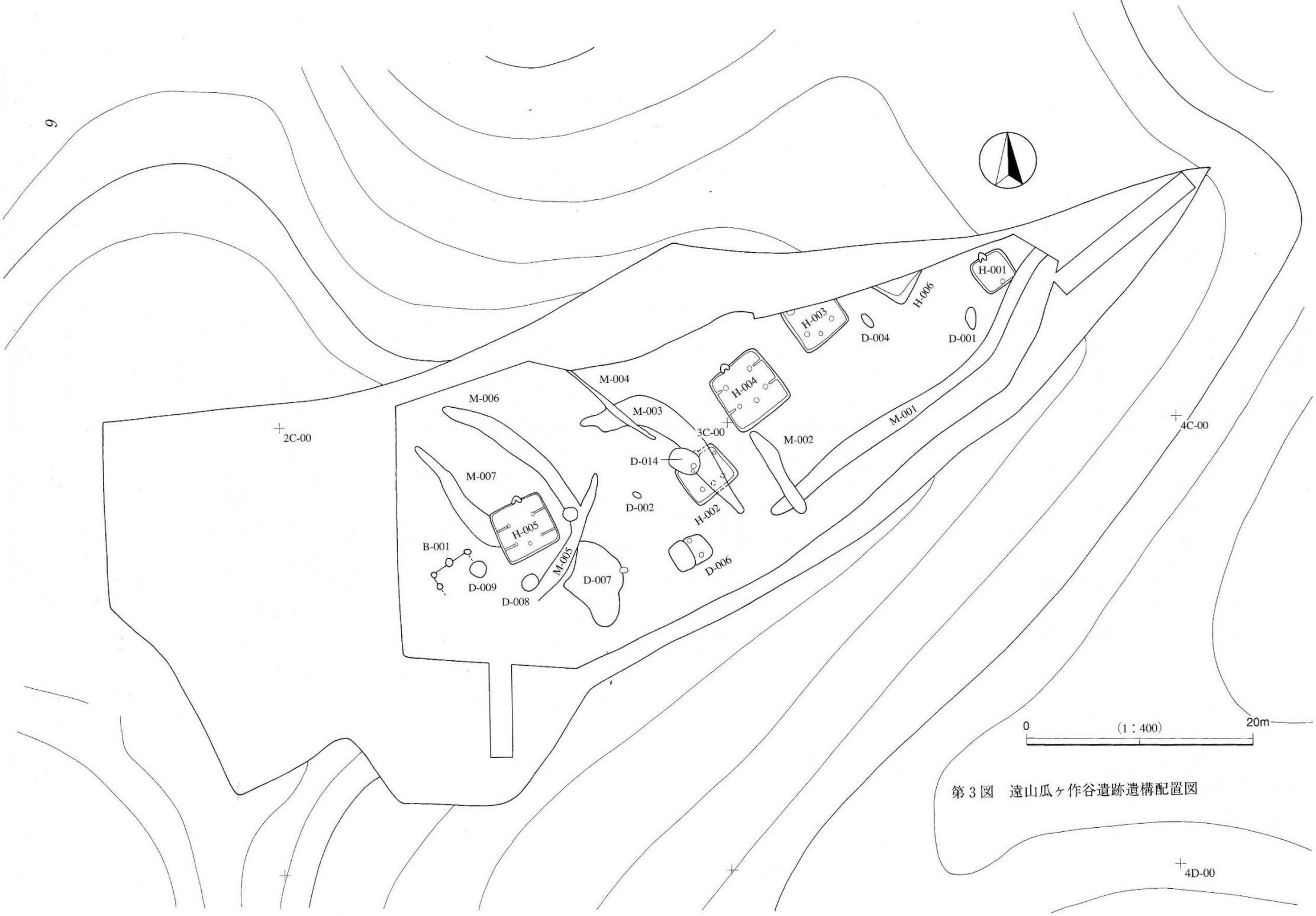
横芝町教育委員会　1973　『横芝町文化財総合調査報告（１）』

横芝町教育委員会　1986　『千葉県山武郡横芝町埋蔵文化財分布地図　史跡・埋蔵文化財包蔵地所在地図』横芝町教育委員会

横芝町史編纂委員会　1975　『横芝町史』　横芝町

渡辺修一　1992　横芝町山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群」『研究連絡誌』35号（財）千葉県文化財センター

渡辺修一　1996　「横芝山武姥山貝塚出土の縄文晩期浮線文土器群－補遺－」『研究連絡誌46号』　（財）千葉県文化財センター



第３図　遠山瓜ヶ作谷遺跡遺構配置図

第１章　遠山瓜ヶ作谷遺跡

第１節　概要

標高18m～28mの谷部の緩斜面から、縄文時代の陥穴３基、古墳時代後期の竪穴住居５軒、掘立柱建物跡１棟、土坑３基、溝状遺構７条が検出された。

また、調査区内から、縄文時代前期～晩期の縄文土器が出土している。

第２節　縄文時代

第１項　土坑

今回の調査では、縄文時代の遺構として土坑が３基検出された。いずれの土坑も陥穴の形態を呈している。このことは調査範囲が谷頭部に位置し、谷頭源頭部からこれに続く緩斜面が狩猟域として利用されていたことを示している。また、各土坑の主軸方向は地形図上のコンターラインとほぼ平行しており、いわゆる「斜面パターン」の分布（注１、伊藤　1987）を呈している。

Ｄ－００１（第４図、図版４）

3B－75、3B－85グリッドで検出された。平面形は検出面・底面ともいびつな長楕円形を呈する。規模は、検出面の長径2.20m・短径1.02m、底面の長径1.85m・短径0.4m、検出面からの深さ1.20mを測る。

Ｄ－００2（第４図、図版４）

2C－17、2C－18グリッドで検出された。平面形は検出面・底面とも不整楕円形を呈する。規模は、検出面の長径1.30m・短径0.83m、底面で長径1.30m・短径0.5m、検出面からの深さ0.82mを測る。

Ｄ－００４（第４図、図版４）

3B－72、3B－73グリッドで検出された。平面形は検出面は長楕円形、底面は隅丸長方形を呈する。規模は、検出面の長径1.45m・短径0.67m、底面の長径105m・短径0.6m、検出面からの深さ0.95mを測る。

出土遺物を２点図示した。１は晩期終末の土器の胴部片である。表面に斜位の細密条痕を施文する。２は本跡の他土器片の一部が土師期の遺構であるH-004とD-006からも出土した。プライマリーな出土状況ではない。縄文時代中期後葉の加曽利E式土器の胴部片である。遺存しているのは胴部下半の一部である。遺存部分の復元胴径15cm、残存器高７cmを測る。全面に縄文を施文する。

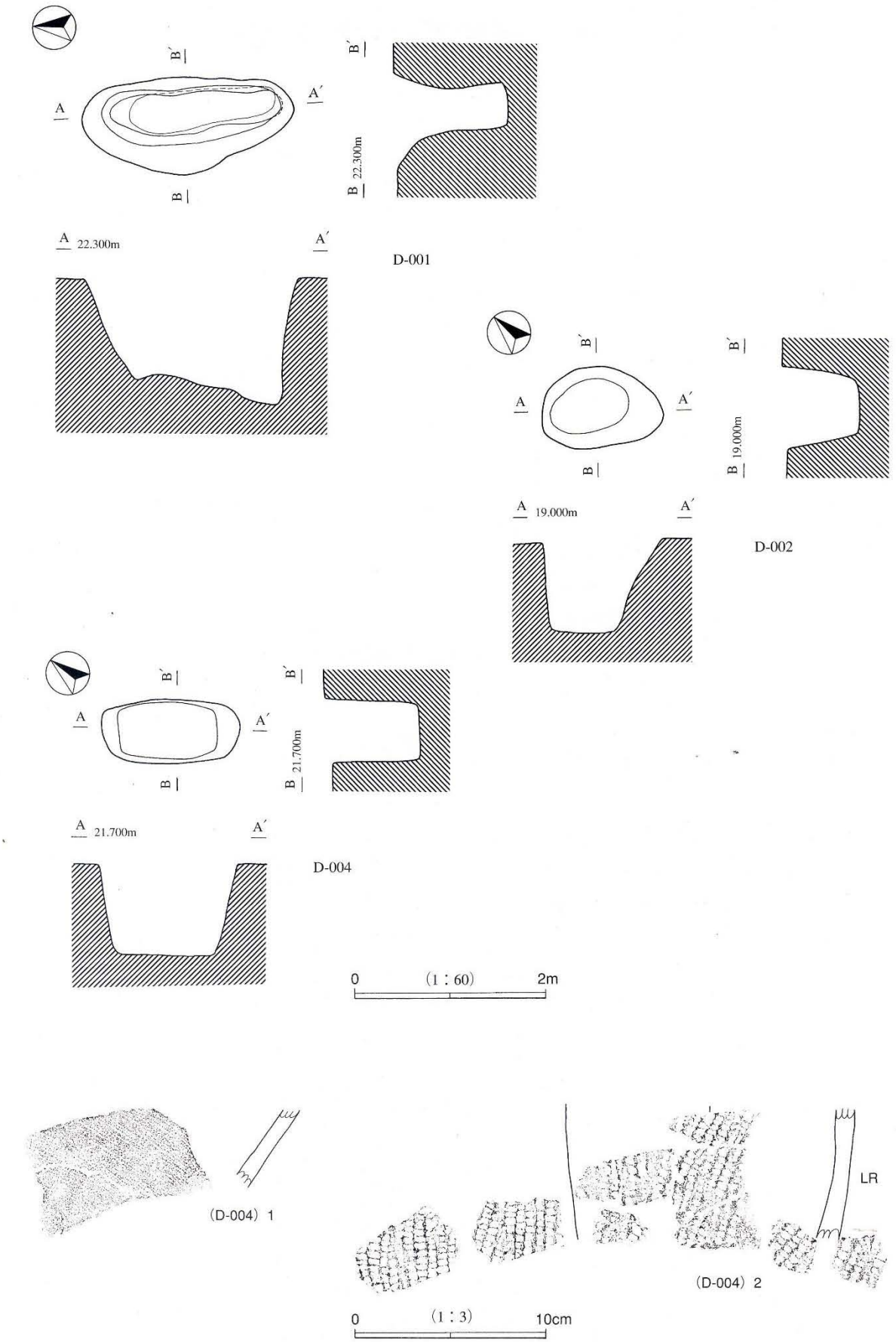
本跡の構築年代は出土遺物より晩期終末の荒海２式期以降であろう。

第２項　縄文土器

今回の調査では縄文土器363片が出土した。前期～晩期終末まで若干の空白期をはさみ、複数の型式が認められる。大別すると下記のように分類される。また出土数量比について第２表に示した。

１群土器　前期黒浜式土器	６群土器　後期加曽利Ｂ式
２群土器　前期諸磯式土器	７群土器　後期曽谷式
３群土器　中期阿玉台式	８群土器　後期安行１～２式
４群土器　中期加曽利Ｅ式	９群土器　晩期安行３式
５群土器　後期堀之内式	10群土器　晩期荒海２式

時期ごとの分布や主な資料の出土位置や同一個体資料について第５図～第７図に示した。前期・中期については、出土量が少なかったため独立した図は作成せず第５図に併せて掲載した。



第４図　D-001・D-002・D-004実測図・出土遺物

縄文土器の出土の傾向は全体としてグリッドからの出土数より確認トレンチと土師期の遺構からの出土数が多い。これは、土師集落の確認面が縄文土器の包含層中にあり、この面より下層の遺物の分布があまり反映されていないためである。故にトレンチ・土師期遺構・グリッド出土図の３者を複合的にみて時期ごとの分布傾向を読みとっていただきたい（注２）。

本項末尾に出土傾向について若干ふれておいた。

また、土器の分類作業において前期・中期の土器は、出土片数が少なくかつ小片も少なかったため識別も容易であったが、後期以降の土器は小片も多く時期の比定が困難なものもあった。また、挿図作成後同一個体が判明したり、時期の認定に変更があったため遺物の番号や記載が挿図の順番通りにならない個所がある。御寛恕願いたい。

型　式　名	片数	%	個体数	%	重量(g)
第１群　黒浜式土器	2	0.6	1	0.5	93.7
第２群　諸磯式土器	1	0.3	1	0.5	3.5
第３群　阿玉台式土器	19	5.2	17	8.5	293.9
第４群　加曽利Ｅ式土器	9	2.5	4	2	631.6
第５群　堀之内式土器	20	5.5	3	1.5	257.6
第６群　加曽利Ｂ式土器	81	22	44	22	1489.4
第７群　曽谷式土器	6	1.7	6	3	234.6
第８群　安行１～２式土器	24	6.6	24	12	657.9
第6～8群　型式不明小片	47	13	39	19.5	771.2
第９群　安行3a式土器	2	0.6	2	1	59.7
第10群　荒海式土器	104	29	36	18	2528.3
時期不明小片	48	13	23	11.5	371.2
合　計	363	100	200	100	7392.6

第２表　出土縄文土器時期別数量比

１群土器（第８図１・２、図版５）

２片出土した。接合しないが同一個体である。１は内反気味に立ち上がる口縁部片。口唇部は丸頭状を示す。２はくの字状に頸部の括れる個体。付加縄の原体を縦位に施文し羽状効果を示す。１・２とも胎土に繊維を含みこの時期の土器としては焼成がよい。第５図に出土位置を図示した（個体１）。前期前半・黒浜式に比定した。

２群土器（第10図49、図版６）

１片のみの出土である。小振りな精製土器の口縁部片。幅狭の半截竹管状工具による押引き文を２条横走させている。前期後半の土器に特有なザラついた器面を持つ。前期後半・諸磯式に比定した。

３群土器

19片・17個体分識別した。小片を除き10片を図示した。中期前半・阿玉台式に比定。施文等によりＡ～Ｃの３類に分類した。第５図に代表的な遺物の出土位置を図示する（個体２～５）。

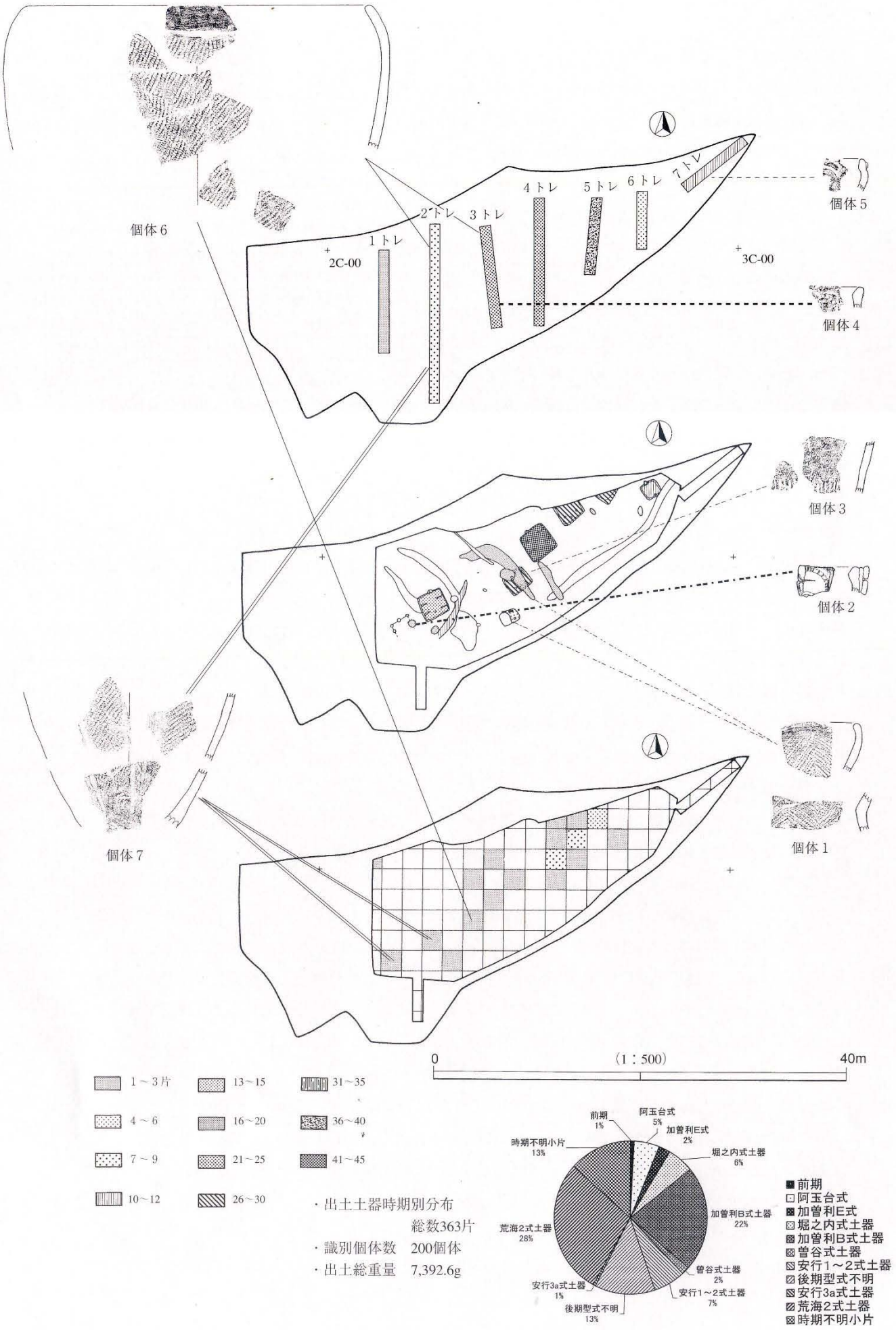
Ａ類　主に有節線文や角押文を有するもの。（第８図３・４・６、図版５）

３・４・６とも平縁の口縁部片である。器形はいずれも頸部からやや内反気味に立ち上がり口唇部に至り強く外傾する。口唇部の断面は角頭状を呈し、内面には稜が張り出す。施文には３が三角形、４・６・７は半円～三日月形の刺突具を用いている。３は刺突具を引きづり気味に押引く有節線文で、やや間隔をあけて２段にわたり巡らしている。４・６は隆起線に沿って１条の角押文を窓枠状に施す。６は口縁部～頸部付近について、粘土棒を芯として垂下させ。それを粘土の帯で囲っている。４も粘土の帯を添付しているが、遺存部分には粘土棒の芯はみられない。阿玉台Ｉa式に比定した。

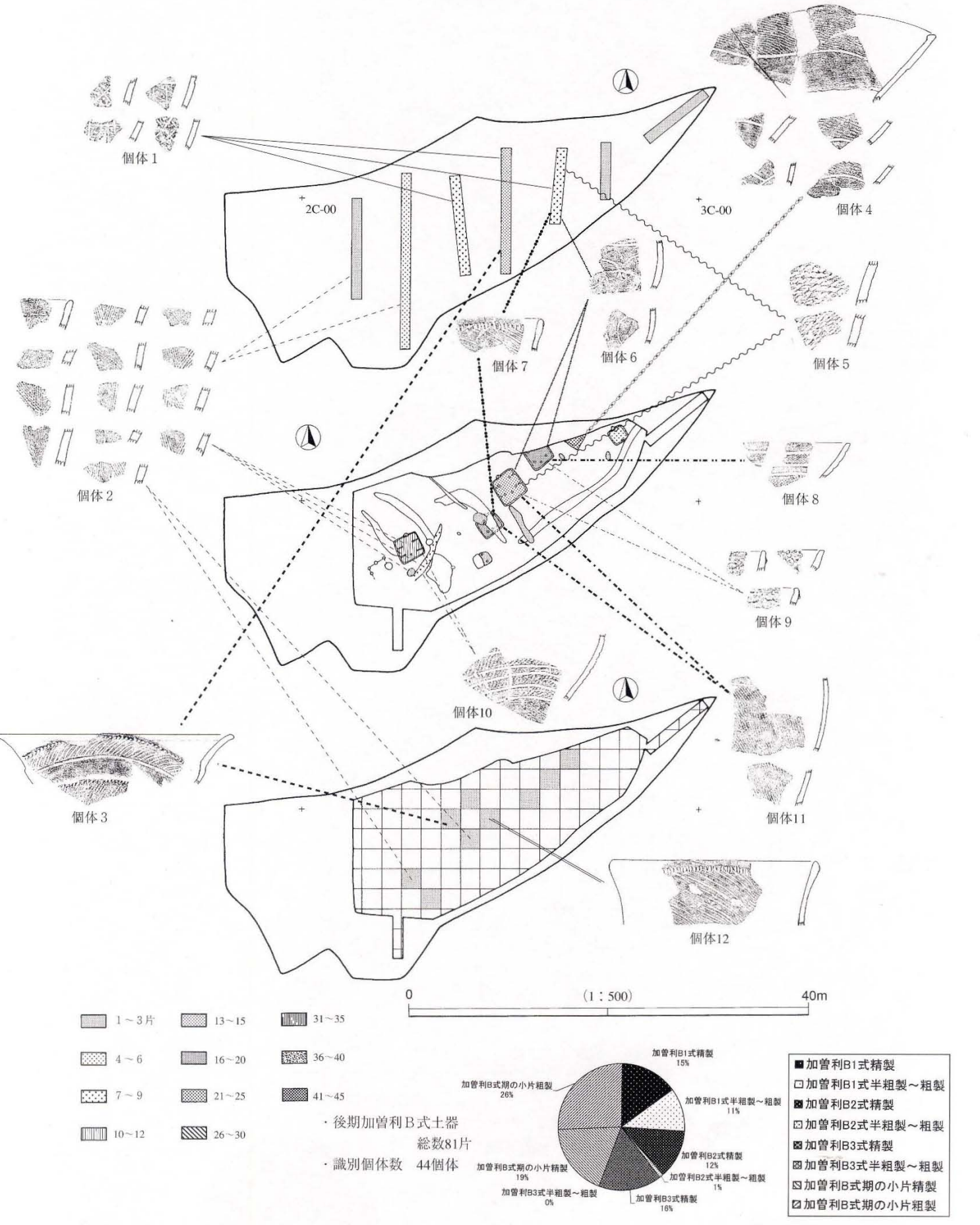
Ｂ類　主に隆起線を有するもの。（第８図５・８・９、図版５）

５・８は口縁部片、９は胴部片である。器形は５は小片のため詳しく知り得ないものの、直立気味に立ち上がり、口唇部が外傾するようである。８は頸部からやや内湾気味に立ち上がる。口唇部の形状は５は三角形、８は丸頭状を呈する。文様は５には空豆状の隆帯が添付する。８・９には縦位の隆起帯が施され、８はＹ字状を呈する。５・８の胎土中に雲母が含まれる。阿玉台Ｉa式に比定した。

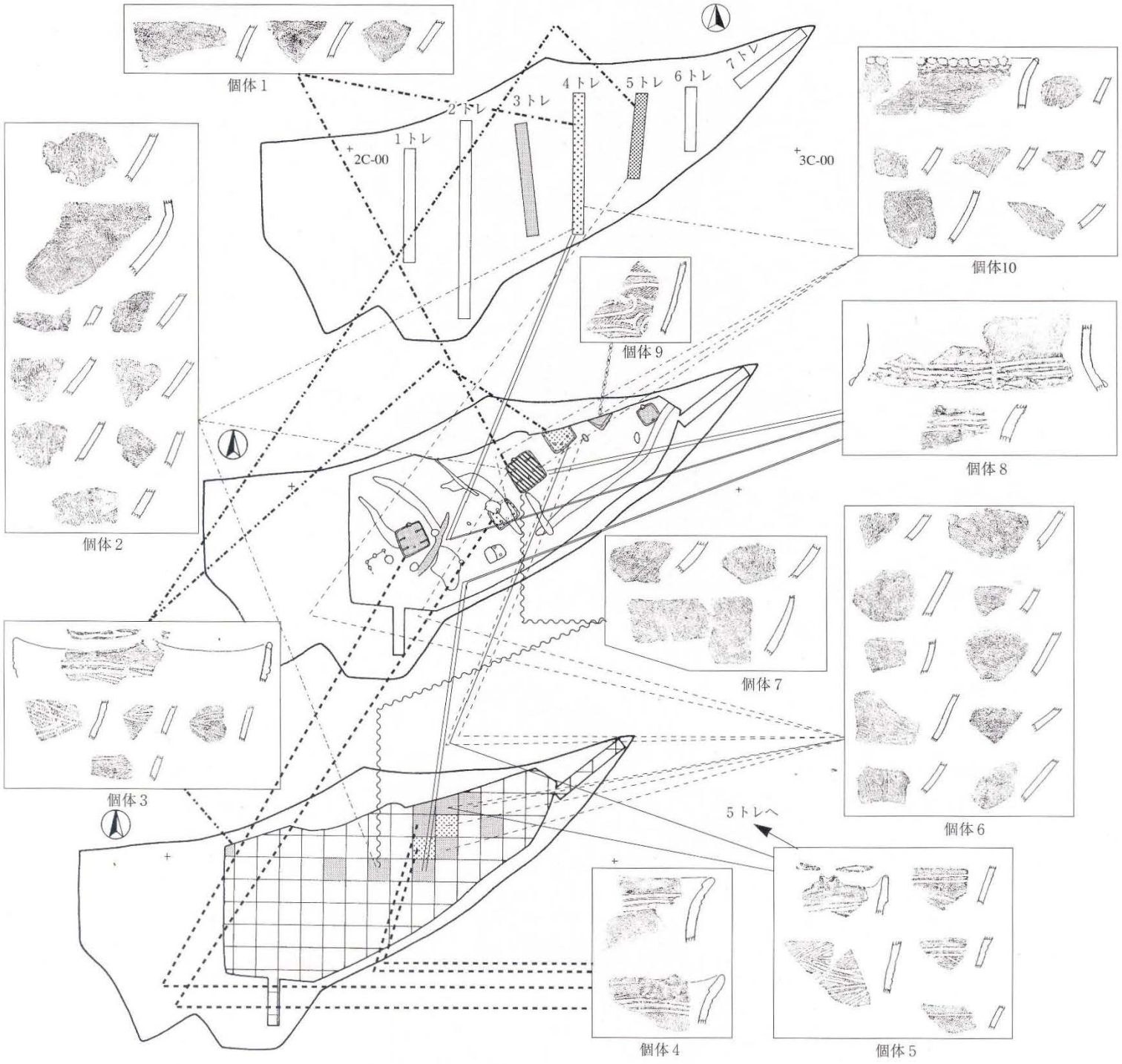
Ｃ類　主に爪形文を有するもの。（第８図10～12、図版５）

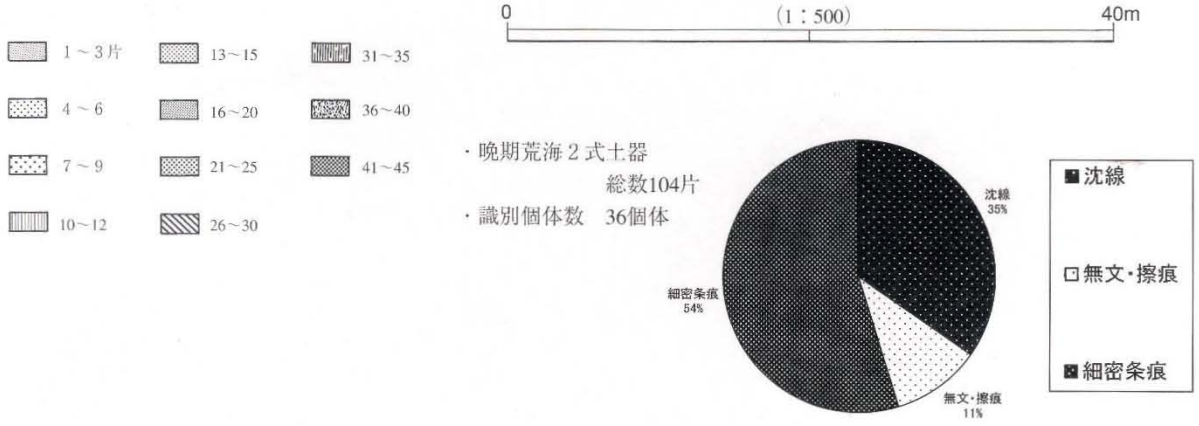


第5図　縄文土器分布図（全体）及び同一個体資料位置図（1）

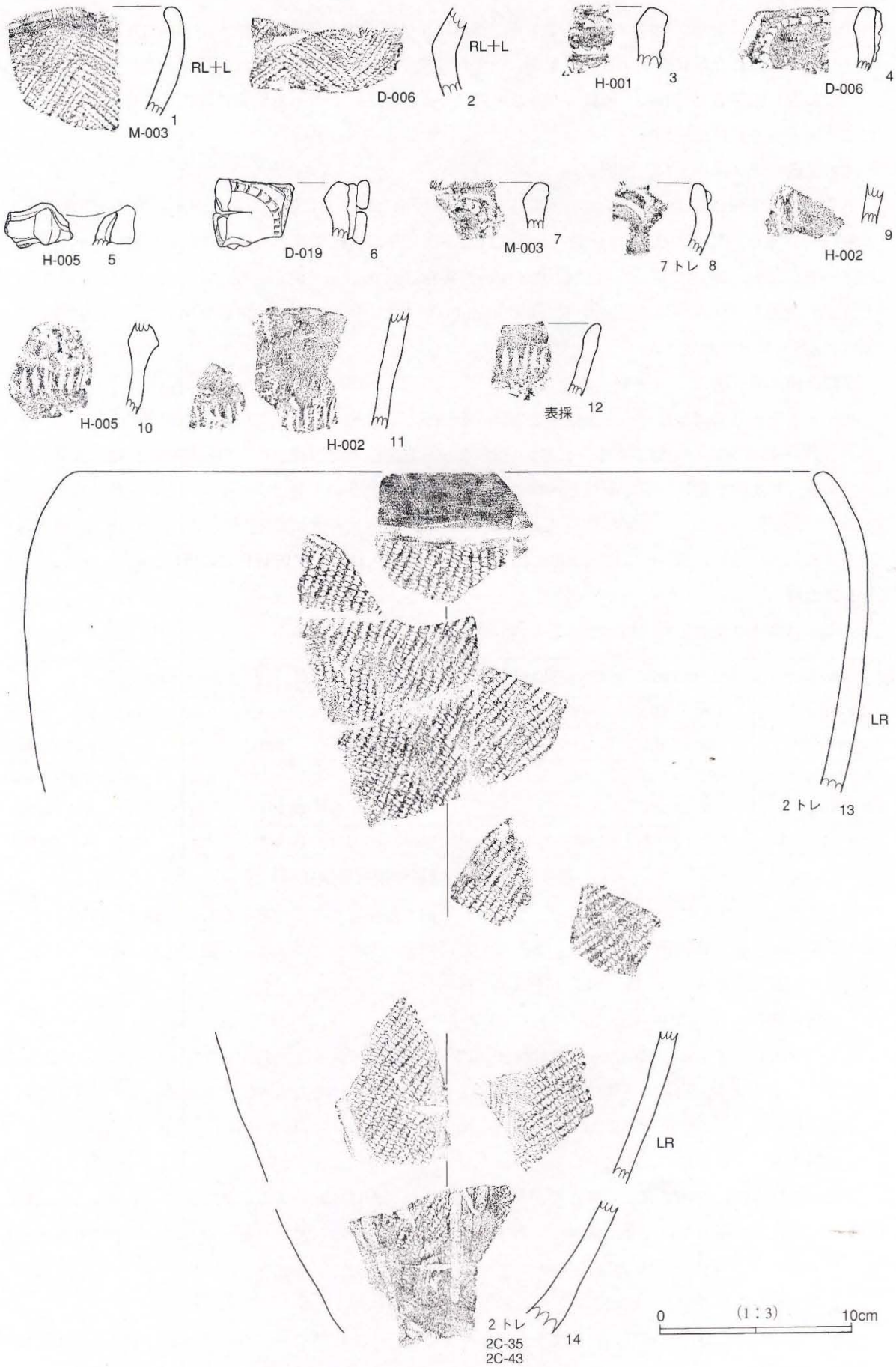


第６図　縄文土器分布図（後期）及び同一個体資料位置図（２）





第７図　縄文土器分布図（晩期）及び同一個体資料位置図（３）



第8図　縄文土器実測図（1）

10は頸部、11は胴部、12は口縁部片である。器形は10は緩く内湾気味に立ち上がり、11・12は緩く外傾する。12の口唇部は丸頭状を呈する。爪形文はいずれも深くシャープに１条横位に施文する。10・11は爪形文の上位に５に添付されたものと同様な空豆状の隆帯が貼付する。いずれも胎土に雲母を含む。爪形文の形態により阿玉台Ⅱ式に比定した。

４群土器（第８図13・14、図版５）

９片出土し４個体分識別した。小片を除き２個体を図示した。13は器形が胴張りする平縁の深鉢である。推定口径38.6cm、残存器高17cmを測る。施文は頸部に１条の横線を巡らし以下に縄文を施す。14は底部に程近い胴部下位の破片である。推定胴径24.5cm、残存器高16.1cmを測る。縦方向のミガキで器面調整後、太沈線で器面を縦位区画して、区画内に縄文を充填している。第５図に出土位置を図示する（個体６・７）。加曽利EⅢ～Ⅳ式に比定した。

５群土器（第９図17a～m・18、図版５）

20片・３個体分識別した。小片を除き２個体分を図示した。櫛歯状の工具による条線文により文様を描出する。17a～mは平縁の深鉢である。17aは外傾しながら立ち上がる口縁部片。口唇部の断面は丸頭状を呈する。頸部に短沈線を横走させて胴部と区画する。胴部には櫛歯状の工具による条線を主に縦位に動かして交差あるいは接触させてＶ・Ｘ字状や円弧文を描いている。堀之内１式に比定した。第６図に出土位置を図示する（個体２）。18は17a～mに比べ条線が浅くシャープさに欠ける。加曽利Ｂ式の所産かもしれない。

６群土器

81片・44個体分識別した。細別型式ごとの数量比は次表のとおりである。

細別型式名	精製・区画沈線	片数(%)	個体数(%)	半精製・縄文地十斜格子沈線	半粗～粗製・紐線文系（隆帯・条線文）縄文地十条線	片数(%)	個体数(%)	合　　計
加曽利Ｂ１式	８片（７個体）	17	24	４片（１個体）	９片（７個体）	29	50	21片（15個体）
加曽利Ｂ２式	10片（２個体）	22	7	0	１片（１個体）	3	7	11片（３個体）
加曽利Ｂ３式	13片（12個体）	28	41	0	0	0	0	13片（11個体）
加曽利Ｂ式小片	15片（８個体）	33	28	0	21片（６個体）	68	43	36片（14個体）
合　　計	46片（29個体）	100	100	４片（１個体）	31片（14個体）	100	100	81片（44個体）

第３表　６群土器細別型式数量比

記述に関して、時期ごとよりも第３表による属性の別を優先してＡ類：精製土器、Ｂ類：半精製土器、Ｃ類：半粗製～粗製土器の３類に分けた。また精・粗の別については、いわゆる精製・粗製ではなく、胎土の精選具合、器厚、焼成具合、施文の仕方を含めて区別した。

Ａ類１種ア（第９図19～22、図版５）

内湾気味に立ち上がる口縁部片～胴部片。20・22は口縁部片で断面形は角頭状を呈する。19は胴部片。地文に細縄文を施文後、数条の横線で区画し、無文部（区画内を磨消したもの）を挟む縄文帯を構成する。やや小振りな深鉢である。第６図に20の出土位置を図示する（個体８）。加曽利Ｂ１式に比定した。

Ａ類１種イ（第９図23、図版５）

胴部から口縁部にかけて大きく開きながら内湾し、底部にかけて縮約する深鉢である。１種アとの違いは区画内に無文部を持たないこと、横線にいの字文を縦連させていることである。第６図に出土位置を図示した（個体10）。加曽利Ｂ１式に比定。

Ａ類１種ウ（第９図29、図版５）

１種アと異なり横線の代わりに円弧文を重層させている。また円弧文の区画内は磨消している。加曽利Ｂ３式に比定した。

第９図　縄文土器実測図（２）

Ａ類２種（第９図24、図版５）

既述の本群土器と異なり口唇部が肥厚し、マッチ棒の頭状の形状を呈する。文様は細縄文施文後、口縁下に爪形刺突列を巡らせ、刺突列下端に横線を施す。加曽利Ｂ３式か。

Ａ類３種（第９図30、図版５）

波状を呈する口縁部の小片である。口縁の波長部下から頸部にかけて隆起線が斜めに下がっている。形式名などの詳細は不明であるが、胎土・焼成・色調等より本群に含めた。

Ａ類４種（第９図16、図版５）

口縁に近い胴部片。頸部に１条の横線を巡らし、以下に円形刺突文を施す。３種と同様、形式名などの詳細は不明であるが、同様の理由により本群に含めた。

Ａ類５種（第９図26～28、図版５）

口縁に向かって直線的に開く器形の胴部片である。いずれも地文に縄文を施文後、横線を数条巡らせるもので、横線の数や間隔はそれぞれ異なる。27は横線間に弧線状の沈線がみられる。28は横線の施文に先の分かれた工具を用いている。

Ａ類６種（第10図34a～g、図版５）

器形が朝顔状に胴部上位で開く深鉢である。胎土に砂粒が多く含まれ器面がザラつく。器面全面に細縄文を施文後、頸部中位と胴部上端に横線、胴部中位を入組み文風に区画し、区画外を磨り消している。第６図に出土位置を図示する（個体４）。加曽利Ｂ２式に比定した。

Ａ類７種（第10図35、図版５）

台付鉢である。施文順序は、条線文・縄文を施し横線で頸部を区画して、区画内を磨いて磨消している。体部張り出し部にはいわゆる「手法Ａ」（大塚　1989）の刻文帯が巡る。第６図に出土位置を図示する（個体３）。加曽利Ｂ２式に比定した。

Ａ類８種（第10図36ab，図版５）

35と同様朝顔状の器形を呈し、胎土・混入物・色調も似ている。小波状の口縁部片である。口縁部下に横線を巡らし横線上に刺突列を添えている。口縁部が肥厚して、マッチ棒頭状を呈するので加曽利Ｂ３式に比定した。

Ａ類９種（第10図37・38、図版５）

口縁部近くで外反する器形の深鉢である。地文に縄文を施文後、横線により器面を区画し、区画外を磨消している。37・38とも横線は、平行線のほか弧状線も有する。37は口縁部と頸部の横線の上に刻文帯を伴う隆線をもつ。加曽利Ｂ３式に比定した。

Ａ類10種（第10図40～42、図版６）

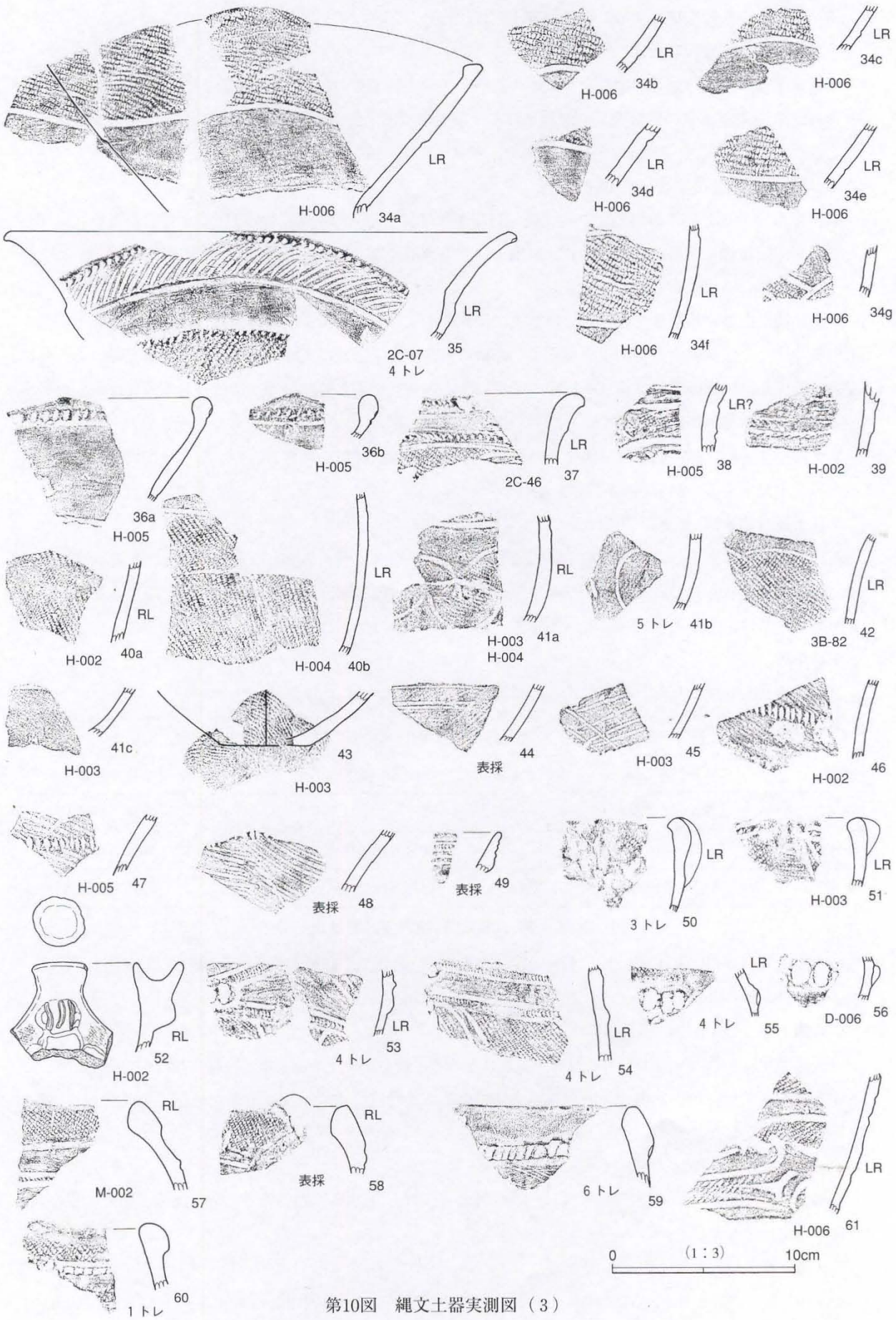
地文に細縄文を施文後、沈線で連弧文や雲形の文様を描き区画外を磨消するもの。40bには連弧文の一部とみられる沈線区画がみられる。40abの出土位置を図示した（第６図・個体11)。41a～ｃは瓢形土器。41a・bは互連弧磨消縄文（注３、鈴木　1981）の一部であるが、描き方が雑であるので一見した感じ別個体の様な印象を受ける。第６図に出土位置を図示する(個体６)。42は磨消連弧文である。加曽利Ｂ３式に比定した。

Ａ類11種（第10図43、図版６）

壺形土器の底部片。全体に細縄文を施す。

Ｂ類（第11図74～76、図版６）

半精製土器。胎土や焼成、施文の仕方等が精製土器と比較するとやや見劣りのするところがある。地文に粗い縄文を施文後、斜位の条線文を施すもの。74・76は竹管状の工具を用い２尖の条線を、75は棒状工具に



第10図　縄文土器実測図（３）

よる一本引きの条線を描出する。加曽利Ｂ１式に比定した。

Ｃ類１種（第11図77a～d、図版６）

半粗製土器。地文に荒い縄文地を施文後、斜格子沈線を施すもの。77aは口縁部に程近く横位の沈線がみられる。沈線より上位に鼠の囓り痕がみられる。第６図に出土位置を図示する（個体１）。加曽利Ｂ１式に比定した。

Ｃ類２種（第11図78a～c、図版６）

半粗製土器。地文に粗めの縄文を施文後、口縁下に隆線を巡らすもの。78cは隆線が目立たない。いずれも口縁部内面に浅く凹線が巡る。第６図に出土位置を図示する（個体９）。加曽利Ｂ１式に比定した。

Ｃ類３種（第11図79・80、図版６）

地文に縄文を施文後隆帯を貼付し、隆帯上に押捺を加えるもの。隆帯上の押捺には、マッチ棒状の工具を用いる。また、口縁部内面に凹線を巡らす。79は口唇部から隆帯に粘土紐を２つ隆帯貼付させている。80は隆帯上のほか、口縁直下にもマッチ棒状の工具による刺突列を巡らせている。加曽利Ｂ１式に比定した。

Ｃ類４種（第11図81、図版６）

地文に縄文を施文後、口縁部に隆帯を貼付し、隆帯上に指頭押捺を加えるもの。胴部には竹管状工具による条線文を描出する。加曽利Ｂ１式に比定した。

７群土器（第９図31～33、図版５）

６片識別し全て図示した。半粗製土器。頸部～口縁部にかけて緩く外反しながら立ち上がる紐線文系の深鉢。地文に櫛歯状工具による右下がりの集合条線を施文後、口縁部直下に爪形の刺突列を巡らせている。第６図に31・33の出土位置を図示する（個体７・12）。曽谷式に比定した。

８群土器

24片識別し全て図示した。細別型式ごとの数量比について次表に示す。

型式名	精製・帯縄文系	%	粗製・主に紐線文系	%	合　計
安行１式	８片（８個体）	62	１片（１個体）	9	９片（９個体）
安行２式	５片（５個体）	38	０片	0	５片（５個体）
安行式小片	０片	0	10片（10個体）	91	10片（10個体）
合　計	13片（13個体）	100	11片（11個体）	100	24片（24個体）

第４表　８群土器細別型式数量比

精・粗、文様等によりＡ類：主に帯縄文系の精製土器、Ｂ類：主に紐線文系の半粗製～粗製土器、Ｃ類：無文土器の３類に分類した。

Ａ類１種（第10図39、図版５）

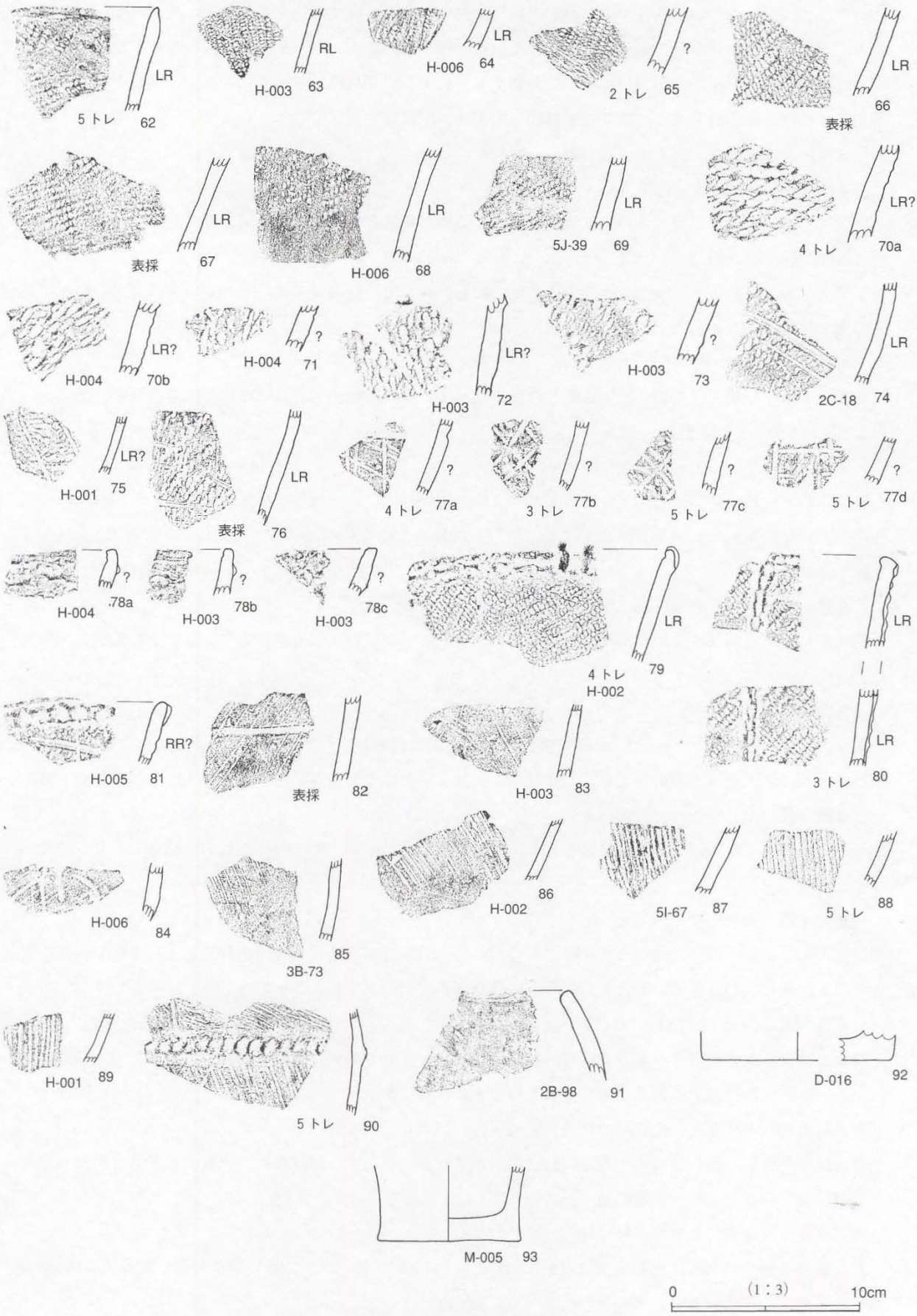
口縁部がすぼまり、胴張りのする器形か瓢形になろう。地文に縄文を施文後、横線を数段巡らせて区画し、不要部分を磨消して磨き、縄文帯を浮き出させている。また縄文帯の下端に結節沈線を１条巡らせている。安行１式に比定した。

Ａ類２種（第10図44・45、図版６）

小振りな帯縄文系土器の胴部片。器面を丁寧に磨いたのち、１本曳きの条線で丁寧に疎らに施文するもの。安行１式に比定した。

Ａ類３種（第10図50・51、図版６）

頸部から直立～やや内湾気味に立ち上がる深鉢の口縁部片。口唇部内面に稜が張る。51は口縁部直下にい



第11図　縄文土器実測図（４）

びつなフジツボ状の突起が貼付する。突起の貼付に先立ち器面に縄文を施文している。突起の貼付後、口縁直下に上下を横線に挟まれた刻目帯を巡らしている。また口唇部上に鼠の囓り痕がみられる。安行１式に比定した。50は51と同様の器形で口縁直下に耳状突起を有する。突起の貼付に先立ち器面に縄文を施文している。突起貼付後に頸部を強く撫でつけて器面を凹ませ、口縁部帯縄文帯を浮き立たせている。突起の形状や刻目文帯により50の方が古く曽谷式に遡るかもしれない。

Ａ類４種（第10図52、図版６）

波状把手の口縁部片。波頂下の瘤状突起は縦に３条の刻みを有する。安行２式に比定した。

Ａ類５種（第10図53･54、図版６）

細縄文の地文上に上下に横線を伴う刻文帯で器面を区画して、区画外を磨消し、刻文帯の交点上に豚鼻状貼付文を付するもの。安行２式に比定した。

Ａ類６種（第10図55・56、図版６）

細縄文を地文に施文後Ａ類５種に類似した瘤を貼付するもの。瘤の形状は55は豚鼻状であるが、56は少し異なる。安行２式に比定した。

Ａ類７種（第10図57・58・60、図版６）

胴張りして、口縁に向かってすぼまる器形の深鉢の口縁部片。口唇部が肥厚する。肥厚した部分は縄文帯となり、以下を横線で区画して磨消している。57・60は刻文帯を伴っている。58は口縁部に小突起が付く。安行１か２式。

Ｂ類１種（第10図46･47･48、図版６）

器形が外傾する胴部片。地文に密な集合条線を施文後、１条の刺突列を巡らしている。安行１式に比定した。

Ｂ類２種（第10図59、図版６）

Ａ類７種と同じ形態の口縁部片。口縁の肥厚し始める所に角棒状工具の連続刺突による刻文帯を巡らせる。胴部には２尖の工具による条線文を丁寧に描く。紐線文系土器であるが半精製土器のような顔つきである。

Ｂ類３種（第11図82～86、図版６）

２尖の工具により条線文を斜位に描くもの。82は横線が１条巡る。82～84は条線間が疎らであり、85・86は密である。

Ｂ類４種（第11図90、図版６）

胴部が張り出し、口縁に向かってすぼまる器形の深鉢の胴部片。隆帯貼付予定位置を境に条線の向きを変えている。条線描出後隆帯を貼付し、隆帯上に爪形の連続刺突文を加えている。

Ｃ類（第11図91、図版６）

Ｂ類２種と同様の器形を有するが口縁部は肥厚しない。無文で器面がよく磨かれている。

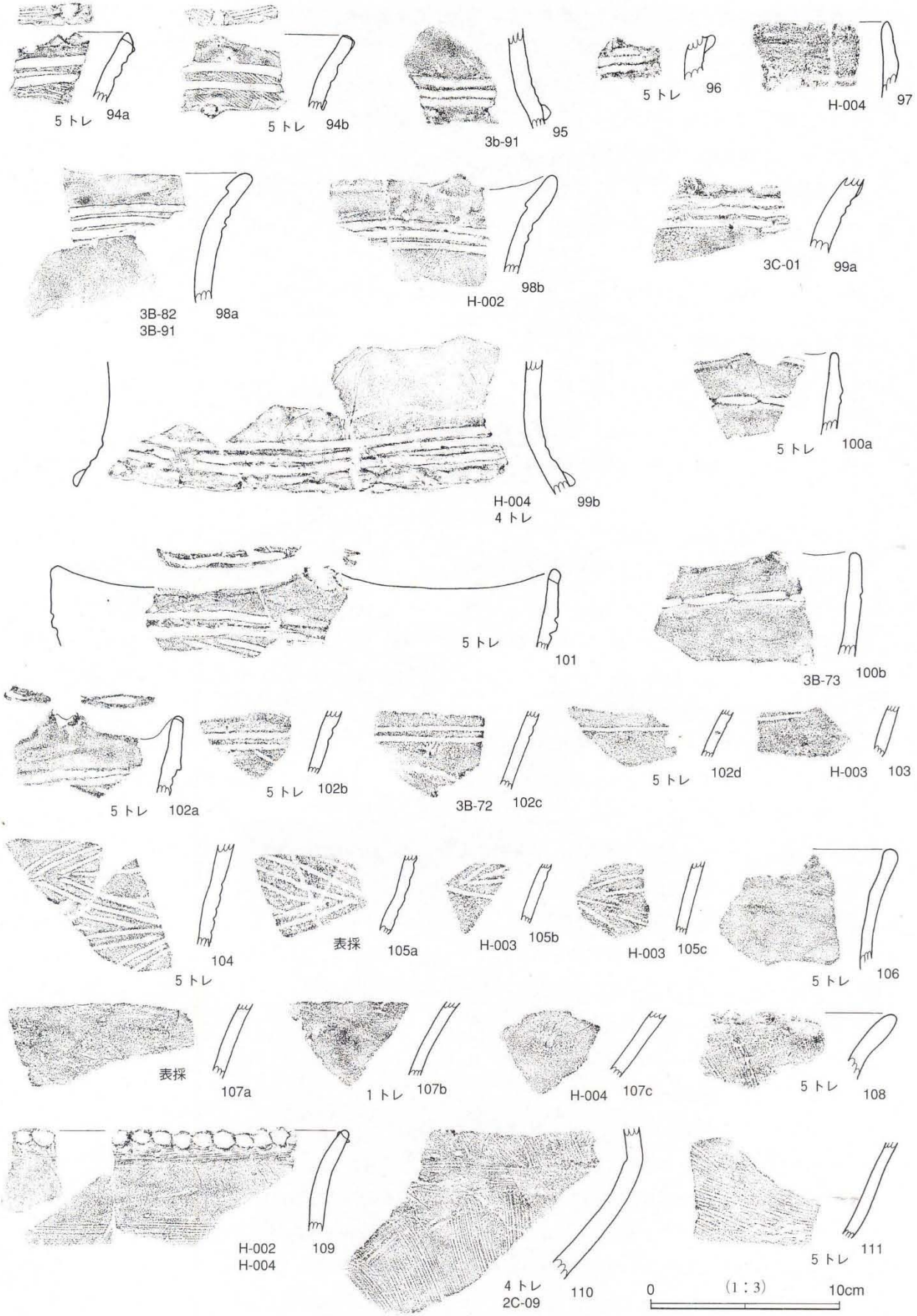
６～８群土器に属する縄文が施文された粗製土器を集めた。

比較的細かな縄文を施文するもの（第11図62～69、図版６）

縄文が密なものと疎らなものがある。62は器形が緩やかに外傾する口縁部片。口唇部の形状は尖頭状をなす。65は施文のされない無文域を持つ。加曽利Ｂ～安行２式の間に属する。

粗大な縄文を施文するもの。（第11図70ab～73、図版６）

同一個体の破片である70abの出土位置を図示した。（第６図・個体５）72は口縁部の端が残存する胴部片。器形は緩やかに外傾しながら立ち上がる。



第12図　縄文土器実測図（５）

６～８群土器に属する集合条線文が施文された粗製土器を集めた。

条線は縦位に施している。（第11図87～89、図版６）

７～８群の土器の底部（第11図92・93、図版６）

92は推定底径10cm、93は底部が完存している。底径７cmを計る。

９群土器（第10図61、図版６）

２片識別し１片図示した。地文に縄文を施文後、沈線で入組文など描き、不要部分を磨消している。要所に三角陰文を付する。精製土器。第７図に出土位置を図示する（個体９）。安行３a式に比定した。

10群土器

104片出土し36個体分識別した。施文要素ごとの割合は次表のとおりである。

型式名	沈線文	片数(%)	個体数(%)	無文・擦痕文	片数(%)	個体数(%)	細密条痕文	片数(%)	個体数(%)	合　計
荒見２式	36片（14個体）	35	39	11片（９個体）	11	25	57片（13個体）	55	36	104片（36個体）

第５表　10群土器数量比

文様によりA類：主に沈線で文様を描出するもの、B類：無文のもの、C類：主に細密条痕で文様を描出するもの、の３類に分けた。

A類１種（第９図15、図版５）

１個体分出土した。波状口縁の深鉢である。器形は緩く外傾気味に立ち上がり口縁部付近でやや内反する器形を呈する。口唇部の断面は尖頭状を呈する。復元口径24.8cm、残存器高20cmを計る。器形の傾きが変化する頸部付近に、割り箸状工具による横線を巡らせて区画している。胴部以下にも同じ工具を用いて縦長の刺突文を縦位に施し、器面を巡らせている。口唇部断面及び頸部の沈線文の形状より該期に位置づけた。

A類２種（第12図94ab、図版７）

地文に細密条痕文を有するもの。器形が外傾しながら立ち上がり口縁部付近で外反する。波状口縁の土器で波長部には富士山状の突起が付く。沈線は太く明瞭である。95ｂにはボタン状の扁平な貼付文がみられる。

A類３種（第12図95・96・99ab、図版７）

隆帯が巡るもの。95・99abは沈線間に朱を塗布する。95・99abは甕形土器。第７図に99abの出土位置を図示した（個体８）。

A類４種（第12図97・98ab、図版７）

97は平縁の口縁部片。胎土は軽鬆でまるで軽石のようである。98abは山形の小型突起が付く。口縁は内側に折り返している。沈線間に朱を塗布する。第７図に98abの出土位置を図示した（個体４）。

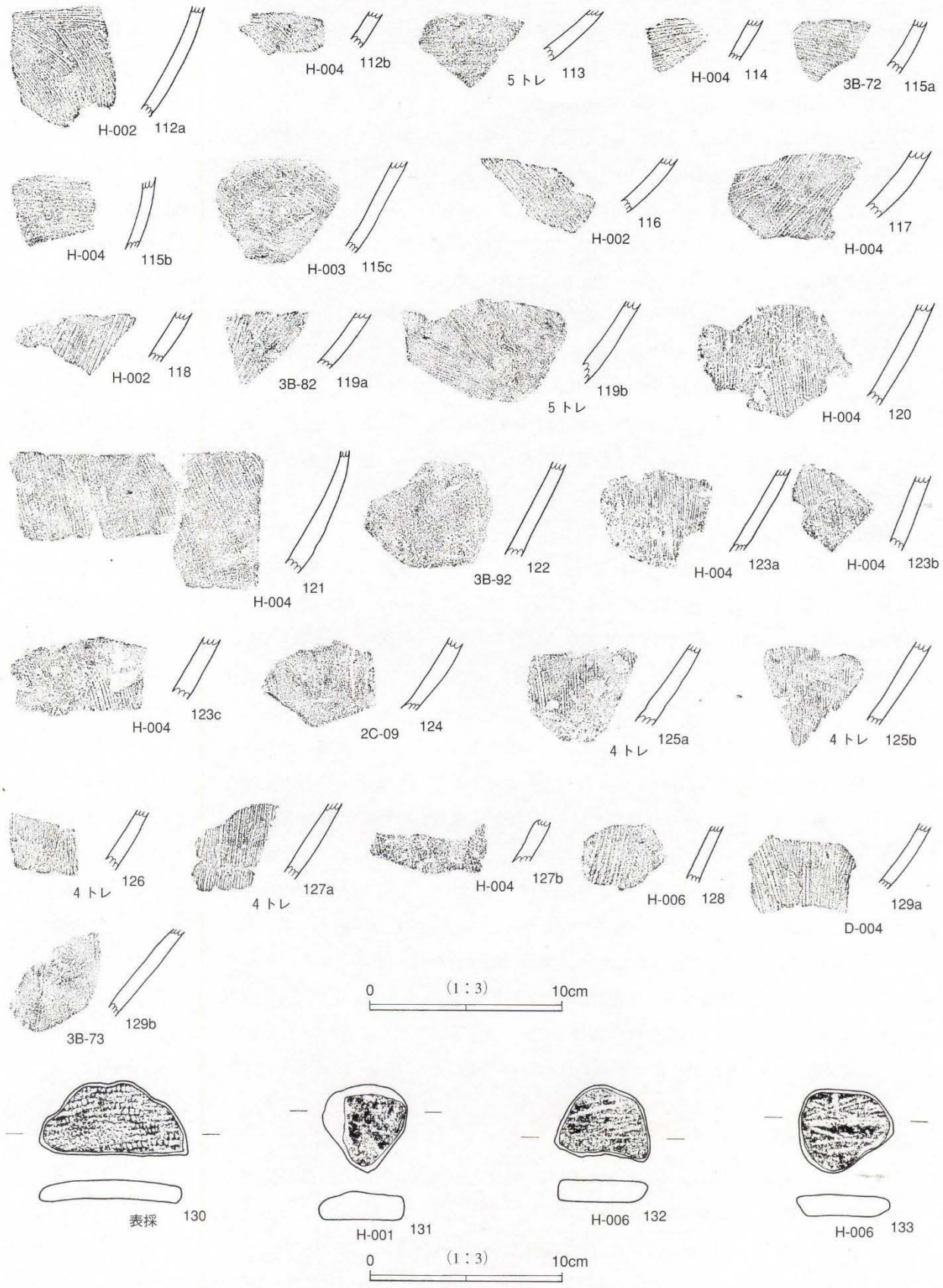
A類５種（第12図100ab、図版７）

小三角状の突起を有する口縁部片。短切沈線を頸部に巡らす。

A類６種（第12図101～105c、図版７）

いわゆる雑書文を有するもの。

９片出土し２個体分を識別した。101・103・105abcは直接接合しないが同一個体。第７図に出土位置を図示した（個体３）。復元口径24.7cm、残存器高4.3cmを計る。器形は外傾気味に緩く内湾しながら立ち上がる。口縁部には富士山状の突起が４単位巡る。頸部に２条の沈線を巡らせ以下に菱形文様を描出する。また口唇部上にも同じ工具を用いて（突起の部分を除いて）沈線文を施文している。102abcd・104も直接接合しないが同一個体。第７図に出土位置を図示した（個体５）。前掲の個体よりやや小振りな土器である。器形・口縁部の形状・施文等、前掲の個体とほぼ同じである。



第13図　縄文土器実測図（６）

Ｂ類（第12図106・107abc、図版７）

無文のもの。11片出土し９個体識別した。小片を除き２個体を図示した。106は口縁部片。器形は直立気味に立ち上がりながら、口縁部付近で外反する。口唇部の形状はなすび状を呈する。第７図に107a～cの出土位置を図示した。（個体１）

Ｃ類（第12図108～第13図129b、図版７）

57片出土し11個体分を識別した。小片を除き７個体分を図示した。108は器形が口縁部付近で著しく外反する。口唇部の形状は丸頭状を呈する。条痕文は縦位に施す。109・112ab・116・118・126・128は直接接合しないが同一個体である。第７図に出土位置を図示した（個体10）。器形が口縁部付近で強く外反する。地文に横位の細密条痕文を施すが、器形の変換点付近は無文帯にしている。口唇上に連続して押捺を加え口唇部を凸凹にしている。110・120・123abc・125abも直接接合しないが同一個体である。第７図に出土位置を図示した（個体２）。頸部がすぼまり胴張りする甕形土器である。110は頸部～肩部片である。最初に縦位の条痕を施文後、一番胴張りする部分に横位の条痕文を加えて器面を区画している。111・113・115abc・119ab・122・129abは直接接合しないが同一個体。第７図に出土位置を図示した（個体６）。全て胴部片である。条痕文の施文方向は器面の上方では横～斜位に下方では縦位に施している。117・121・124は直接接合しないが同一個体。第７図に出土位置を図示した（個体７）。甕形土器の肩より下の胴部片である。条痕は全て縦位に施文する。

土製円盤（第13図130～133、図版７）

130には単節縄文ＲＬが施文される。重量10.7g。131の器面にも荒い縄文があるようだが摩滅していてよく観察できない。重量7.3g。132の器面には条線文が施文される。重量7.8g。133の器面にも条線文が観察される。重量7.5g。130は縁辺を打ち欠いて形を整えた痕跡（凸凹痕）が明瞭にみられる。その他のものは断面が摩滅している。

注１‥支谷の谷頭付近で検出される陥穴は、主軸をコンターラインに斜・直行させて谷頭源頭部を取り巻くように２～３基配置させる「支谷パターン」を示す例が多い。陥穴の立地パターンについては「第Ⅷ章 第１節　９．土坑の立地パターン」『館町遺跡Ⅲ』（伊藤　1987）434頁３行～20行によった。

注２‥確認調査により調査区内は谷地形のため台地上より土の堆積が厚く、土師期遺構の確認面がテフラ類似の褐色系土壌であること。土師期遺構の確認面以下には縄文土器の包含が認められたが住居跡等の生活遺構は伴わず陥穴しか検出されなかったこと。などから調査期限を間近に控え本調査の主眼が土師期遺構の完掘に絞られたため、縄文時代の包含層に本格的な調査の手が及ばなかった。

注３‥「遺物特論Ⅱ 附章　第３節 曽谷式について」『取手と先史文化 下巻』（鈴木　1981）82頁33行にある互連弧充填縄文（堀越政行　1977※原点未見）は第10図41abと同じ文様の充填縄文を描くものであるが、本例は磨消手法によるためこの呼称を用いた。

参考引用文献

安孫子昭二　1981「加曽利B式とその細分」『縄文土器大成③後期』　講談社

池上啓介　1933「広畑貝塚」『史前学雑誌』第５巻第５号

池上啓介　1937「千葉県印旛郡臼井町遠部石器時代遺跡の遺物」『史前学雑誌』第９巻第３号

伊藤　建　1987「９．土坑の立地パターン」『館町遺跡Ⅱ』　八王子館町遺跡調査団

伊藤晋祐・増田修　1980『千網谷戸遺跡調査報告』　桐生市教育委員会

稲見英輔　1999「第Ⅴ章 縄文時代」『鷺山入遺跡』　財団法人山武郡市文化財センター
大塚達朗　1989「加曽利B式三細別に於ける齟齬の解消」『先史考古学研究』　阿佐ヶ谷先史学研究会
忍澤成視　1999『上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 祇園原貝塚』　市原市教育委員会
金子裕之　1998『奈良国立文化財研究所資料 第49冊 山内清男資料９』　奈良国立文化財研究所
鈴木公雄　1964「姥山Ⅱ式土器に関する二・三の問題」『史学』第37巻第１号
鈴木正博・鈴木加津子 1981『取手と先史文化－中妻貝塚の研究－下巻』　茨城県取手市教育委員会
薗田芳雄　1954『千網谷戸』　両毛考古学会
鷹野光行ほか 1966『日本土器辞典』　雄山閣
西村正衛　1983「23･24 千葉県成田市荒海貝塚」『利根川下流域の研究』　早稲田大学出版部
能登建ほか　1989『縄文土器大観４後期 後期 晩期 続縄文』　小学館
堀越政行　1976『姥山貝塚のはなし』
山内清男　1967『日本先史土器図譜』（再版）　先史考古学会
山内清男　1979『日本先史土器の縄文』　先史考古学会
渡辺修一　2001「第７章　４．荒海川表遺跡の編年的位置」千葉県史編さん資料『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』第２分冊　千葉県

縄文土器の出土傾向

前期は土師期の遺構から２点のみの出土でありトレンチ（包含層を掘り抜いている）からの出土もない。

中期は、阿玉台式期は調査区域から少量が万遍なく出土している。加曽利E式期は１～３トレンチの範囲内に収まっている。

後期は、調査区域から万遍なく出土しているが、４トレンチ付近からの出土がもっとも多く、分布の中心地域とみられる。

晩期は、主に３トレンチ以東に分布が広がっており５トレンチ付近からの出土がもっとも多く分布の中心地域となっている。

第３節　古墳時代

第１項　竪穴住居跡

Ｈ－００１（第14・15図）

調査区北東端、3B－65・66・75・76に位置する。Ｈ－００６に近接する。単独で検出された。規模は3.28ｍ×3.14ｍを測り、形状は正方形を呈する。

覆土は、自然堆積で５層に分層される。

床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は約40cmを測る。周溝は、カマド部分を除き全周し、幅12cm、深さ６cmを測る。ピットは床面に１本検出された。Ｐ－１はカマドと正対して位置し、径38×27cm、深さ32cmを測る。カマドは北壁中央部に位置し、遺存状態は良好で、径約26cmの火床部が検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、坏３点、鉢１点、甕８点、甑１点、ミニュチュア土器１点、支脚１点、砥石１点、計16点を図示した。覆土一括遺物とＰ－１付近から南東コーナーにかけて出土した甕（12）を除き、ほとんどがカマド周辺から出土した。

１～３は土師器坏である。１は口縁部～体部が１/3程遺存する。口縁部ヨコナデ後外面のみミガキ、体部外面ヘラ削り、体部内面ミガキ。法量は、口径12.2cm、最大径13.4cm、残存器高 2.2cmを測る。覆土一括遺物である。２は口縁部は1/2程遺存し、体部～底部は完存する。法量は、口径12.1cm、最大径13.6cm、器高3.4cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラ削り後ミガキ。３は口縁部～体部は3/4程遺存し、底部は完存する。法量は、口径13.8cm、器高4.1cm、底径8.4cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面・底面ヘラ削り後ミガキ。

４は土師器鉢で、口縁部～体部は4/5程遺存し、底部は完存する。法量は、口径17.6cm、器高8.8cm、底径6.3cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面・底面ヘラ削り。

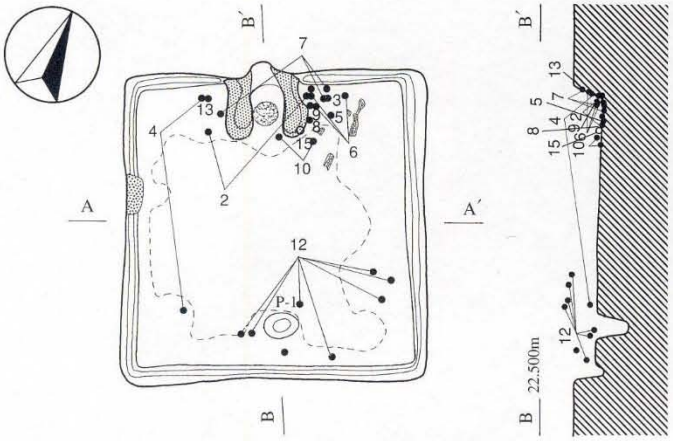
５～12は土師器甕である。調整は部分的にミガキが施される（７・８・11・12）を除き、口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削りを基本とする。５は胴部下端部が1/4程遺存し、底部は完存する。法量は、残存器高7cm、底径6.5cmを測る。６は口縁部は1/2弱遺存し、胴部～底部はほぼ完存である。法量は、口径17cm、器高10.8cm、底径7.6cmを測る。７はほぼ完形である。法量は、口径15.7cm、器高12cm、底径6cmを測る。８は完形である。法量は、口径17.1cm、最大径19.2cm、器高16.7cm、底径6.5cmを測る。９は完形である。法量は、口径13.2cm、最大径14.5cm、器高15.9cm、底径6.2cmを測る。10は口縁部～胴部は完存するが、底部外周部分剥落し1/6程遺存するのみである。法量は、口径15cm、最大径16cm、器高17.4cm、復元底径7cmを測る。11は口縁部が1/5程遺存するのみである。法量は、復元口径23.2cm、残存器高9.8cmを測る。覆土一括遺物である。12は口縁～胴部1/2、底部完存である。法量は、口径19.4cm、最大径25.7cm、器高24.9cm、底径8.8cmを測る。　13は土師器甑で、口縁部は3/4程遺存し、胴部～底部は完存する。法量は、口径22cm、器高18.9cm、底径7cmを測る。口縁部ヨコナデ後内面のみミガキ、体部内外面ヘラ削り後ミガキ。

14は土師器甕型ミニチュア土器で、口縁部の一部、体部～底部の1/4程が遺存する。法量は、推定口径7.8cm、器高5.8cm、復元底径4cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削り。

15は土製支脚で、先端部11.7cm（32.3g）・基部10.5cm（561g）、最大幅10cm、重量593.3gを測る。

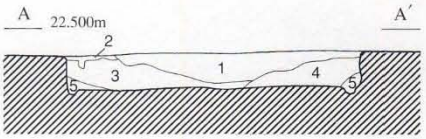
16は砂岩製砥石で、長さ4.3cm、幅3.5cm、厚さ1.7cm、重量31gを測る。端部２個所に敲打痕が観察される。覆土一括遺物である。

本住居跡は、その構造・覆土の堆積状況・出土遺物などから判断して、７世紀初頭の所産であると考えられる。

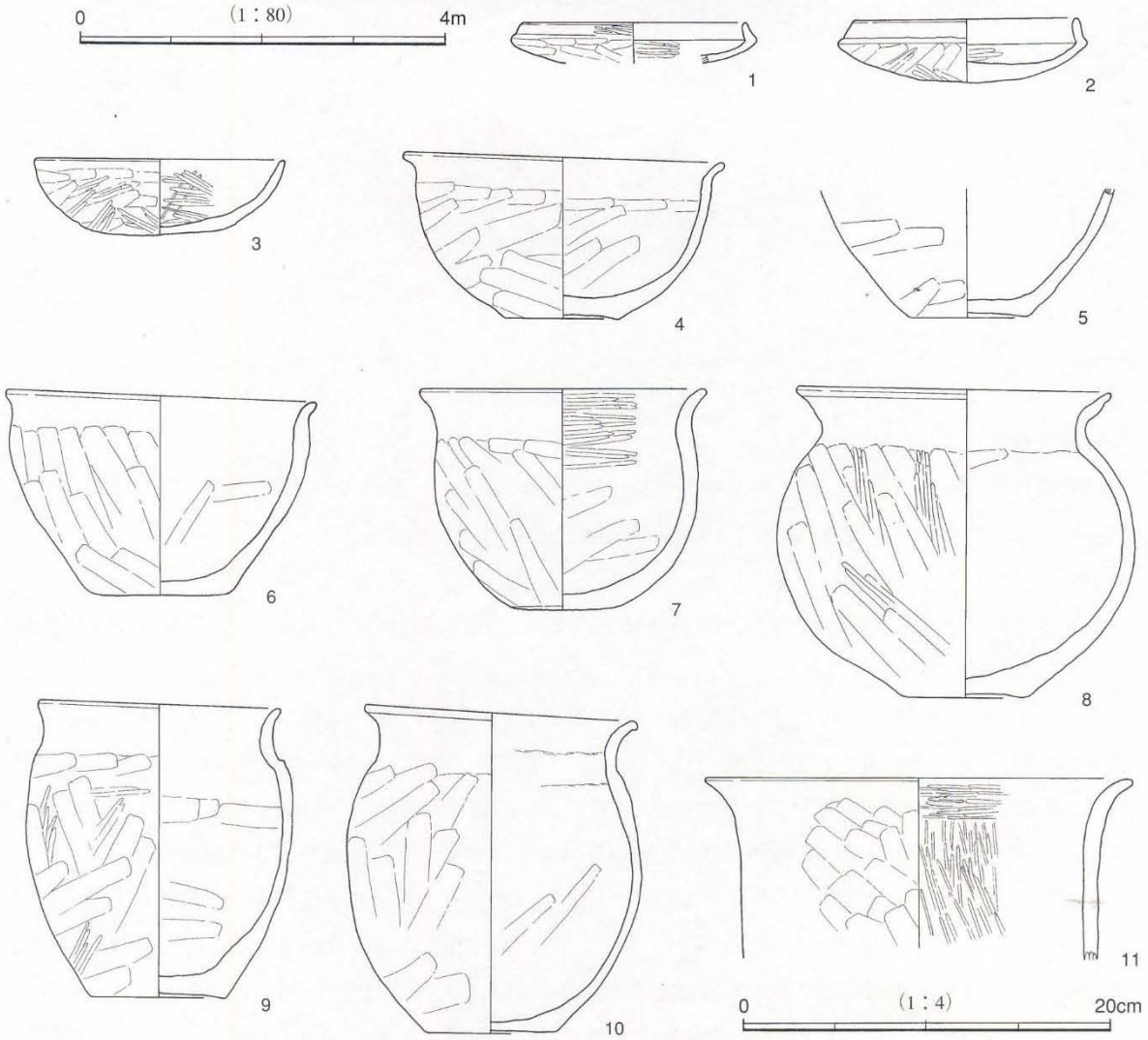


H-001　土層説明

1．褐色　　黒褐色粒子・ローム粒子多く、山砂粒少々
2．褐色　　黒褐色土粒子をやや多く含む
3．黒褐色　テフラ粒子多く、ローム粒子より締まり有り
4．褐色　　１層よりくすんでいてローム粒子やや多く、締まり有り
5．黒褐色　テフラ粒やや多く締まり有り、４層より暗い

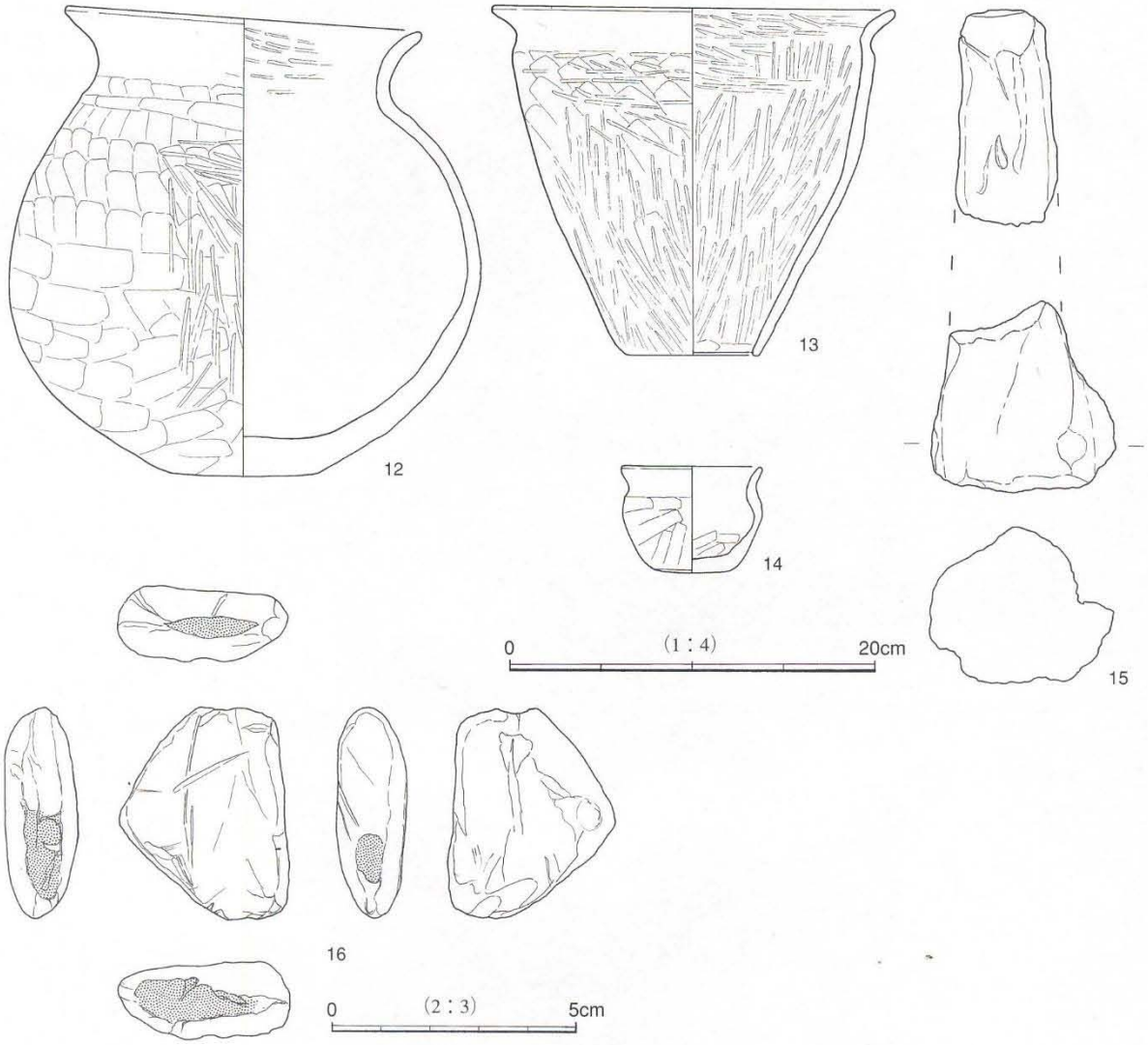


0　(1：80)　4m



0　(1：4)　20cm

第14図　H-001実測図・出土遺物（１）



第15図　H-001出土遺物（２）

Ｈ－００２（第16・17図）

調査区中央部、2C－08・09・18・19に位置する。Ｈ－００４・Ｄ－００６に近接する。Ｄ－０１４・Ｍ－００３に切られる。規模は4.20m×4.10mを測り、形状は正方形を呈する。

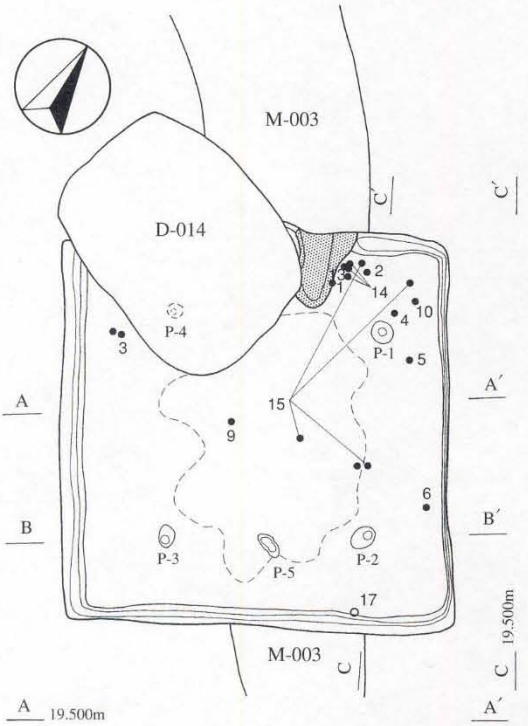
覆土は、自然堆積で10層に分層される。

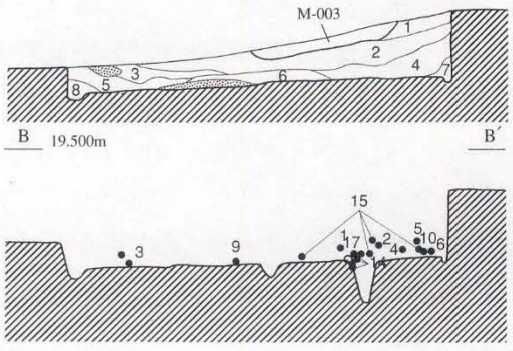
床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は71cmを測る。周溝は、カマド部分及び北東壁を除きほぼ全周し、幅14cm、深さ10cmを測る。

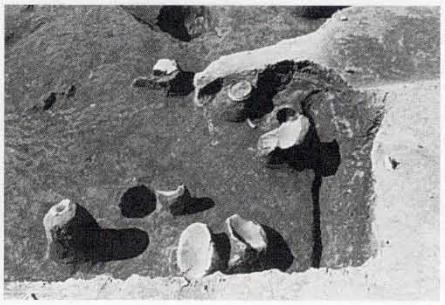
ピットは床面に５本検出された。主柱穴はＰ－１（径25cm×23cm、深さ37cm）・Ｐ－２（径28cm×22cm、深さ45cm）・Ｐ－３（径25cm×15cm、深さ67cm）・Ｐ－４（径17cm×14cm、深さ42cm）の４本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するＰ－５は、径31cm×11cm、深さ16cmを測る。カマドは北壁中央部に位置し、Ｄ－０１４に切られているため遺存状態は不良で、火床部も検出されなかった。

本住居跡から出土した遺物のうち、坏４点、高坏６点、甕４点、甑２点、支脚１点、計17点を図示した。

１～４は土師器坏である。１はほぼ完形である。法量は、口径12cm、最大径13.3cm、器高4cmを測る。内外面ピッチ状付着物が観察される。カマド右袖上から出土した。２は全体の3/4程遺存する。法量は、口径11.7cm、最大径13.3cm、器高4.8cmを測る。カマド右袖付近覆土下層から出土した。１・２とも口縁部内外面ヨコナデ後ミガキ、体部内外面ヘラ削り後ミガキ。３は完形である。法量は、口径13.6cm、最大径

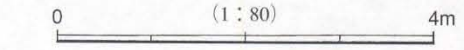


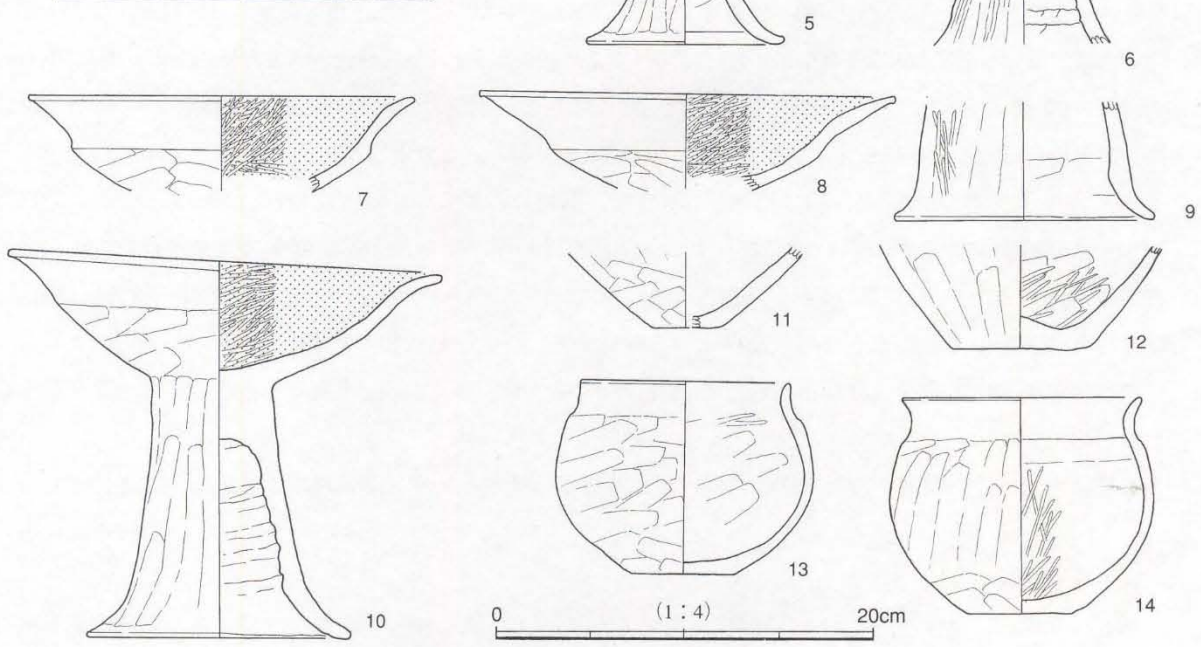




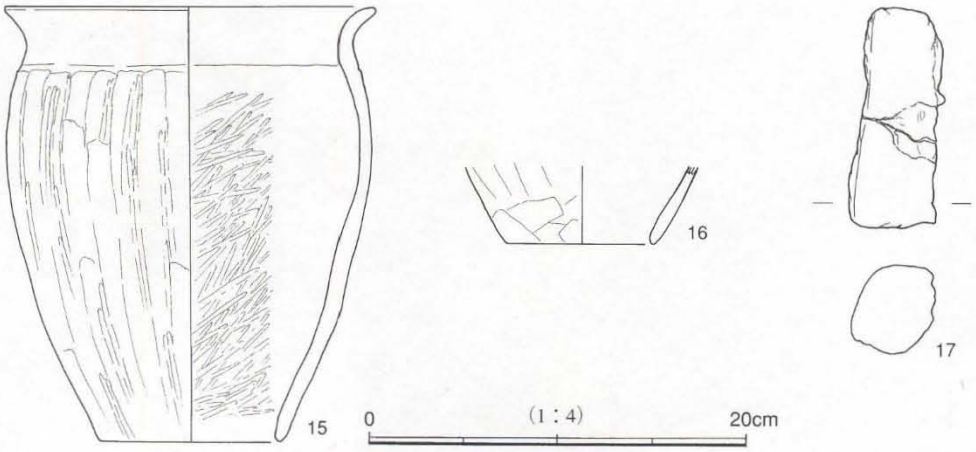
H-002　土層説明

1．暗褐色　ローム粒子多く、ロームブロック少い、締まり有り
2．褐色　　暗褐色土を若干混入、炭化粒子少い
3．褐色　　暗褐色土を若干混入、炭化粒子やや多く、焼土粒子少い
4．暗褐色　褐色土を少混入、締まり欠ける
5．暗褐色　炭化粒子及び炭化物を少し混入、焼土粒子少い
6．褐色　　山砂、焼土炭化物を多く含む、締まり少々あり
7．暗褐色　ややくすんだ褐色土をやや多く含む、締まり若干欠ける
8．暗褐色　褐色土を少混入、締まり欠ける





第16図　H-002実測図・出土遺物（１）



第17図　H-002出土遺物（２）

14cm、器高5.6cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後内面のみヘラミガキ。北西コーナー床直から出土した。４は口縁部1/4程のみ遺存する。法量は、復元口径15cm、最大径16cm、残存器高5cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラ削り。北東コーナー床直上から出土した。

５～10は土師器高坏である。調整は口縁部ヨコナデ後内面のみヘラミガキ、坏部ヘラ削り後内面のみヘラミガキ後黒色処理、脚部外面ヘラミガキを基本とする。５は、裾が欠損するが、坏部～脚部が完存する。法量は、口径13.5cm、器高9cm、推定底径10.4cmを測る。北西コーナー付近覆土下層から出土した。６は脚部のみ遺存する。法量は、残存器高9.5cmを測る。脚部外面部分的にヘラミガキ。南東コーナー付近床直上から出土した。７は坏部1/6のみ遺存する。法量は、復元口径20.4cm、残存器高5cmを測る。覆土一括遺物である。８は坏部1/4のみ遺存する。法量は、復元口径22cm、残存器高5cmを測る。覆土一括遺物である。９は脚部のみ1/3程遺存する。法量は、残存器高6.2cm、復元底径13.7cmを測る。中央部床直から出土した。10はほぼ完形である。法量は、口径23.1㎝、器高19.8㎝、14㎝を測る。北東コーナー床直上から出土した。

11～14は土師器甕である。調整は部分的にミガキが施される（12・14）を除き、口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削りを基本とする。11は底部のみ1/2程遺存する。法量は、残存器高4cm、底径3.6cmを測る。覆土一括遺物である。12は底部のみ3/4程遺存する。法量は、残存器高5.5cm、復元底径4cmを測る。覆土一括遺物。13は口縁部～胴部は1/3程遺存し、底部は完存する。法量は、復元口径11cm、最大径13.5cm、器高10.1cm、底径5.5cmを測る。カマド右袖上から出土した。14は口縁部～胴部は1/3程、底部は4/5程遺存する。法量は、復元口径12.6cm、最大径13.8cm、器高11.4cm、底径5.4cmを測る。カマド右袖付近床直上から出土した。

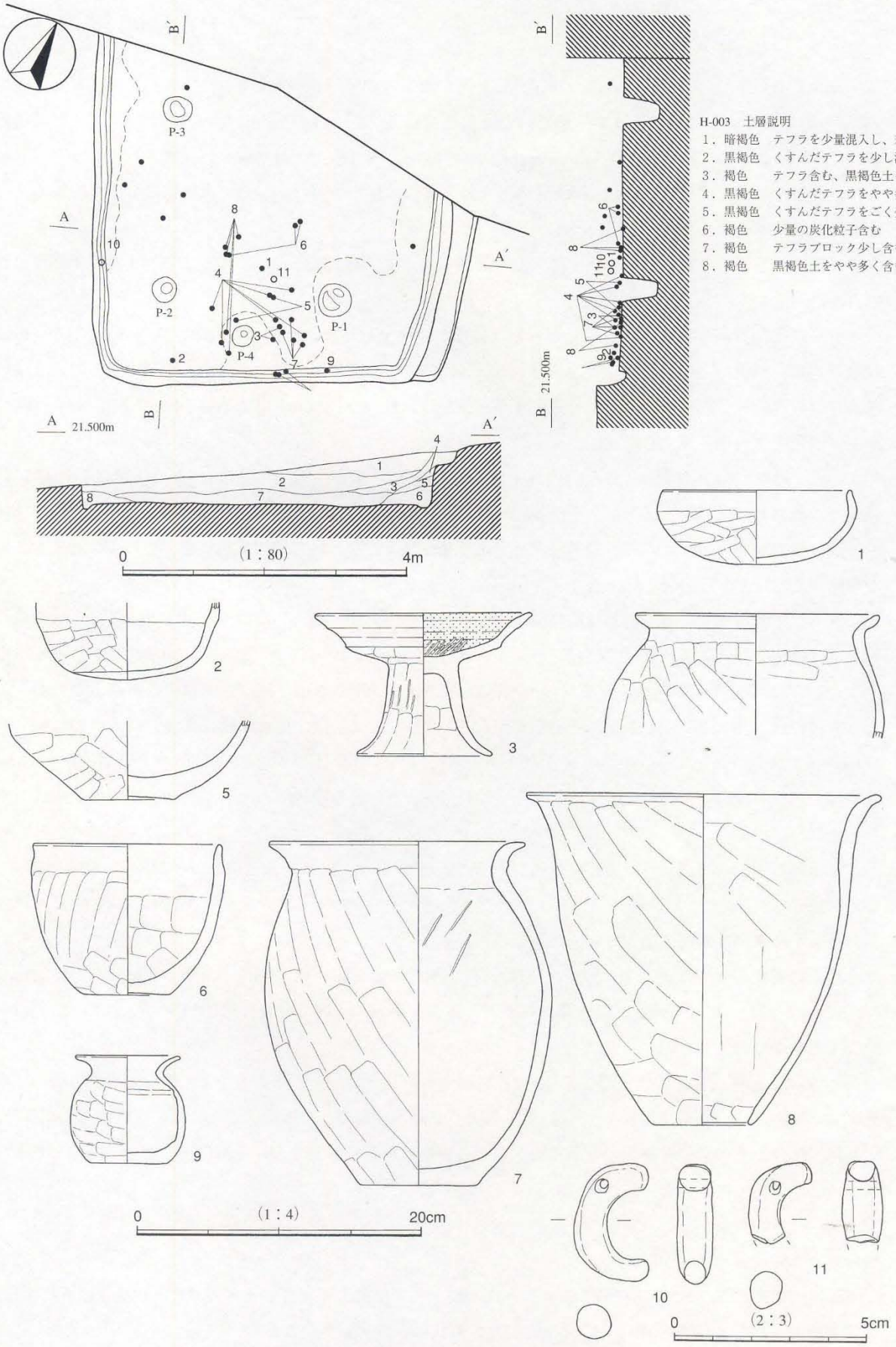
15・16は土師器甑である。15は口縁部は3/4程、胴部は2/3程、底部は1/4程遺存する。法量は、口径19.6cm、器高22.9cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラ削り後ヘラミガキ。カマド右袖付近から中央部にかけて覆土下層及び床直上から出土した。16は下端部のみ1/3程遺存する。法量は、復元底径８㎝、残存器高4.2㎝を測る。体部ヘラ削り後内面のみヘラナデ。覆土一括遺物である。

17は土製支脚で、残存長11.5cm、残存幅4.3cm、厚さ4.7cm、重量24.42gを測る。南西コーナー南壁際床直上から出土した。

本住居跡は、その構造・覆土の堆積状況・出土遺物から判断して６世紀後半の所産であると考えられる。

Ｈ－００３（第18図）

調査区北東部、3B－71・72・81・82に位置する。Ｈ－００４・Ｈ－００６に近接する。北側が調査区外にのび、調査区内では単独で検出された。規模は調査区内で5.00m×5.33mを測り、形状は正方形を呈する



H-003　土層説明

1．暗褐色　テフラを少量混入し、若干明るい
2．黒褐色　くすんだテフラを少し混入、締まり有り
3．褐色　テフラ含む、黒褐色土を若干含む
4．黒褐色　くすんだテフラをやや多く含む
5．黒褐色　くすんだテフラをごく少量含む
6．褐色　少量の炭化粒子含む
7．褐色　テフラブロック少し含む、締まり有り
8．褐色　黒褐色土をやや多く含む締まり有り

第18図　H-003実測図・出土遺物

と思われる。

覆土は、自然堆積で８層に分層される。

床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は59cmを測る。周溝は、調査区内では全周し、幅24cm、深さ13cmを測る。ピットは床面に４本検出された。主柱穴はＰ－１（径約45cm、深さ15cm）・Ｐ－２（径約34cm、深さ44cm）・Ｐ－３（径40cm×36cm、深さ49cm）の３本で、対角線上に配置される。また、Ｐ－４は、径28cm、深さ31cmを測る。調査区内からはカマドは検出されなかった。東壁に沿って一段高くなった有段状施設が付属する。

本住居跡から出土した遺物のうち、坏２点、高坏１点、甕４点、甑１点、小型甕１点、土製勾玉２点、計11点を図示した。

１～２は土師器坏である。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後内面のみヘラナデ。１は1/2程遺存する。法量は、口径13.2cm、最大径14cm、器高5.2cmを測る。南側中央床直上から出土した。２は体部が1/4程、体部下端部～底部が1/2程遺存する。法量は、最大径12.8cm、残存器高5.4cm、底部8cmを測る。南側壁際覆土下層から出土した。

３は土師器高坏で、口縁一部、口辺部～脚部ほぼ完存、裾部一部遺存している。法量は、復元口径15.6cm、器高10cm、復元底径9.6cmを測る。坏部ロクロ整形。口縁部ヨコナデ後内面のみヘラミガキ、坏部ヘラ削り後内面のみヘラミガキ、脚部外面ヘラ削り後ヘラミガキ。坏部内面黒色処理。Ｐ－４付近覆土下層から出土した。

４～７は土師器甕である。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削りを基本とする。４は口縁～胴上部ほぼ完存である。法量は、口径17cm、最大径19.4cm、残存器高8.5cmを測る。南側中央床直上から出土した。５は底部のみ遺存する。法量は、残存器高5.5cm、底径6.4cmを測る。南側中央床直上から出土した。６は口縁～体部が1/3程遺存し、底部はほぼ完存である。法量は、復元口径13.2cm、最大径13.4cm、器高10.5cm、底径6cmを測る。中央床直上から出土した。７は口縁部ほぼ完存、胴部3/4、底部完存である。法量は、口径18cm、最大径20.1cm、器高24cm、底径8.2cmを測る。体部内面ヘラナデ。南側中央床直上から出土した。

８は土師器甑で、口縁部ほぼ完存、胴部4/5、底部一部遺存している。法量は、口径24.8cm、器高23.1cm、推定底径6.8cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部面ヘラ削り後内面のみヘラナデ。中央から南側中央にかけて覆土下層から床直にかけて出土した。

９は土師器甕型ミニュチュア土器で、口縁部1/3、胴部一部欠損、底部完存である。法量は、口径7.2cm、器高7.5cm、底径5.4cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部・底面ヘラ削り後体部内面のみヘラナデ。中央南壁際覆土下層から出土した。

10・11は土製勾玉で、10は完形、11は1/2程遺存する。法量は、それぞれ長さ3.05cm、最大厚0.9cm、重量4.7g、残存長2.1cm、最大厚1cm、重量2.9gを測る。10は西側壁際、11は床面中央の覆土下層から出土した。

本住居跡は、その構造・覆土の堆積状況・出土遺物などから判断して、６世紀後半の所産であると考えられる。

Ｈ－００４（第19・20図）

調査区中央部、2B－89・99・3B－80・90・91・3C－00に位置する。Ｈ－００２・Ｈ－００３に近接する。単独で検出された。規模は5.84m×5.56mを測り、形状は正方形を呈する。

覆土は、自然堆積で10層に分層される。

床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は77cmを測る。周溝は、カマド部分除きはぼ全周し、幅18cm、深さ12cmを測る。

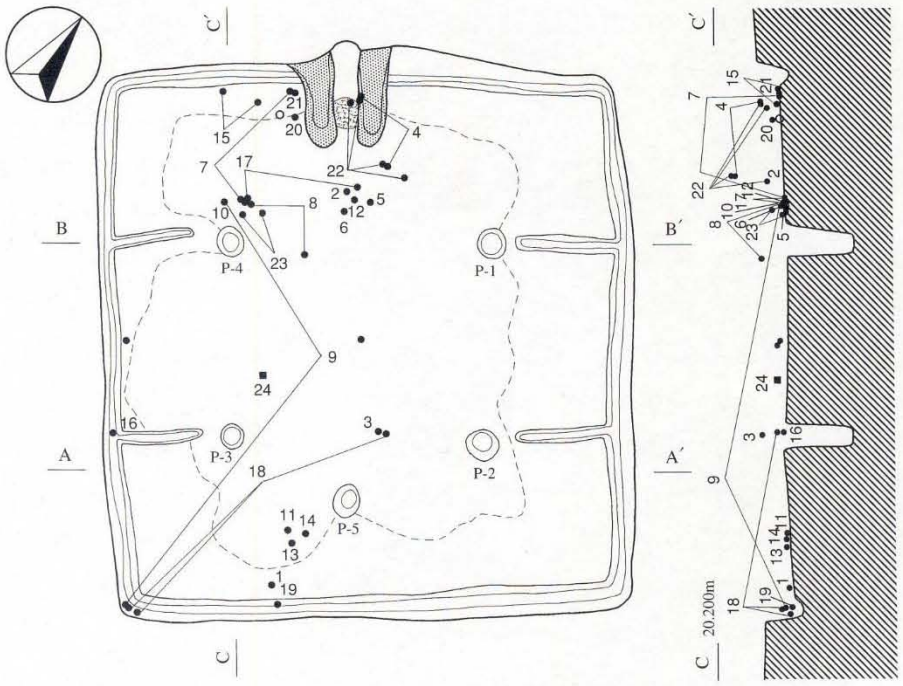
ピットは床面に５本検出された。主柱穴はＰ－１（径32cm×30cm、深さ55cm)・Ｐ－２（径35cm×33cm、深さ62cm)・Ｐ－３（径25cm×24cm、深さ71cm)・Ｐ－４（径33cm×28cm、深さ70cm)の４本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するＰ－５は、径35cm×27cm、深さ38cmを測る。カマドは北壁中央部に位置し、遺存状態は良好で、径35cmの火床部が検出された。各主柱穴の外側から周溝に向かって４条の間仕切溝が東西方向に走る。

住居跡から出土した遺物のうち、坏18点、高坏１点、甕３点、甑１点、鉄製品１点、計24点を図示した。

１～18は土師器坏である。調整は、ミガキを施さない２を除き口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、体部内外面ヘラ削り後ヘラミガキを基本とする。１はほぼ完形である。法量は、口径13cm、最大径13.1cm、器高3.5cmを測る。南壁際中央やや西寄り床直から出土した。内面黒色処理、外面赤色塗彩。２は完形である。法量は、口径12.5cm、最大径12.8cm、器高4.2cmを測る。カマド前床直上から出土した。３は1/3程遺存する。法量は、復元口径12.8cm、残存器高3.6cmを測る。中央覆土上層から出土した。４は5/6程遺存する。法量は、口径13.8cm、最大径14.1cm、器高4.0cmを測る。カマド右袖上とカマド右袖付近覆土上層から出土した。５はほぼ完形である。法量は、口径14.3cm、最大径14.5cm、器高4.2cmを測る。内面黒色処理。カマド前床直から出土した。６は口唇部が一部欠損するが、ほぼ完形である。法量は、口径13.9cm、最大径14.1cm、器高3.8cmを測る。内面赤色塗彩。カマド前床直から出土した。７は1/2程遺存する。法量は、口径14.5cm、最大径14.6cm、器高3.5cmを測る。内面赤色塗彩。カマド左袖付近及びＰ－４付近床直から出土した。８は3/5程遺存する。法量は、口径14.1cm、最大径14.3cm、器高3.9cmを測る。Ｐ－４付近床直上及び覆土上層から出土した。９は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形である。法量は、口径14.4cm、最大径14.6cm、器高4.2cmを測る。内面赤色塗彩。Ｐ－４付近床直上及び南西コーナー周溝中から出土した。10は2/3程遺存する。法量は、口径14.2cm、最大径14.7cm、器高4.1cmを測る。内面赤色塗彩。Ｐ－４付近床直から出土した。11は体部遺存する。法量は、口径14.1cm、最大径14.4cm、器高3.8cmを測る。内面赤色塗彩。Ｐ－５付近床直から出土した。12は完形である。法量は、口径11.1cm、最大径12.5cm、器高3.3cmを測る。カマド前床直から出土した。13は完形である。法量は、口径12.7cm、最大径14cm、器高4.5cmを測る。Ｐ－５付近床直から出土した。14は完形である。法量は、口径11.6cm、最大径13.6cm、器高3.3cmを測る。内面黒色処理。Ｐ－５付近床直から出土した。15はほぼ完形である。法量は、口径12.7cm、最大径14.4cm、器高4.2cmを測る。内面黒色処理。カマド左袖付近床直から出土した。16は口縁～体部1/4程遺存する。法量は、復元口径12cm、最大径13cm、残存器高3.4cmを測る。内面及び口縁部外面赤色塗彩。西壁際中央周溝中から出土した。17は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形である。法量は、口径12.4cm、最大径13.7cm、器高3.8cmを測る。内面赤色塗彩。カマド前床直から出土した。18は口縁部が一部欠損するが、ほぼ完形である。法量は、口径13.2cm、最大径14.5cm、器高4.1cmを測る。内面及び口縁部外面赤色塗彩。中央床直上及び南西コーナー周溝中から出土した。

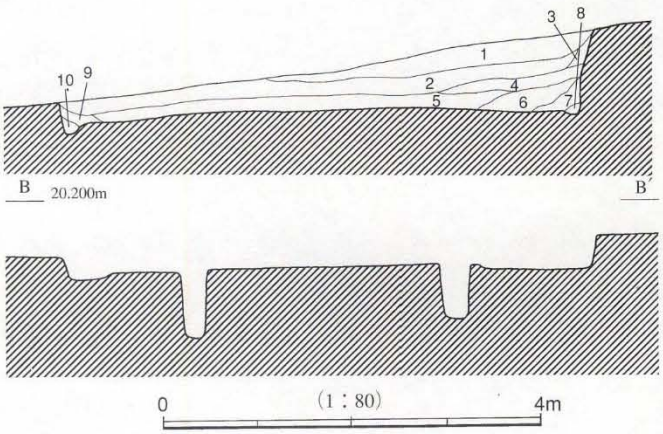
19は土師器高坏で、完形である。法量は、口径18.8cm、器高9cm、底径12.8cmを測る。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、坏部ヘラ削り後みヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ後ヘラミガキ。内面黒色処理。壁際中央やや西寄り周溝中から出土した。

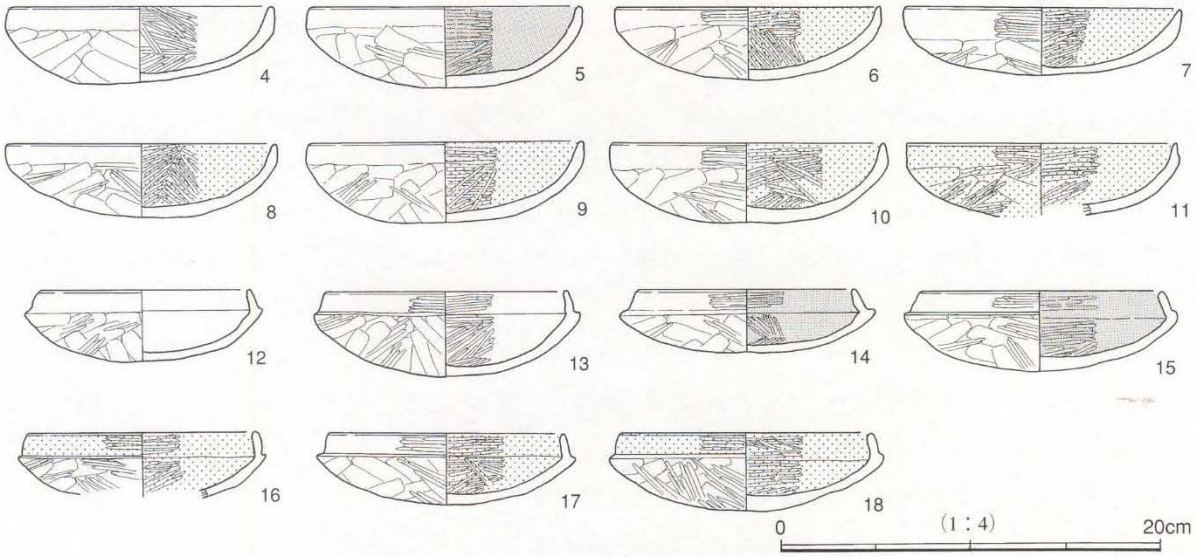
20～22は土師器甕である。調整は部分的にミガキが施される（21）を除き、口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削りを基本とする。20は完形である。法量は、口径13.3cm、最大径13.8cm、器高12cm、底径7cmを測る。カマド左袖脇覆土下層から出土した。21はほぼ完形である。法量は、口径17.8cm、最大径



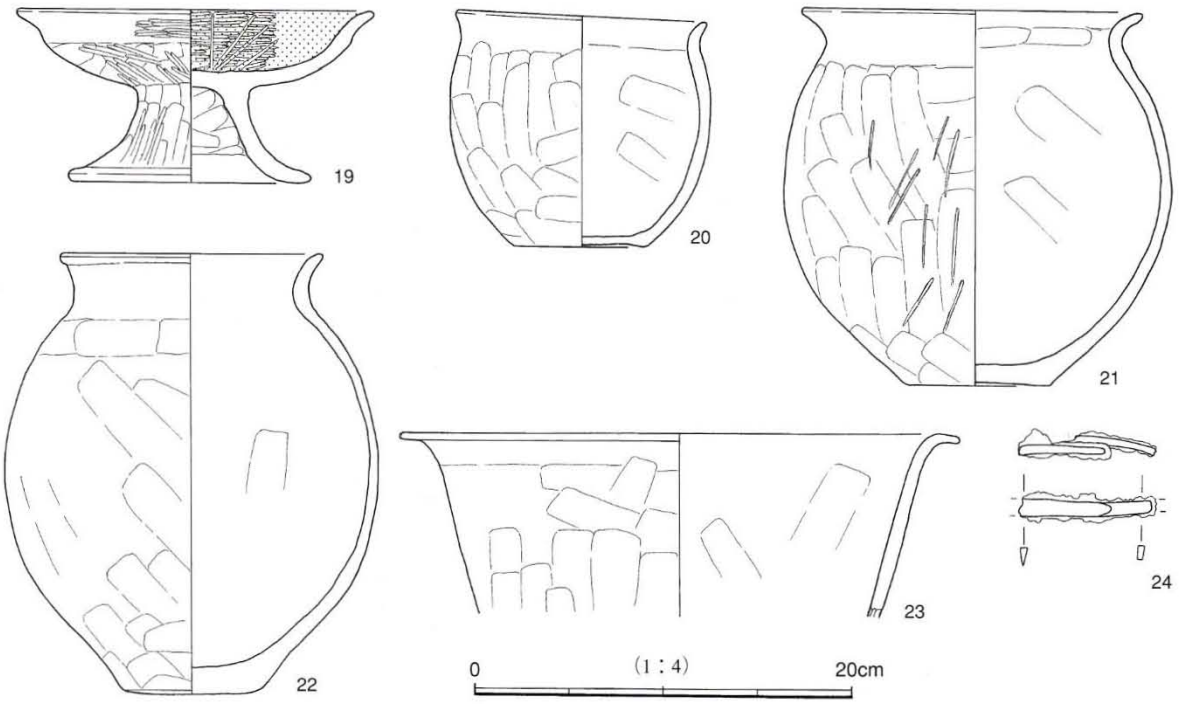
H-004　土層説明

1．暗褐色　ローム粒子やや多い、締まり有り
2．暗褐色　１層よりやや明るく、ロームブロック少い
3．暗褐色　比較的明るくテフラの部分の崩れた物
4．褐色　暗褐色土混入、ローム粒子、ロームブロックやや少々
5．暗褐色　ロームブロックをかなり多く含む
6．暗褐色　ローム粒子多い、ロームブロック多く締まり若干有り
7．暗黄褐色　くすんだソフトロームを主体、締まり有り
8．暗黄褐色　ローム粒子多く、締まり若干欠ける
9．暗褐色　ロームブロック少い、締まり有り
10．暗褐色　ローム粒子多く、締まり欠ける





第19図　H-004実測図・出土遺物（１）



第20図　H-004出土遺物（２）

20.3cm、器高19.6cm、底径7.2cmを測る。カマド左袖脇床直から出土した。22は口縁部は1/4弱、胴部は1/3程遺存し、底部は完存する。法量は、復元口径13.8cm、最大径19.8cm、器高23.1cm、底径7.2cmを測る。カマド内及びカマド前覆土上層から出土した。

23は土師器甑で、口縁～口辺部1/4程遺存する。法量は、復元口径29.4cm、残存器高9.6cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラ削り。Ｐ－４付近床直から出土した。

24は棒状鉄製品で、残存長6.9cm、最大幅1cm、最大厚0.3cm、重量9.8gを測る。中央覆土下層から出土した。

本住居跡は、その構造・覆土の堆積状況・出土遺物などから判断して、７世紀初頭の所産であると考えられる。

Ｈ－００５（第21・22図）

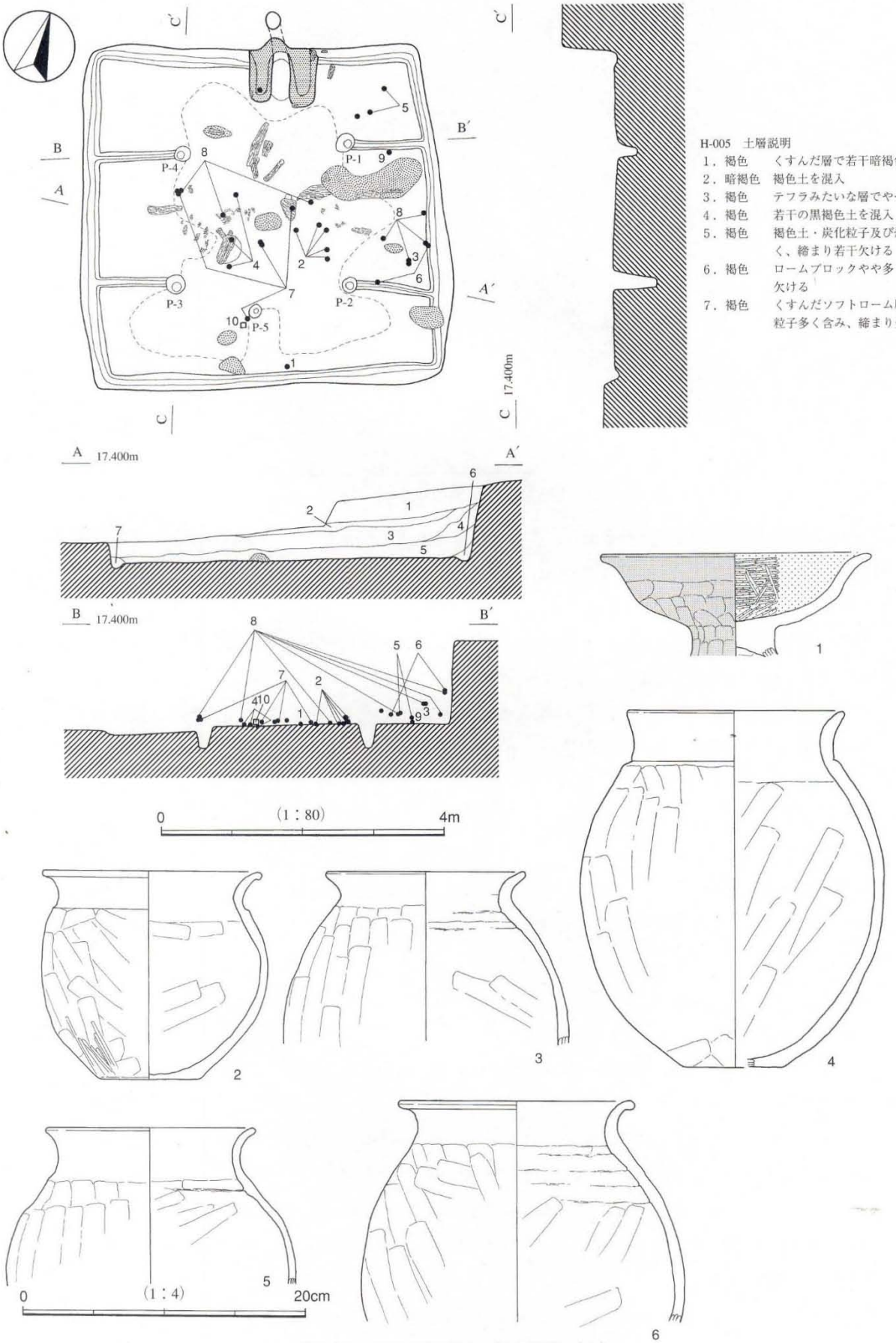
調査区南西端、2C－14・15・24・25・26・34・35に位置する。Ｂ－００１・Ｄ－００７・Ｄ－００８・Ｄ－００９・Ｄ－０１５に近接する。Ｍ－００７に切られる。規模は4.72ｍ×5.07ｍを測り、形状は正方形を呈する。

覆土は、自然堆積で８層に分層される。炭化材を含む焼土が中央から南東コーナーにかかる床直に部分的に分布する。

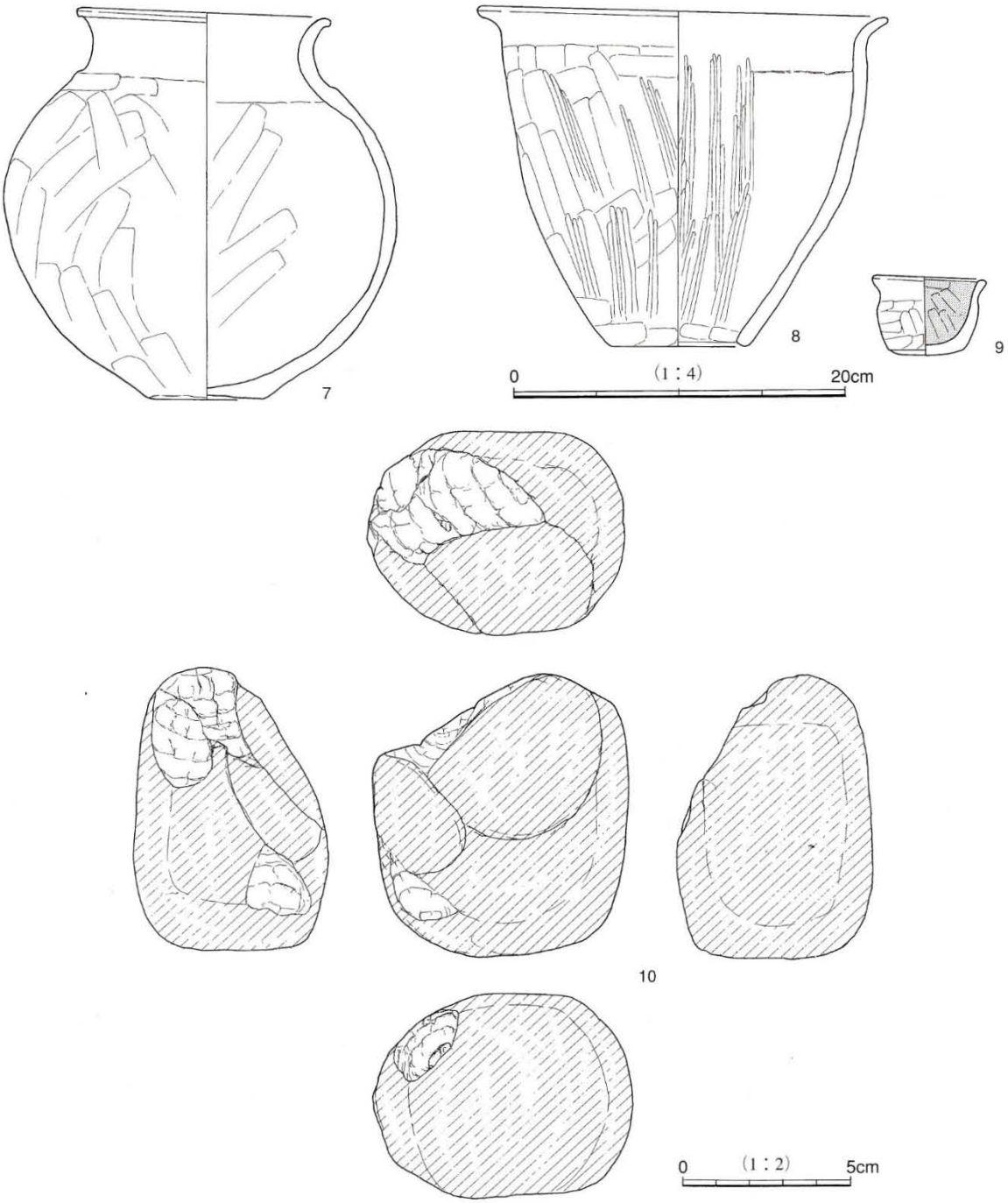
床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は110cmを測る。周溝は、カマド部分除きはぼ全周し、幅11cm、深さ５cmを測る。

ピットは床面に５本検出された。主柱穴はＰ－１（径28cm×23cm、深さ34cm）・Ｐ－２（径20cm、深さ41cm）・Ｐ－３（径27cm、深さ59cm）・Ｐ－４（径23cm×20cm、深さ27cm）の４本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するＰ－５は、径18cm、深さ19cmを測る。カマドは北壁中央部に位置し、遺存状態は良好で、径53cm×37cmの火床部と煙道の開口部が検出された。各主柱穴と周溝を結ぶように４条の間仕切溝が東西方向に走る。

本住居跡から出土した高坏１点、甕６点、甑１点、ミニュチュア土器１点、磨石１点、計10点を図示した。１は土師器高坏で、体部完存、口唇部1/2、脚部一部遺存している。法量は、口径19cm、残存器高7.1cmを



第21図　H-005実測図・出土遺物（1）



第22図　H-005出土遺物（２）

測る。口縁部ヨコナデ後内面のみヘラミガキ、坏部ヘラ削り後内面のみヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ。内面黒色処理、外面赤色塗彩。南壁際中央床直から出土した。

２～７は土師器甕である。調整は部分的にミガキが施される（２）を除き、口縁部ヨコナデ、体部内外面・底部ヘラ削りを基本とする。２は口縁～胴部3/4、底部1/2程遺存する。法量は、口径15.4cm、最大径15.8cm、器高14.7cm、底径7cmを測る。中央付近床直及び床直上から出土した。３は口縁～胴中央部1/2程遺存する。法量は、口径14cm、最大径20cm、残存器高12cmを測る。東壁際中央覆土下層から出土した。４は口縁部2/3、胴部上部～中央、中央～下部2/3、底部1/4程遺存する。法量は、口径15.2cm、最大径21.2cm、器高25cm、復元底径6.8cmを測る。中央床直上から出土した。５は口縁部～胴中央部1/3程遺存す

る。法量は、復元口径14.8cm、最大径20.4cm、残存器高11cmを測る。北東コーナー覆土下層及び床直上から出土した。６は口縁部完存、胴中央部1/3程遺存する。法量は、口径16.7cm、最大径22.7cm、残存器高15.5cmを測る。東壁中央付近覆土中層及び下層から出土した。７はほぼ完形である。法量は、口径15.2cm、最大径23.5cm、器高23.2cm、底径7cmを測る。中央覆土下層～床直から出土した。

８は土師器甑で、口縁部1/2、胴部～底部完存である。法量は、口径24.7cm、器高20.1cm、底径8.2cmを測る。中央及び東壁際にかけて覆土中層及び下層から出土した。口縁部ヨコナデ、体部内外面ヘラ削り後ヘラミガキ。

９は土師器甕形ミニチュア土器で、完形である。体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面赤色塗彩。法量は、口径6.7cm、器高4.6cm、底径4.4cmを測る。東壁際床直から出土した。

10は安山岩製磨石である。法量は、長さ8.5cm、幅7.8cm、厚さ6.2cm、重量523.2gを測る。敲打より剥離した部分を除き、全面磨痕が観察される。Ｐ－５付近床直上から出土した。

本住居跡は、その構造・覆土の堆積状況・出土遺物などから判断して、７世紀初頭の所産であると考えられる。

Ｈ－００６（第23図）

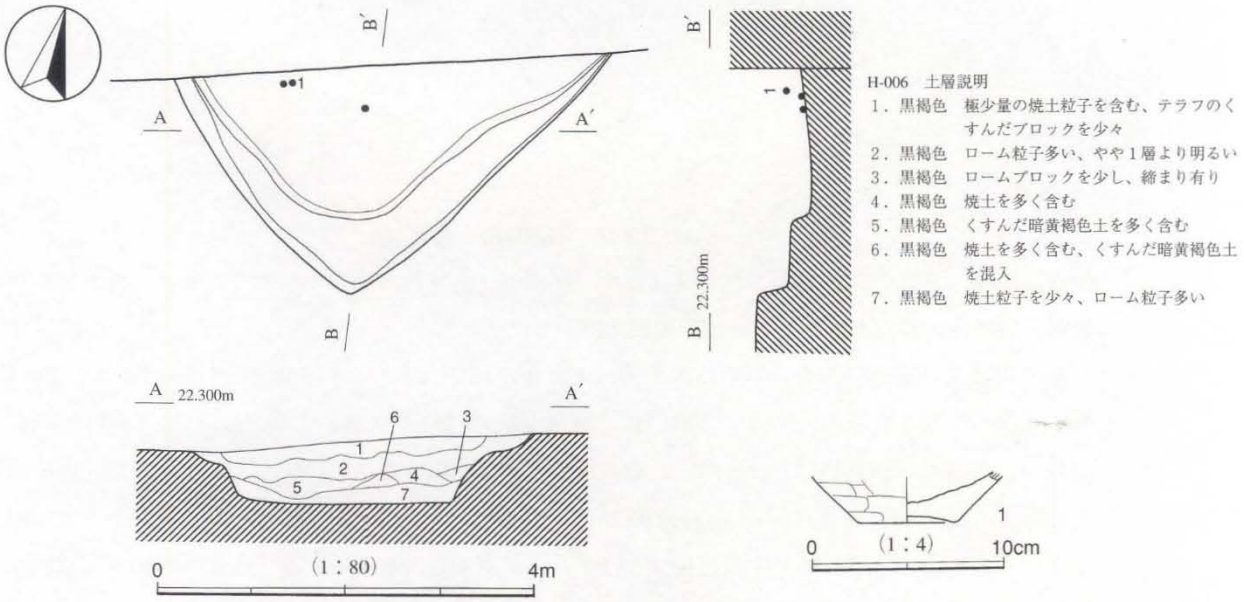
調査区北東部、3B－73・74・83・84に位置する。Ｈ－００１・Ｈ－００３に近接する。北側半分が調査区外にのび、調査区内では単独で検出された。規模は調査区内で3.00m×4.00mを測り、形状は方形を呈すると思われる。

覆土は、自然堆積で10層に分層される。

床面は比較的軟弱な平坦面である。壁高は26cmを測る。周溝及びピット並びにカマドは、調査区内では検出されなかった。コーナー部が一段高くなった有段状施設が付属する。本住居跡から出土した遺物のうち、図化できる土師器甕１点を図示した。

１は底部1/2程遺存する。法量は、残存器高2.4cm、底径5.2cmを測る。体部ヘラ削り後内面のみヘラナデ。覆土下層から出土した。

本住居跡は、部分的な調査であり、帰属時期は明確にできないが、本集落の主体を占める古墳時代後期の所産であると考えられる。



第23図　H-006実測図・出土遺物

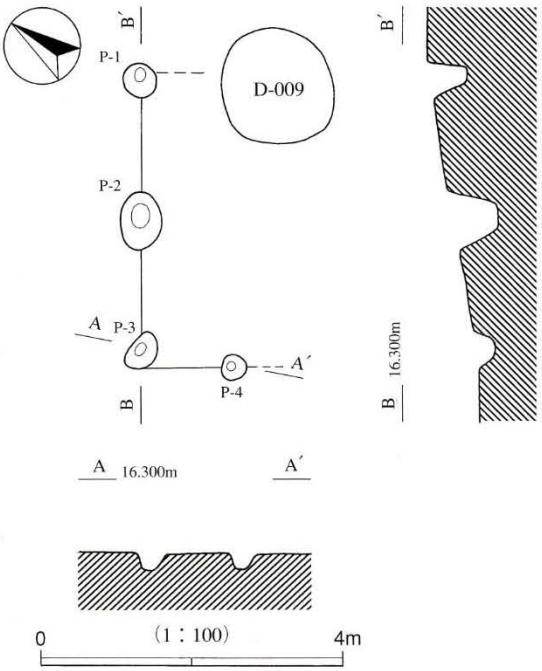
第２項　掘立柱建物跡

Ｂ－００１（第24図）

調査区南西端、2C－23・33に位置する。Ｈ－００５、Ｍ－００７に近接する。斜面に立地するため、南半分は検出されず、Ｄ－００９に切られているため、全体は把握できない。

規模は、現存で長軸4.00ｍ×短軸1.50ｍを測る。南西方向－北東方向に主軸をもつ。プランは桁２間、梁１間以、柱間距離は桁行平均0.48ｍ、梁行平均0.73ｍを測る。各柱穴深度はＰ－１:23cm、Ｐ－２:56cm、Ｐ－３:23cm、Ｐ－４:21cmを測る。

本掘立柱建物跡から遺物は出土せず、帰属時期は明確にできないが、本集落の主体を占める古墳時代後期の所産であると考えられる。



第24図　B-001実測図

第３項　土坑

調査区から古墳時代後期の土坑６基が検出された。調査区中央部から南西部に集中して分布する。土坑同士の重複関係はなく、住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構と重複関係をもち、いずれの遺構よりも新しい。

Ｄ－００６（第26図）

調査区中央南側、2C－28・29・39に位置する。Ｈ－００２、Ｄ－００７、Ｍ－００３に近接する。単独で検出された。平面形は、プラン・底部とも楕円形を呈する。長径2.58ｍ×短径2.10ｍ×深さ0.65ｍを測る。底部に２本のピットを有する。Ｐ－１は径35cm×30cm、深さ42cm、Ｐ－２は径25cm×23cm、深さ48cmをそれぞれ測る。

本土坑から土師器甕２点が出土している。調整は口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削りを基本とする。１は口縁～胴部にかけて1/4程遺存する。法量は、復元口径15.2cm、残存器高7.5cm、最大径18.2cmを測る。体部内面ヘラ削り・ヘラナデ後ヘラミガキ。２は胴部1/3程遺存し、底部ほぼ完存する。法量は、残存器高12.0cm、底径6.8cmを測る。体部内面ヘラ削り後ヘラナデ。

Ｄ－００７（第25図）

調査区南西部、2C－26・27・36・37・46・47に位置する。Ｈ－００５、Ｄ－００６・００８・０１５、Ｍ－００５に近接する。単独で検出された。西側を攪乱に切られる。平面形は、プラン・底部とも不整形を呈する。長径7.05ｍ×短径4.56ｍ×深さ0.48ｍを測る。東側壁際に２本のピットを有する。Ｐ－１は径70cm×63cm、深さ69cm、Ｐ－２は径52cm×33cm、深さ７cmをそれぞれ測る。

本土坑から土師器坏（第29図１）が出土しているが、流れ込みであると思われる。本土坑の性格は、不明である。

Ｄ－００８（第26図）

調査区南西部、2C－35に位置する。Ｈ－００５、Ｄ－００７・００９・０１５、Ｍ－００５、に近接する。単独で検出された。平面形は、プラン・底部とも楕円形を呈する。長径1.55ｍ×短径1.21ｍ×深さ0.52ｍを測る。本土坑から遺物は出土していない。本土坑は、形状から判断して貯蔵穴と考えられる。

Ｄ－００９（第26図）

調査区中央部、2C－08・09・18・19に位置する。Ｈ－００５、Ｍ－００７に近接する。Ｂ－００１を切る。平面形は、プラン・底部とも円形を呈する。長径1.63ｍ×短径1.51ｍ×深さ0.75ｍを測る。本土坑から遺物は出土していない。本土坑は、形状から判断して貯蔵穴と考えられる。

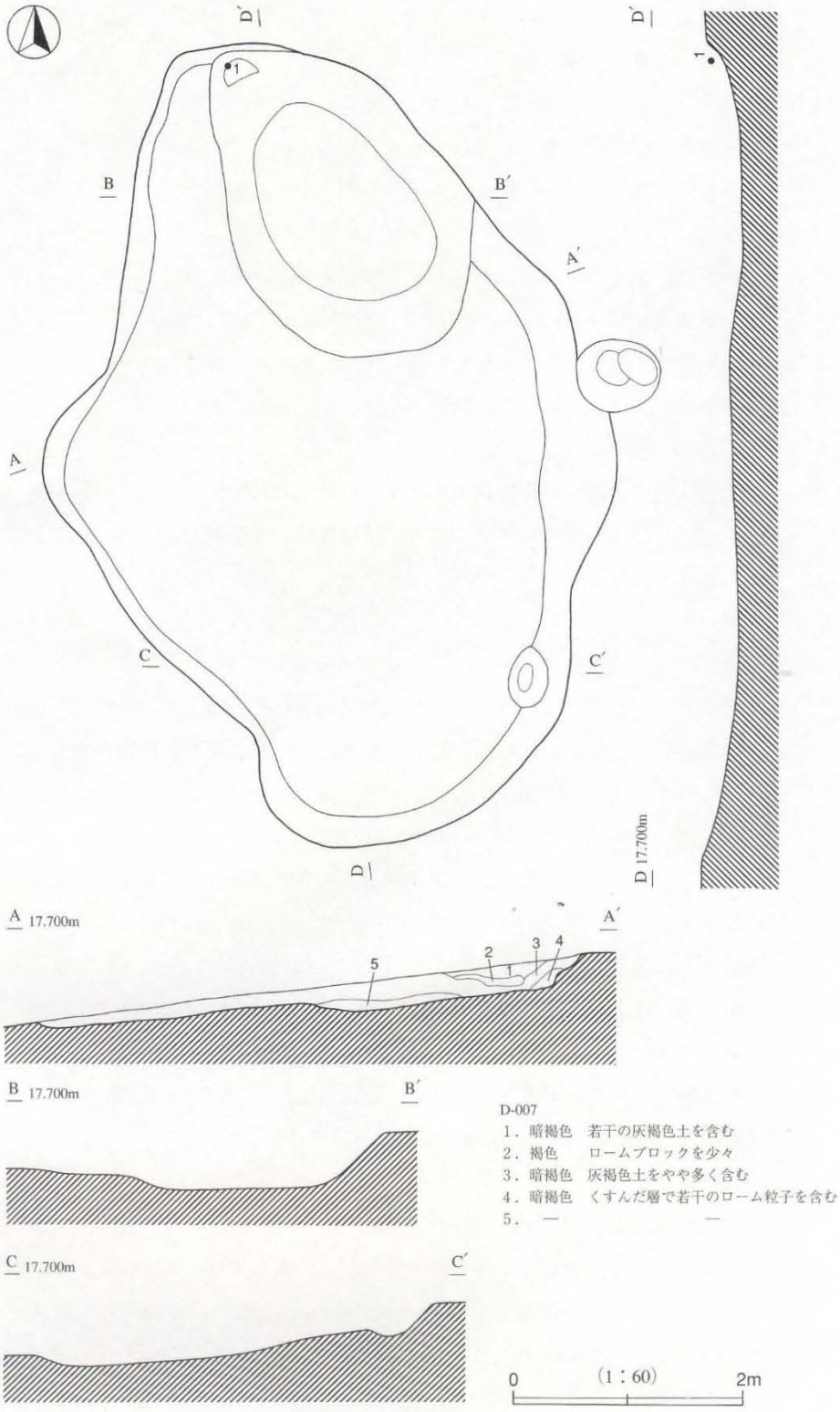
Ｄ－０１４（第26図）

調査区南西部、2C－35に位置する。Ｈ－００４、Ｄ－００６、Ｍ－００２・００４・００５、に近接する。Ｈ－００２・Ｍ－００３を切る。平面形は、プラン・底部とも隅丸長方形を呈する。長径2.60ｍ×短径1.92ｍ×深さ0.50ｍを測る。底部に２本のピットを有する。Ｐ－１は径44cm×37cm、深さ50cm、Ｐ－２は径32cm×15cm、深さ46cmをそれぞれ測る。

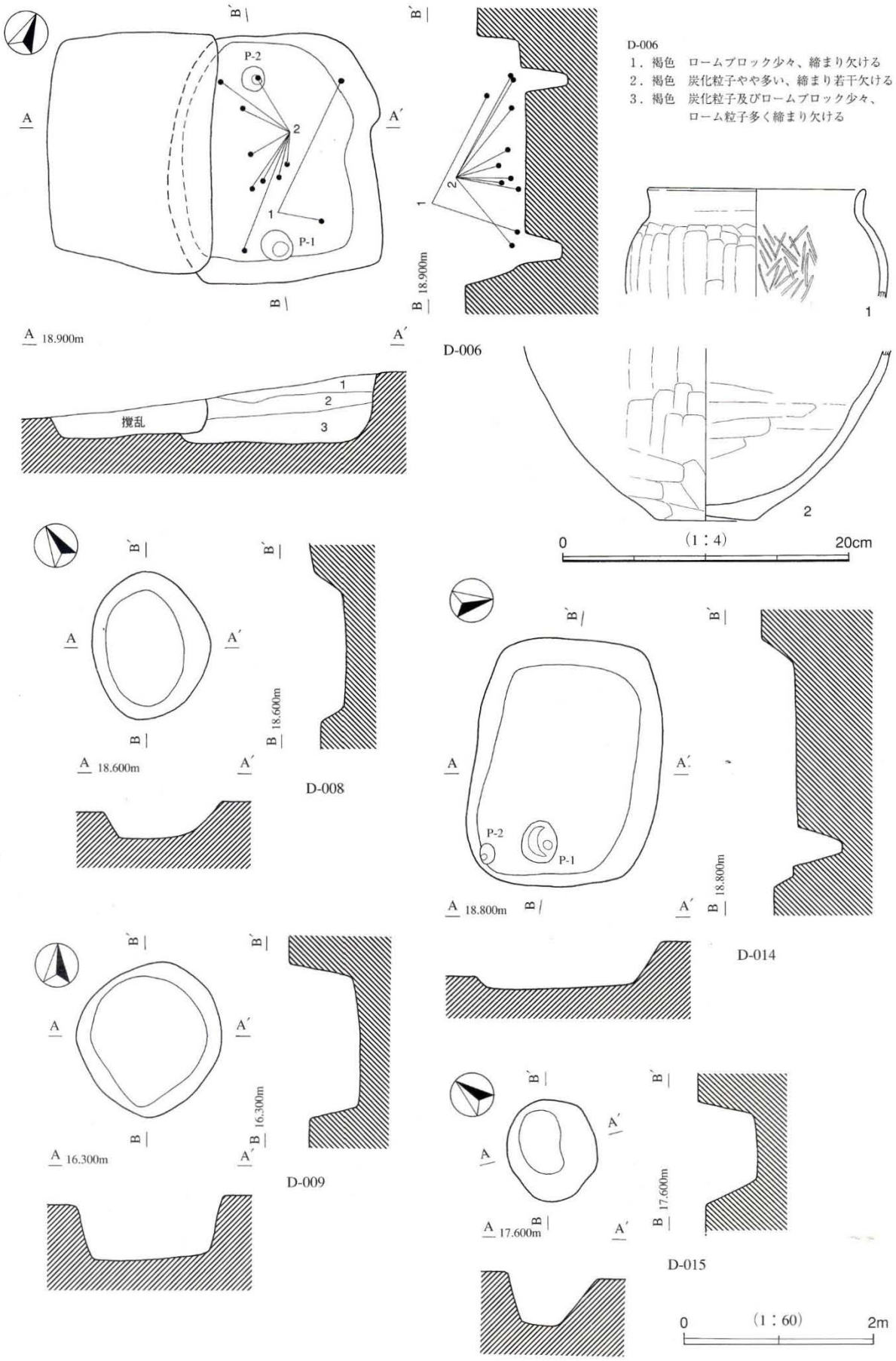
本土坑から遺物は出土していない。本土坑の性格は不明である。

Ｄ－０１５（第26図）

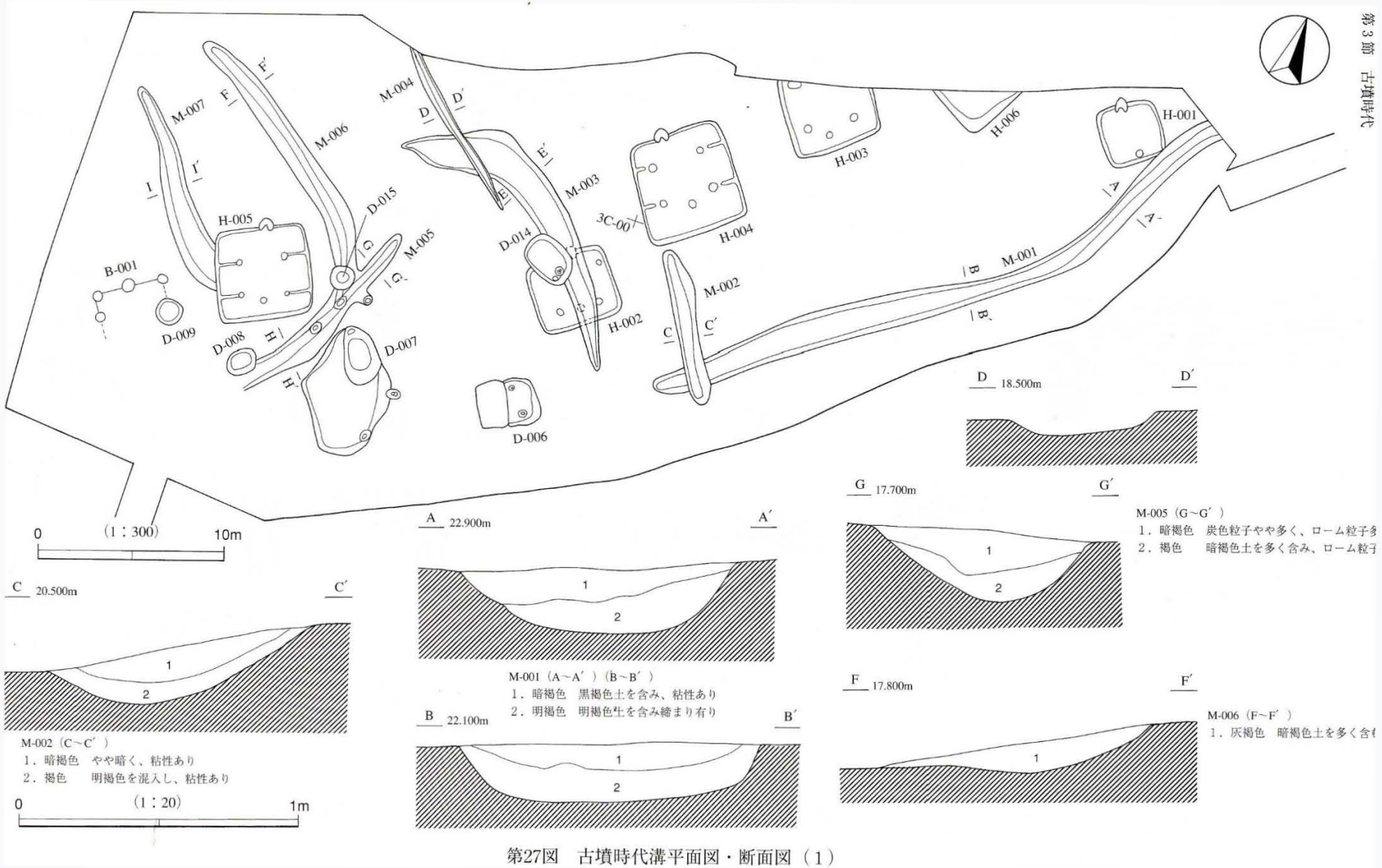
調査区西部中央、2C－16・26に位置する。Ｈ－００５、Ｍ－００５、Ｄ－００６・００７に近接する。Ｍ－００５・００６を切る。平面形は、プランは円形、底部は楕円形を呈する。長径1.50ｍ×短径0.93ｍ×深さ0.53ｍを測る。本土坑から遺物は出土していない。本土坑は、形状から判断して貯蔵穴と考えられる。



第25図　D-007実測図



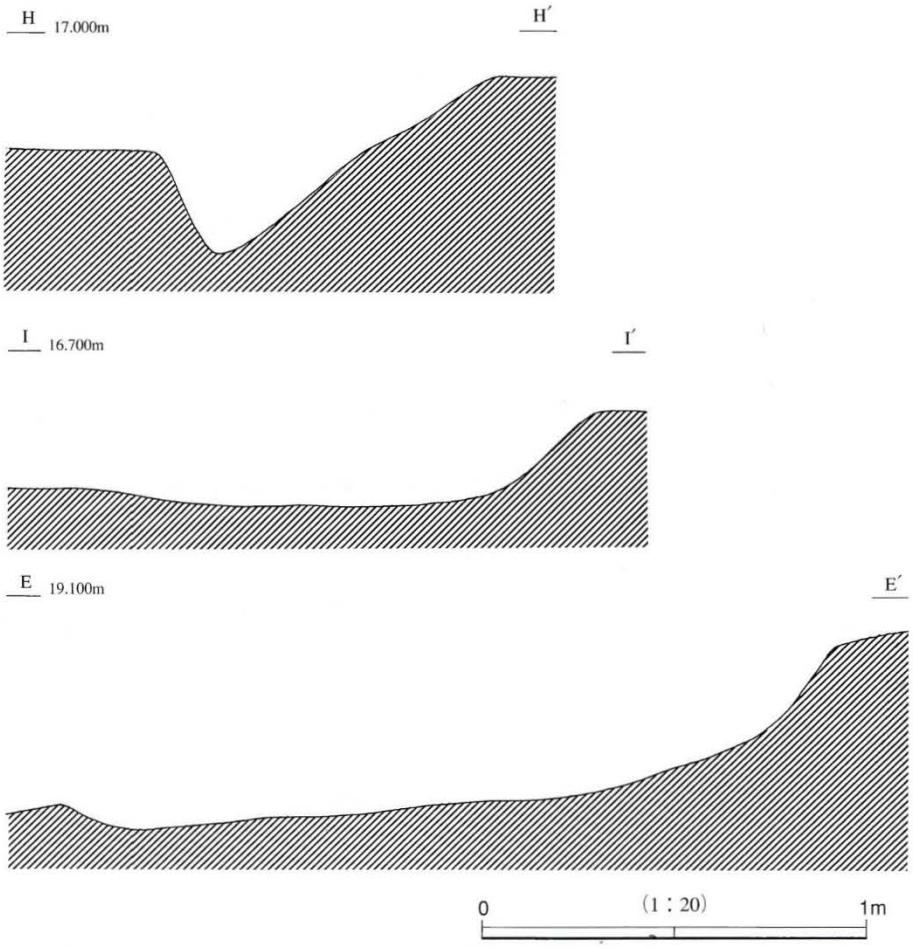
第26図　D-006・008・009・014・015実測図・出土遺物



第27図　古墳時代溝平面図・断面図（1）

第４項　溝状遺構（第27・28図）

調査区から古墳時代後期と思われる溝状遺構７条が検出された。調査区全域に谷部の等高線に対して平行あるいは直交するように計画的に配置される。溝状遺構同士に重複関係をもつが、計画的に配置されていることや溝状遺構同士が直交することからほぼ同時期の所産と考えられる。なお、溝状遺構は住居跡より新しく、土坑よりも古い。各溝状遺構からは、縄文土器の破片、古墳時代後期の土師器片が出土している。



第28図　古墳時代溝断面図（２）

Ｍ－００１

調査区北部南端、等高線に直交して台地上の北東方向から谷底の南西方向に向かって屈曲しながら走る。本遺構南端でＭ－００２と直交する。延長34.50ｍ、最大幅1.90ｍ、深さ0.03～0.34ｍを測る。

Ｍ－００２

調査区中央部、等高線に平行して北西方向から南東方向に向かって直線的に走る。本遺構南端でＭ－００１と直交する。延長8.50ｍ、最大幅1.10ｍ、深さ0.05～0.26ｍを測る。

Ｍ－００３

調査区中央部、等高線に平行して南西方向から北東方向かって５ｍ程直線的に走り、方向を変えて北西方向から南東方向に向かって直線的に走る。流路はＬ字状を呈する。Ｍ－００２・００３北西方向－南東方向流路・００６・００７と４ｍ～６ｍ間隔でほぼ平行して走る。本遺構北西部の南西方向－北東方向に走る流路でＭ－００４と直交する。また、同遺構南部でＨ－００２を切り、Ｄ－０１４に切られる。延長18.30ｍ、最大幅2.60ｍ、深さ0.02～0.39ｍを測る。

Ｍ－００４

調査区中央部北側、等高線に平行して北西方向から南東方向に向かって直線的に走る。Ｍ－００２・００３北西方向－南東方向流路・００６・００７とほぼ平行して走る。本遺構北西部でＭ－００３の南西方向－北東方向に走る流路と直交する。延長10.00ｍ、最大幅0.60ｍ、深さ0.06～0.16ｍを測る。

Ｍ－００５・Ｍ－００６

調査区南西部、等高線に平行して走る。Ｍ－００６は北西方向から南東方向に向かって曲線的に走り、本遺構南端でＭ－００５に合流し、方向を変えて北東方向から南西方向に向かって曲線的に走る。両遺構の合流部でＤ－０１５に切られる。Ｍ－００５は延長12.00m、最大幅1.20m、深さ0.13～0.28m、Ｍ－００６は延長1.60m、最大幅1.40m、深さ0.02～0.20mそれぞれ測る。

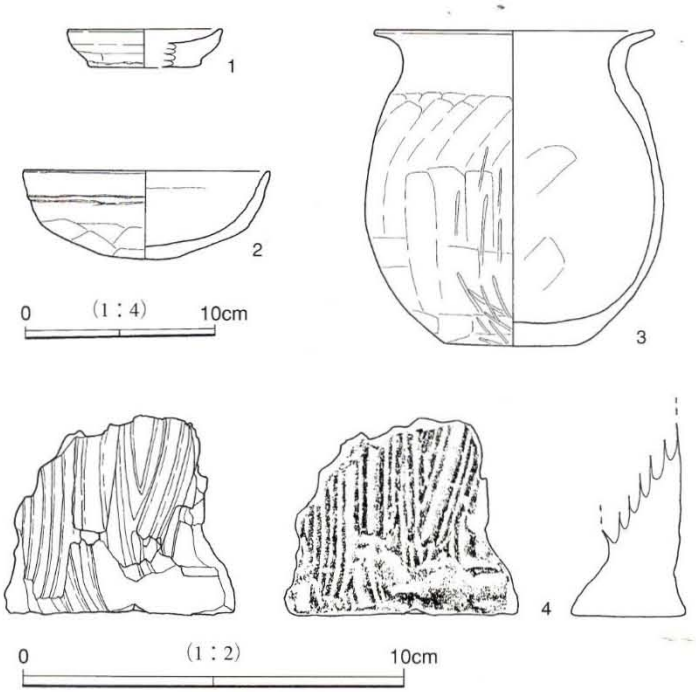
Ｍ－００７

調査区北西端、等高線に平行して北西方向から南東方向に向かって曲線的に走る。Ｍ－００２・００３北西方向－南東方向流路・００４・００６とほぼ平行して走る。本遺構南端Ｈ－００５を切る。延長11.00m、最大幅1.80m、深さ0.01～0.33mを測る。

第５項　調査区出土遺物（第29図）

歴史時代以降の遺物１点、確認調査出土遺物のうち３点、計４点を図示した。

１～２は土師器坏である。１は口縁～底部1/3遺存する。法量は、復元口径8.2cm、器高2.0cm、復元底径6.0cmを測る。ロクロ成形後、口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、体部下端ヘラ削り。底部切り離しは回転糸切り。古墳時代後期のＤ－００７から出土しているが、流れ込みであると思われる。２は口縁3/4程が遺存し、体部～底部が完存する。法量は、口径13.2cm、器高4.7cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後、内面のみヘラナデ。２は土師器甕で、口縁部1/4程、胴部1/3程が遺存し、底部が完存する。法量は、復元口径14.6cm、最大径15.6cm、器高16.6cm、底径7cmを測る。口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部ヘラ削り。３は円筒埴輪の底部破片で、重量は68.9gを測る。２・３は調査区中央やや西よりの第４トレンチから、４は調査区南端の第２トレンチから出土した。

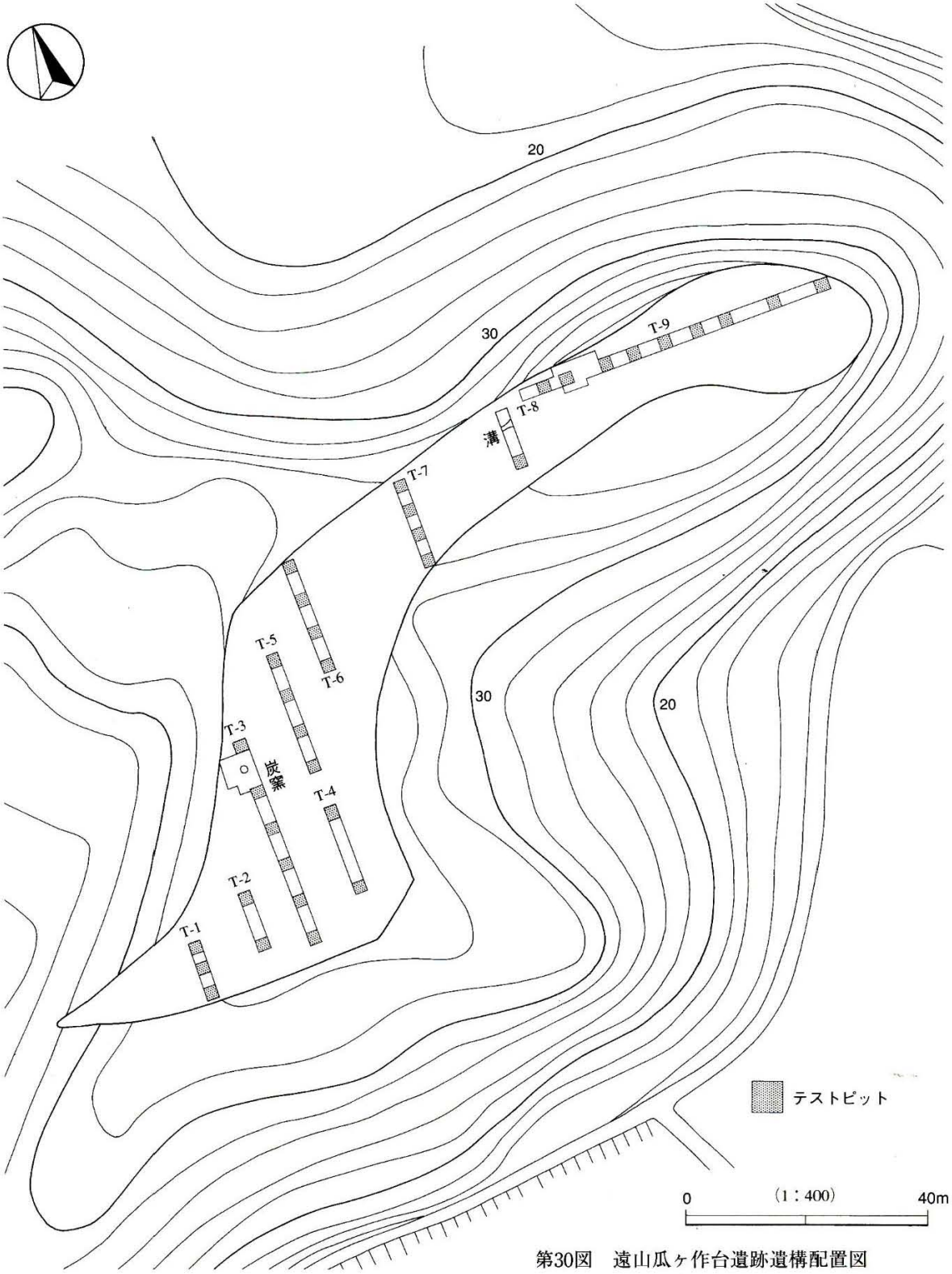


第29図　調査区出土遺物

第２章　遠山瓜ヶ作台遺跡

第１節　概要（第30図）

遠山瓜ヶ作台遺跡は、舌状台地である遠山支台の南側先端部に属する馬の背状の台地上に立地する。標高30～40mを測る。遺構は溝１条、炭窯１基が検出された。遺物は土師器の破片が出土しているが、図示するまでには至らなかった。



第30図　遠山瓜ヶ作台遺跡遺構配置図

第３章　まとめ

遠山瓜ヶ作谷遺跡からは、縄文時代・古墳時代後期の遺物・遺構が検出された。以下に時代毎の概要を記してまとめとする。

第１節　縄文時代の様相

既述してきたように調査区内からは、縄文時代の住居跡や屋外炉等の生活遺構の痕跡は検出されなかった。また出土数の多かった加曽利B式や荒海２式土器でも、半完形まで復元できるものもなく、底部片の出土数も掲載した３片のみである（注１）。このことから本遺跡は縄文時代の各時代において、生活の拠点となることはなく、本遺跡の北に接する標高40mの独立台地上に集落（山林のためか遺跡台帳には未登録）を営んだ人々が台地下の本遺跡を廃棄域として利用した痕跡が遺物包含層として遺されたと解釈するのが穏当であろう。（出土した土器片の断面を観察するとあまり摩滅しているものはなく、台地上からの廃棄後は埋没過程でローリング作用を受けていない）

では推定を重ねて本遺跡の調査成果から台地上の遺跡の動向を窺ってみると、前・中期は一過性の居住がなされ、後期加曽利Ｂ式期と晩期荒海２式期に集落が営まれたのであろう。（後期～晩期でも集落が営まれた時期以外は、一過性の居住と推定される）

そして台地上で荒海式期の集落が廃棄された頃、台地下の本遺跡は谷頭部の水場に集まる獣を対象にした罠猟（現存する遺構としては陥穴のみだが、昨今の研究成果により誘導施設なども想定される）のための狩猟域として利用されたのであろう。

注１‥長倉宮ノ前遺跡（現在整理中）は、本跡から支谷筋一つ北に隔てた台地奥部を開析する谷頭上に形成された荒海４式の遺物包含層であるが、完形まで復元できる個体はごく少なく、本跡と同じく破損した器物の廃棄域である。本跡と違うところは、土器の底部が50個体分出土したことや石器や焼土跡、骨粉などが伴出するなど生活痕跡を強く残している。

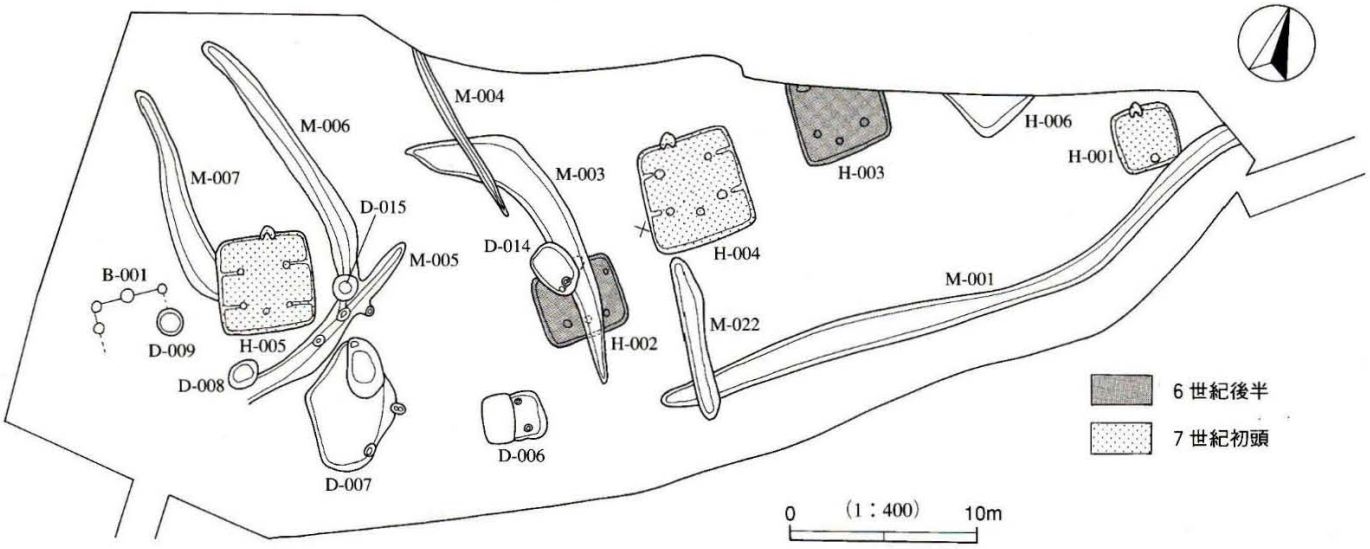
第２節　古墳時代の様相

竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡１棟、土坑６基、７条で構成される集落である。台地上の北東方向から南西方向に向けて10m程度の比高をもって緩やかに傾斜する谷部に立地する。谷部全面が調査されたわけではなく、集落は調査区北側に展開する可能性がある。

竪穴住居跡に重複関係を持たないことや時期の明らかな竪穴住居跡から判断すると、６世紀後半から７世紀初頭にかけて継続した集落とすることができる。土坑を除き、各遺構の主軸は、等高線とほぼ平行あるいは直交関係にあることや、集落の占地が時期的に変化しないこと（第31図）などから、この谷部を一単位として計画的に営まれた集落とすることができるであろう。

台地平坦部ではなく台地縁辺部・谷部・低地に立地する遺跡としては、松尾町八田太田台遺跡・山武町井之上遺跡・山武町古宿遺跡・佐倉市腰巻遺跡・松尾町中谷遺跡（第１図28）などがあげられる。

八田太田台遺跡では舌状台地の縁辺部に古墳時代後期から平安時代の集落が、井之上遺跡では、台地の縁辺部に古墳時代後期から奈良・平安時代の集落が、古宿遺跡では低位段丘に奈良時代の集落が、腰巻遺跡では谷底部（古墳時代後期）からその谷底部を見下ろす台地の縁辺部（平安時代）に立地する集落が、中谷遺



第31図　遠山瓜ヶ作谷遺跡古墳時代集落変遷図

跡では作田川谷に臨む古墳時代中期・後期・平安時代の集落が、それぞれ営まれていた。古宿遺跡を除く遺跡は、古墳時代中期から平安時代にかけて継続的にあるいは断続的に形成されたものであり、一集落として認識するのは困難であろう。他方古宿遺跡は奈良時代に一低位段丘を単位として形成された集落であり、本遺跡と共通した性格を有している。

参考文献

糸川道行　2001　「第４章　古墳時代～平安時代」『千葉東金道路（二期）埋蔵文化財発掘調査報告書８－松尾町中谷遺跡－』（財）千葉県文化財センター

小高春雄・柴田龍司　1987　「八田太田台遺跡」『主要地方道成田松尾線Ⅴ』（財）千葉県文化財センター

鈴木道之助・岡川宏道・谷戸三男・石倉亮治　1987　『佐倉市腰巻遺跡　－佐倉－第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』（財）千葉県文化財センター

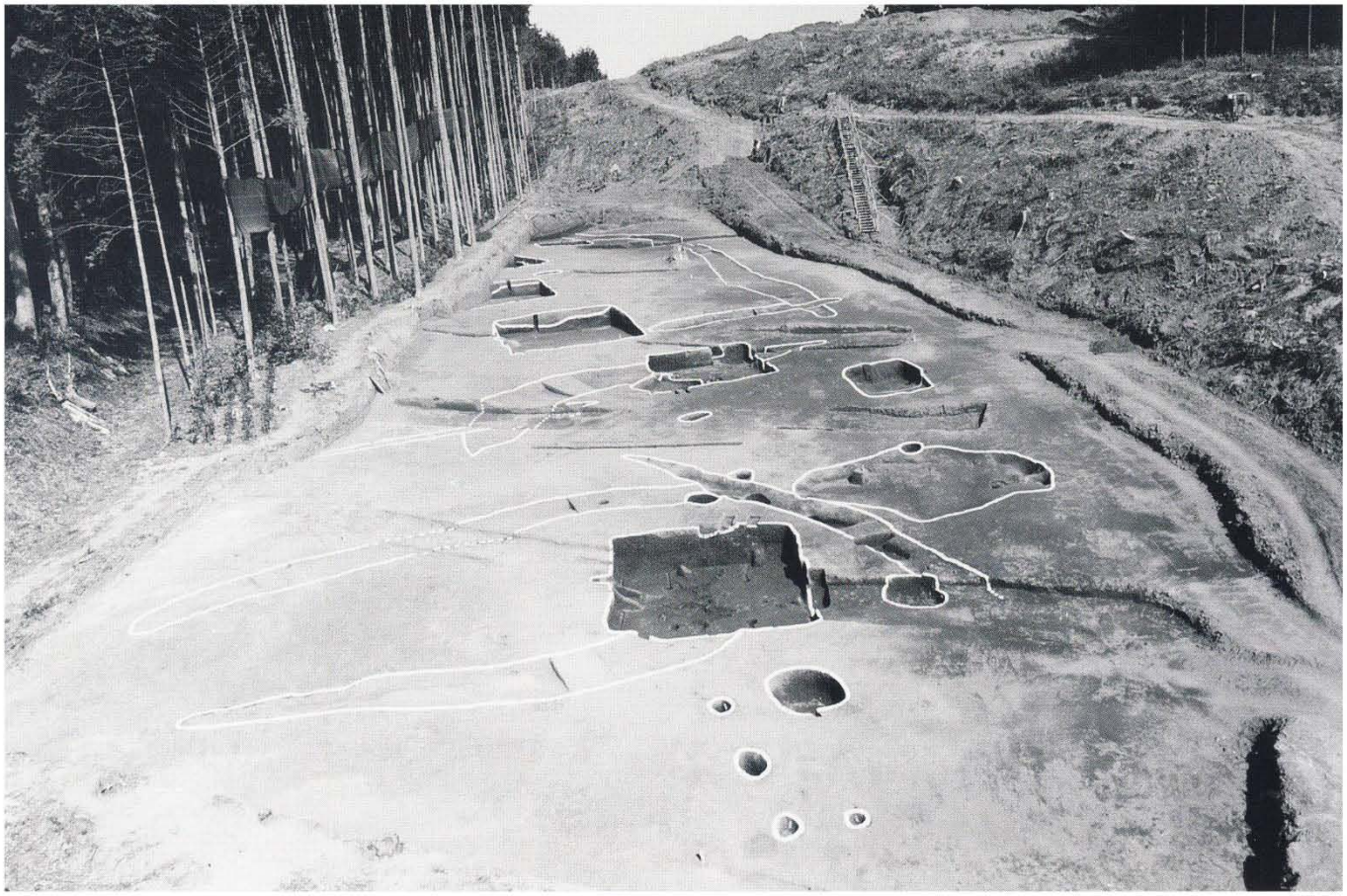
平山誠一　1996　『井之上遺跡』山武町教育委員会

吉田直哉　1999　『古宿遺跡』（財）山武郡市文化財センター

写　真　図　版

図版1　空から見た遺跡

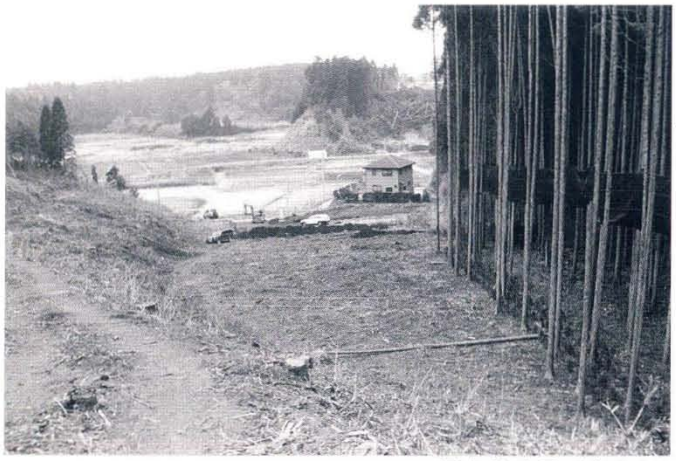
図版2　遠山瓜ヶ作谷遺跡全景



西から

南から

図版3　遠山瓜ヶ作谷遺跡の遺構(1)



調査前遠景（東から）

調査後遠景（東から）

H-001

H-002

H-003

H-004

H-005

H-006

図版4　遠山瓜ヶ作谷遺跡の遺構(2)

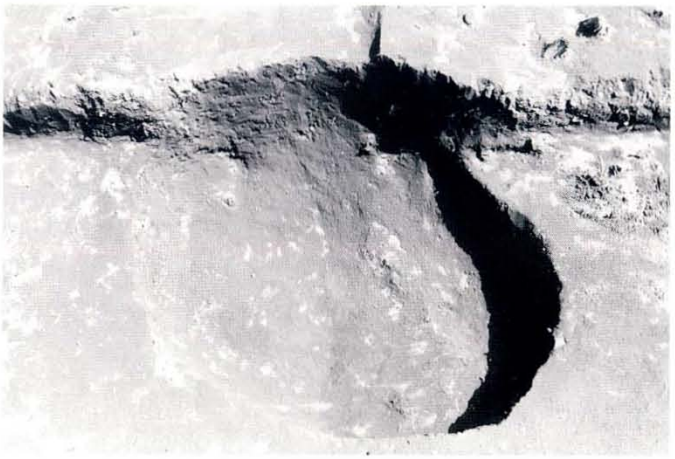
D-001

D-002

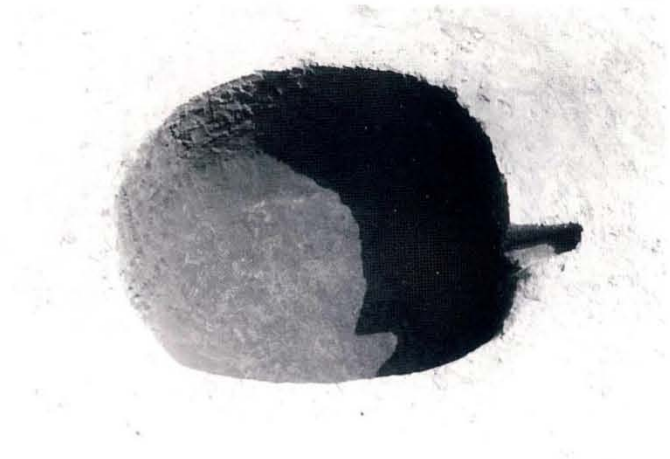
D-004

D-006

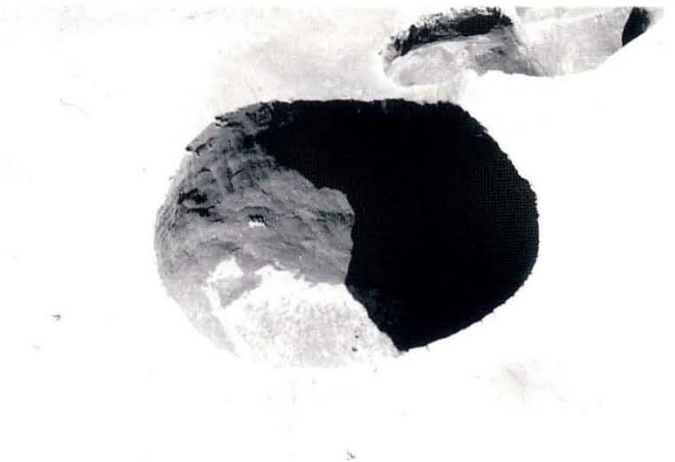
D-007



D-008

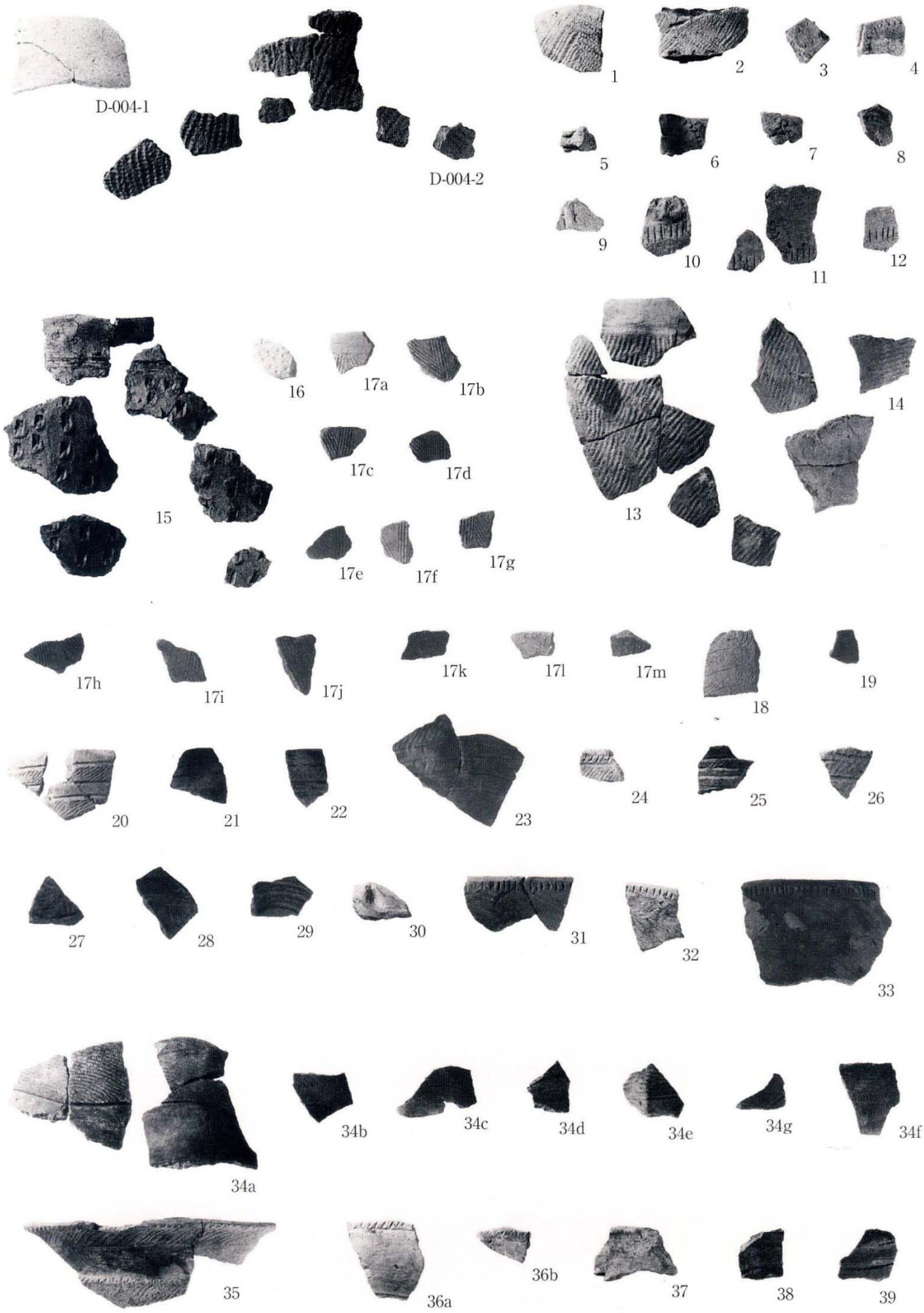


D-009

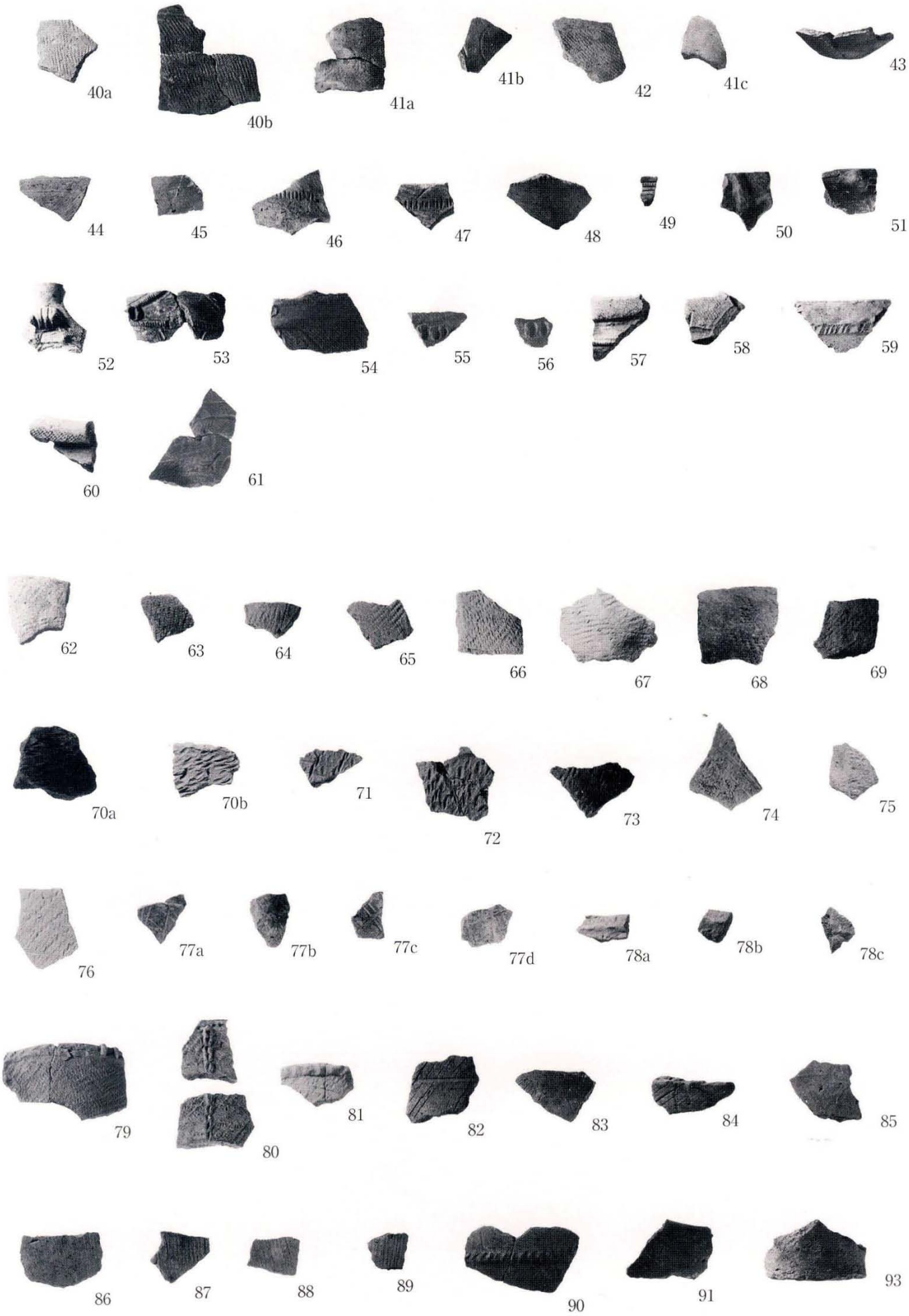


D-015

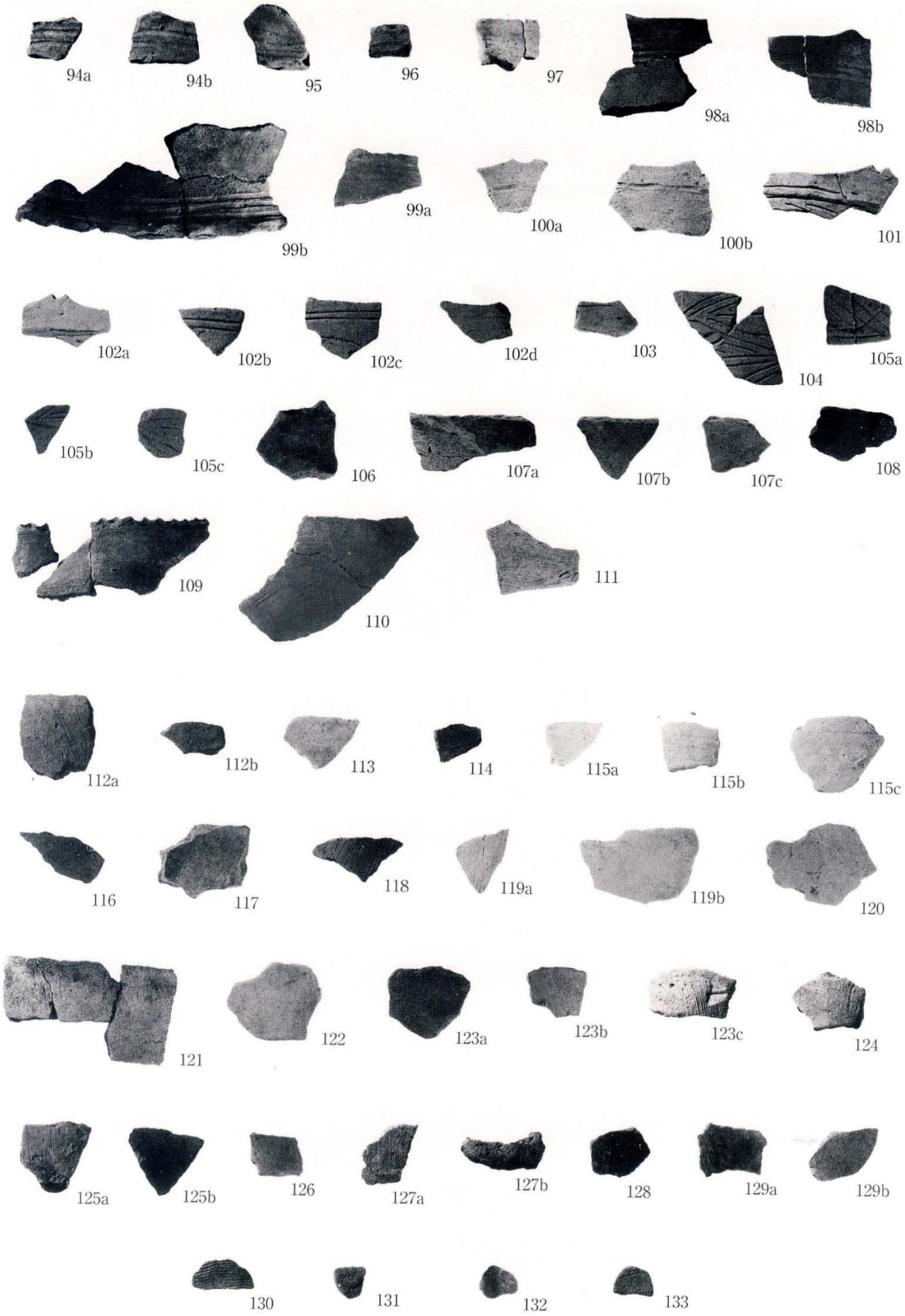
図版5　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器(1)



図版6　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器(2)



図版7　遠山瓜ヶ作谷遺跡の縄文土器(3)



図版8　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物(1)

H-001-1

H-001-2

H-001-3

H-001-4

H-001-5

H-001-6

H-001-7

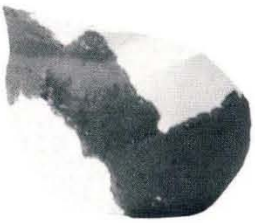
H-001-8

H-001-9

H-001-10

H-001-12

H-001-13


H-001-14

H-001-15

H-001-16

図版9　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物(2)

H-002-1

H-002-2

H-002-3

H-002-5

H-002-6

H-002-9

H-002-10

H-002-11

H-002-13

H-002-17

H-002-12

H-002-14

H-002-15

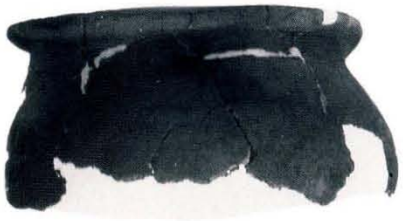
H-002-16

図版10　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物(3)

H-003-1

H-003-2

H-003-3


H-003-4

H-003-5

H-003-6

H-003-7

H-003-8

H-003-9

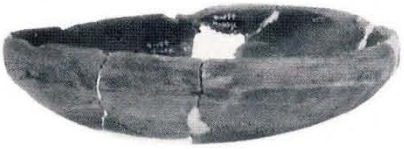
H-003-10

H-003-11

H-004-1

H-004-2

H-004-3


H-004-4

H-004-5

H-004-6

H-004-7

H-004-8

H-004-9

H-004-10

H-004-11

H-004-12

H-004-13

H-004-14

H-004-15

H-004-16

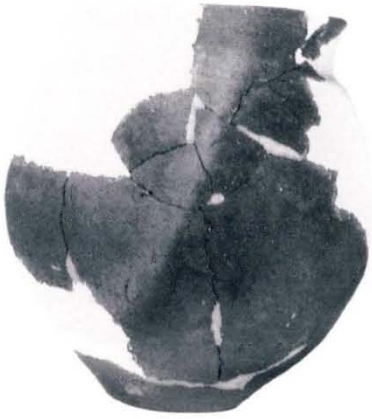
H-004-19

H-004-17

H-004-18

H-004-20

H-004-21


H-004-22

H-004-23

H-005-1

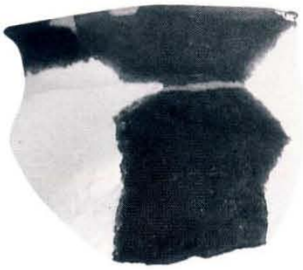
H-005-2

H-004-24

図版12　遠山瓜ヶ作谷遺跡の古墳時代の遺物(5)・他

H-005-3

H-005-4


H-005-5

H-005-6

H-005-7

H-005-8

H-005-9

H-005-10

H-006-1

D-006-1

D-006-2

第29図-1

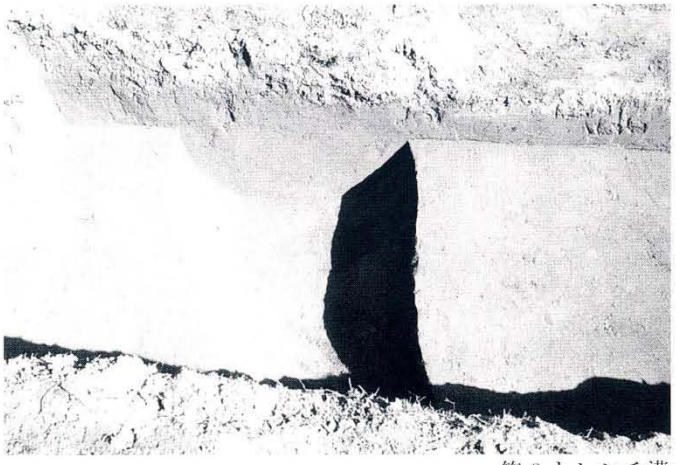
第29図-2

第29図-3

第29図-4

全景　西から

第7トレンチ



第8トレンチ溝

第8トレンチ

第9トレンチ

報告書抄録

ふりがな	とおやまうりがさくたにいせき　とおやまうりがさくだいいせき
書名	遠山瓜ヶ作谷遺跡・遠山瓜ヶ作台遺跡
副書名	国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書
巻次	I
シリーズ名	財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第82集
編著者名	吉田直哉・稲見英輔
編集機関	財団法人山武郡市文化財センター
所在地	〒299-3242　千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2
発行年月日	西暦2003年12月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
遠山瓜ヶ作谷遺跡（とおやまうりがさくたにいせき）	山武郡横芝遠山字瓜ヶ作（さんぶぐんよこしばまちとおやまあざうりがさく）77番地　他	12408	山文セ197	35度39分40秒	140度27分03秒	010202～010228 010301～010329	確認調査 （上層）270/2,700m² （下層）108/2,700m² 本調査 1,280m²	国道126号山武東総道路建設に伴う事前調査
遠山瓜ヶ作台遺跡（とおやまうりがさくだいいせき）	山武郡横芝遠山字瓜ヶ作（さんぶぐんよこしばまちとおやまあざうりがさく）74-1番地　他		山文セ198	35度39分43秒	140度27分05秒	010205～010314	確認調査 （上層）380/3,800m² （下層）144/3,800m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
遠山瓜ヶ作谷遺跡	狩猟域	縄文	陥穴2基、土坑1基	縄文土器	前期～晩期
	集落	古墳時代	竪穴住居5軒、掘立柱建物跡1棟、土坑6基、溝7条	須恵器、土師器、埴輪、鉄器、磨石	谷部に展開する集落
遠山瓜ヶ作台遺跡	散布地	古墳時代	溝1条	土師器	

千葉県山武郡横芝町

遠山瓜ヶ作谷遺跡
遠山瓜ヶ作台遺跡

－国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書－

印　　刷　　平成15年12月25日
発　　行　　平成15年12月26日

編　　集　　財団法人　山武郡市文化財センター
千葉県山武郡大網白里町金谷郷1356-2
TEL 0475-72-3211

発　　行　　千葉県道路公社

印刷・製本　　株式会社　弘　　文　　社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 047-324-5977